

67
3
267

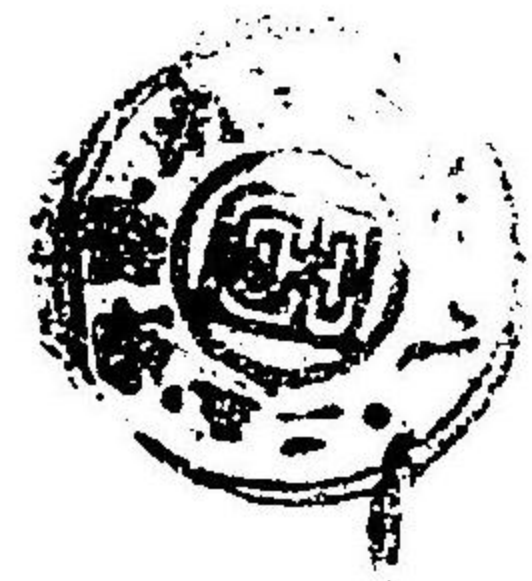
汪文公集
七

狂言全集 中卷

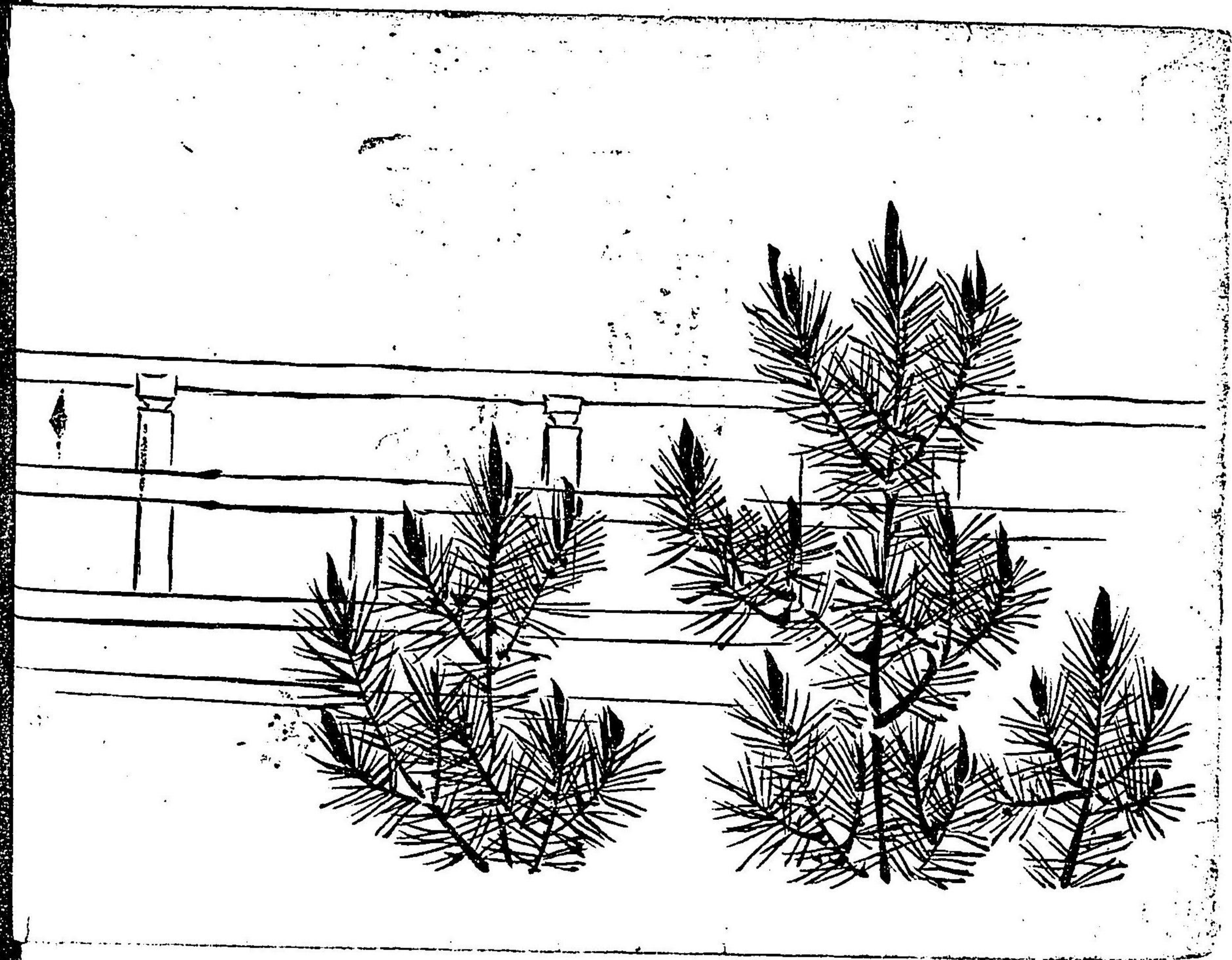
67
269

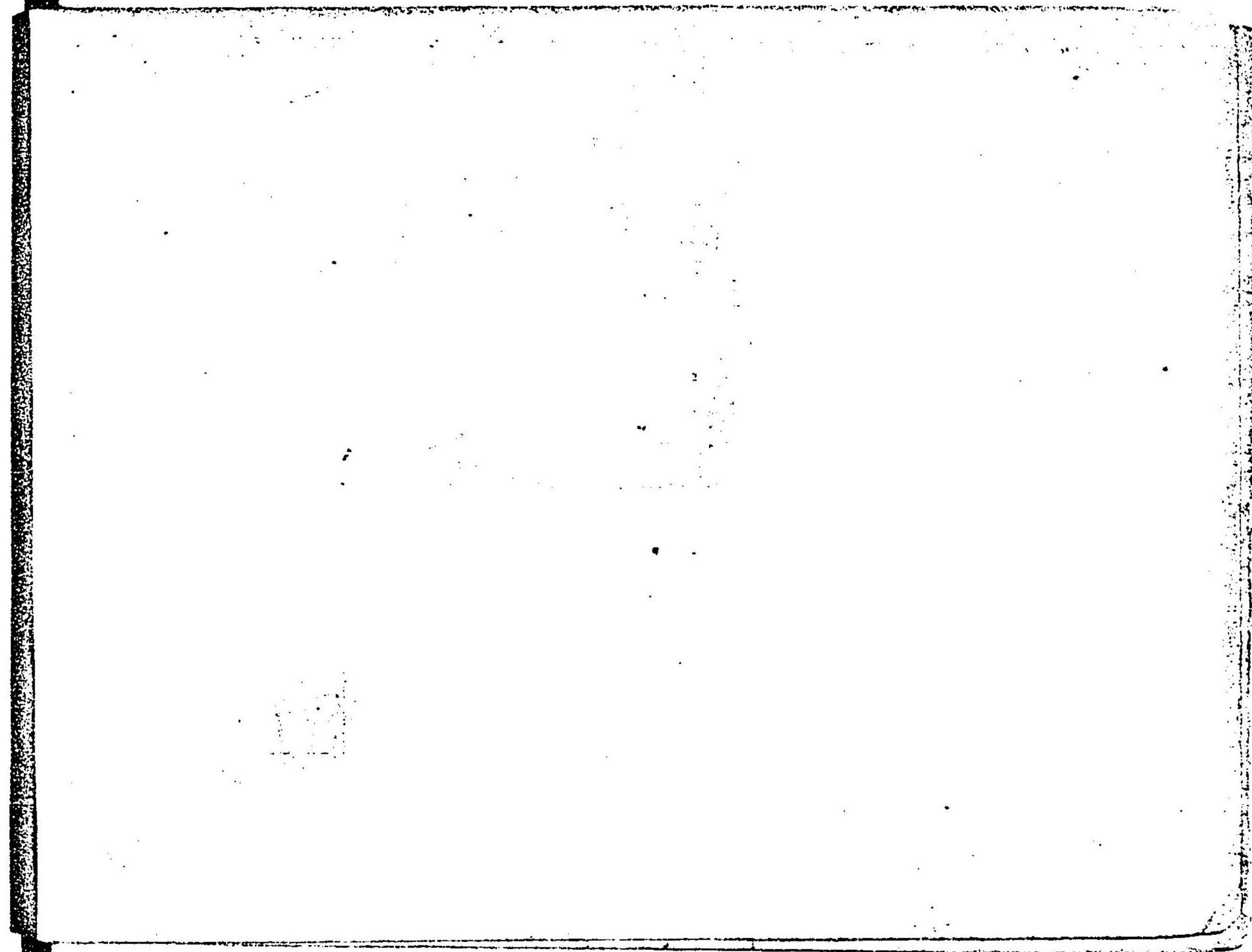
狂言集全卷
狂言集
記

十五番



博文館 寄贈







狂言全集中卷目次

續狂言記卷の一

一 連歌毘沙門

三人……………一

シテ毘沙門

唐冠。毘沙門面かけ。鉦持ち。か

アド男二人

みそばつき。半袴。脚絆。腰帶
長袴。鬘斗目。ちひさ刀。扇持つ

二 秀句大名

三人……………八

シテ大名

鬘斗目。素袍。大臣烏帽子。ちひさ

アド男一人

刀
半袴。腰帶

三 居杭

三人……………一六

シテ居杭

半袴。上下。腰帶。頭巾持つ

アド男二人

長袴。算置腰に算袋さげ

四 飛越新發意

二人……………二七

シテ新發意

布頭巾。上十徳。下半袴。腰帶。

アド男

長袴。ちひさ刀佩し

五 鶯

二人……………三三
シテ男 長袴。鬘斗目。ちひさ刀。何差竿持つ
アド男 半袴。上下。腰帶

六 河原新市

五人……………三七
シテ男 半袴。上下。腰帶
女 はく小袖。ゆばうし
アド男三人 長袴。ちひさ刀

七 子盗人

三人……………四六
シテ男 半袴。上下。腰帶
女 はく小袖。ゆばうし
アド男 長袴。ちひさ刀佩し。太刀持つ

八 荷 文

三人……………五二
シテアド二人 半袴。上下。腰帶
主 長袴。ちひさ刀佩し

九 針立雷

二人……………五五
シテ雷 鬼頭巾。武悪の面かけ。厚板。下

十 墨塗女

三人……………六四
アド醫者 布頭巾。十徳。下半袴
シテ大名 鬘斗目。素袍。大臣烏帽子。ちひさ刀
女 はく小袖。ゆばうし
アド男 半袴。上下。腰帶

續狂言記卷の二

一 蛭子大黒天

三人……………七三
シテ大黒 大黒の頭巾。同面かけ。法被。下半袴。脚絆括り。右に槌持ち。左に袋擔げ
蛭子 蛭子同く面かけ。折烏帽子。水衣。半袴括り。鯛釣り竿持つ
アド男 長袴。ちひさ刀さし

二 鶏立江

二人……………七八
シテ男 半袴。上下。腰帶

アト主 長袴。ちひさ刀さし

三 雁 争 三人..... 八二

シテ大名 炭斗目。素袍。大臣烏帽子。ちひ
アト男 長袴。上下。腰帶
所の者 長袴。ちひさ刀さし

四 菊 花 二人..... 八八

シテ男 長袴。上下。腰帶
主 長袴。ちひさ刀さし

五 見物左衛門 一人..... 九五

男 長袴。上下。脚絆括り。菅笠持つ

六 成上物 三人..... 九九

シテ男 長袴。上下。腰帶
盗人 同前
主 長袴。ちひさ刀さし

七 寶 笠 三人..... 一〇四

シテ男 長袴。腰帶

アト男二人 長袴。ちひさ刀さし

八 土産鏡 二人..... 一一五

シテ男 つき素袍。下脚絆括り。腰帶
女 長袴。ちひさ刀さし

九 鱸庖丁 二人..... 一二二

シテ男 長袴。ちひさ刀さし
アト男 長袴。上下。腰帶

十 瓜盗人 二人..... 一三四

シテ盗人 長袴。上下。腰帶
アト男 出立同前なり

續狂言記卷の三

一 岡太夫 四人..... 一四三

シテ聲 素袍。折烏帽子。ちひさ刀
女 長袴。ちひさ刀
男 長袴。ちひさ刀
太郎冠者 長袴。上下。腰帶

二 竹子争

三人.....一五〇
シテアド二人 半袴。上下。腰帶
アド男 長袴。ちひさ刀さし

三 朝比奈

二人.....一五八
シテ朝比奈
上白衣。下大口。太刀佩き。腰帶。さばき髪。白鉢巻。棒つき。
七ツ道具
アド鬼 鬼の頭巾。武悪の面。厚板。下半袴括り。杖つき

四 暇袋

三人.....一六五
シテ主 長袴。ちひさ刀
太郎冠者 半袴。上下。腰帶
女 ちひさ刀佩し。大きな袋持つ

五 鬼養子

二人.....一七一
シテ鬼 鬼の頭巾。武悪の面。厚板
女 ちひさ刀佩し。子を抱き出

六 聾座頭

三人.....一七六
シテ聾 半袴。上下。腰帶
座頭 布頭巾。水衣。下半袴。杖つき
主 長袴。ちひさ刀佩し

七 金岡

二人.....一八六
シテ金岡 素袍。慶斗目。ちひさ刀。大筆擔
女 げ出る
ちひさ刀佩し

八 昆布布施

四人.....一九〇
シテ男 初は、半袴。上下。腰帶。後に。
十徳。布頭巾
女 ちひさ刀佩し。後に。衣。
帽子
住持 頭巾。衣。珠數
施主 長袴。ちひさ刀

九 六人僧

六人.....一九六

男三人

初。半袴下拵り。腰帶。後に。布頭巾。上十徳。

女三人

初。はく小袖。ゆばうし。後に。衣。花の帽子。

十 寢 聲

シテ主

長袴。ちひさ刀。半袴。上下。腰帶。

二人……………二〇三

太郎冠者

半袴。上下。腰帶。

續狂言記卷の四

一目近大名

シテ大名

髪斗目。素袍。大臣烏帽子。ちひさ刀。

四人……………二〇七

太郎 次郎

半袴。上下。腰帶。長袴。ちひさ刀。

賈人

二 櫻 詠

シテ男

半袴。上下。腰帶。長袴。ちひさ刀。

二人……………二一八

アド主

三 六 地 藏

四人……………二二〇

シテアド三人

布頭巾。水衣。下半袴。腰帶。錫杖。鈴。數珠持なり。

田舎漢

半袴。上下。腰帶。

四 柑 子 俵

シテ男

半袴。上下。腰帶。扮装同前。

アド二人

扮装同前。

五 膏 藥 練

シテ男

半袴。上下。腰帶。扮装同前。

二人……………二二九

アド男

扮装同前。

六 俄 道 心

シテ男

半袴。上下。腰帶。布頭巾。衣。

三人……………二三七

アド坊主

長袴。ちひさ刀。鯛。鮒。經。

七 禁 野

シテ大名

髪斗目。素袍。大臣烏帽子。ちひさ刀。弓。矢。

三人……………二四八

アド二人

長袴。ちひさ刀。

八 猿替勾當

四人……………二五六
 シテ勾當 角帽子。水衣。下袴
 女 女 はく小袖。ゆばうし
 猿引 猿引 半袴。上下。腰帶。杖持ち。船腰
 にさし
 猿の面。輕衫

九 狐塚

三人……………二六五
 シテ太郎 半袴。上下。腰帶
 アド主 長袴。ちひさ刀さし
 次郎冠者 半袴。上下。腰帶

十 どちはぐれ

一人……………二七五
 僧 布頭巾。鬘斗目。衣。數珠持つ

續狂言記卷の五

一 牛馬

三人……………二七七
 シテアド二人 半袴。上下。腰帶
 目代 長袴。ちひさ刀
 三人……………二八八

二 入間川

三人……………二九八
 シテ大名 鬘斗目。素袍。大臣烏帽子。ちひ
 さ刀
 太郎冠者 半袴。上下。太刀持つ
 入間 長袴。ちひさ刀

三 路蓮坊主

三人……………二九八
 シテ出家 衣。布頭巾
 アド男 初半袴。上下。後に十徳
 女 はく小袖。ゆばうし

四 箕かつぎ

二人……………三〇八
 シテ男 素袍。ちひさ刀さし
 女 はく小袖。ゆばうし

五 蟹山伏

三人……………三一五
 シテ山伏 頭巾。篠懸。上水衣。下半袴。
 脚絆括り。腰帶。ちひさ刀さし
 上は何も着ず。金剛杖に檜笠付擔
 げ
 蟹 黒頭面。けんとく。下袴括り。厚
 板

六 素襖落

三人……………三三〇
シテ男 半袴。上下。腰帶。
アド二人 長袴。ちひさ刀さし

七 碓石

三人……………三三二
シテアド二人 半袴。上下。腰帶。
宿主 長袴。ちひさ刀さし

八 三人片輪

四人……………三四三
主 長袴。ちひさ刀。
座頭 上水衣。下半袴。布頭巾。
杖つき
二人共に半袴。上下。腰帶

九 算勘掣

六人……………三五五
シテ掣 素袍。折烏帽子。ちひさ刀。
シウト。二人掣 長袴。
太郎冠者 半袴。上下。腰帶

十 節分

二人……………三六五
シテ鬼 鬼の頭巾。武悪の面。厚板。下半

女

袴。脚絆。括り菅笠。蓑かけ。
杖つき
はく小袖。ゆばうし

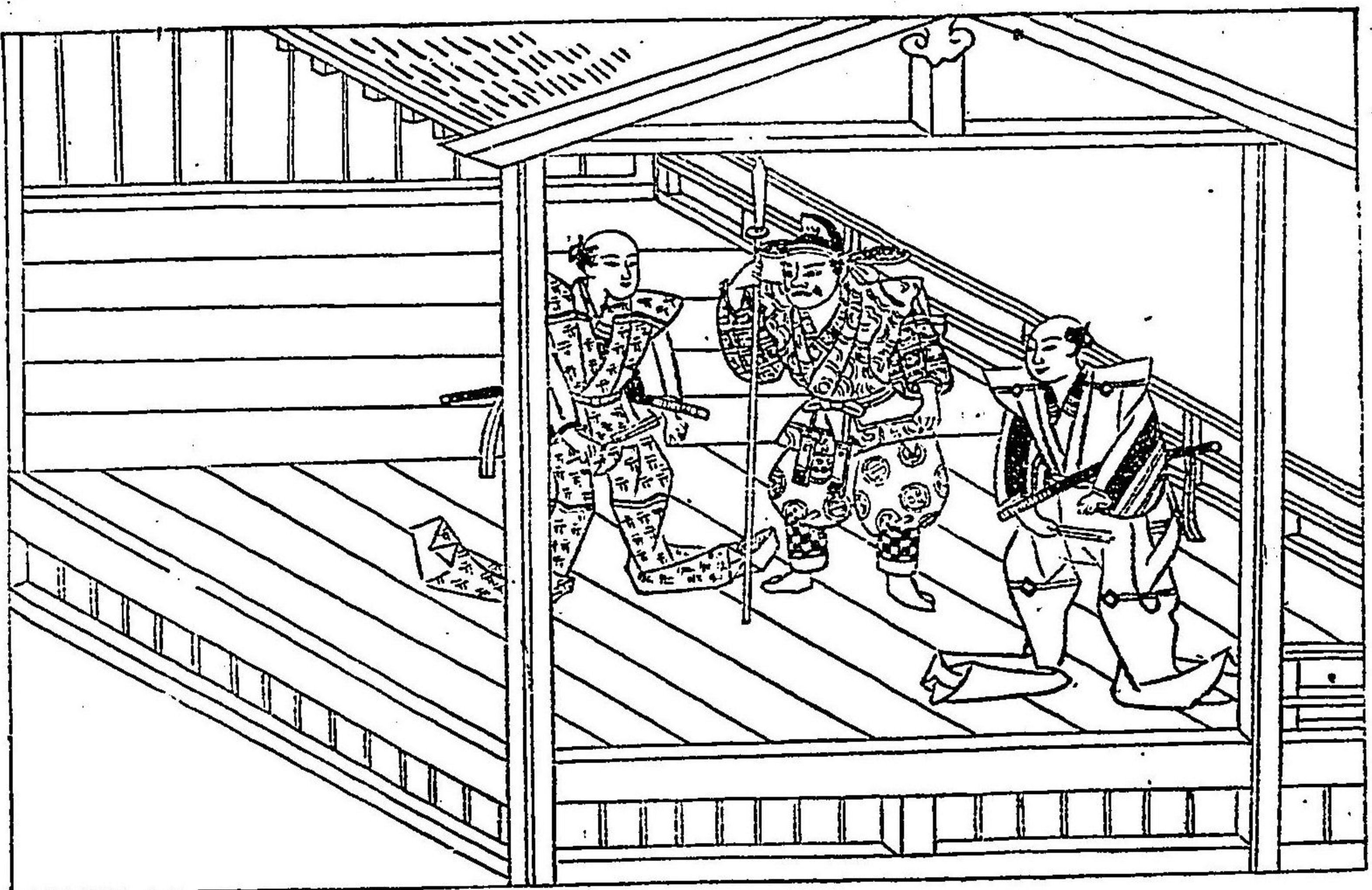
狂言全集 中巻 目次 終

續狂言記 卷の一

一 連歌毘沙門

▲初アト「是は此邊に住居する者で御さる。誠に一日く送る程に。今日は早。大晦日になつて御さる。夫に付今夜は。鞍馬の多門天へ年籠致す。當年も相變らず参らうと存する。又某ばかりでも御座らぬ。爰に平常同道致す人が御さる。是も平常の事で御さる程に。待てつら(連れら)るゝで御せらう。誘ふて参らうと存する。そろりく」と参らう。遊行。やれく。毎年く相變らず。斯様に年籠致すは。目出度事で御さる。参る程にこれぢや。物もう。内に御さるか。▲アト「表に案内が有。誰様で御さる。やア。好うこそ御出なされたれ。定て今夜は。年籠に御出なされうと存じ。待兼て居ました。▲初アト「仰せらるゝ通りで御さる。待兼て御せらうと存じて参つた。いざ参りましょか。▲アト「中々。御供致ましょ(せう)。▲初アト「さアく。御ざれく。▲アト「心得ました。遊行。▲初アト「何と思召。足下も身共も。互に無事で。相變らず年籠

致すは。芽出度事で御さるのう。▲アト「仰せらるゝ通りで御さる。多門天の御蔭で。次第に仕合せも好うなつて。此やうな嬉しい事は御さらぬ。▲初アト「左様で御さる。やア参る程に。はや御前で御さる。拜ませられ。▲アト「心得ました。▲初アト「扱。平常の如く年籠致さう。▲アト「好う御さる。緩と御され。少まどろみませう。▲初アト「おゝ。おら難有や。南無多門天。く。扱もく有がたや。やア。夜が明た。起さう。申々。夜が明た。いさ下向致さう。▲アト「誠に夜が明ました。下向致さう。▲初アト「さアく。御されく。▲アト「なうく。夜前足下は夜半の頃。何やらわつはさつはと仰せられた。何事で御座つた。▲初アト「いや。別の事でも御さらぬ。夜前は多門天より。御福を下されて御さる。▲アト「それは芽出度事で御さる。何を被下たぞ。▲初アト「福ありのみを下されて御さる。▲アト「それは足下一人に下されたでは有まい。兩人参るからは。兩人の内へと下された物ぢや。先づそれは此方へおこさせられ。▲初アト「否々。身共一人に下された。やる事はなりませぬ。▲アト「如何でも取らねばならぬ。▲初アト「其義なら。も一度多門天の御前へ戻つて。御前で連歌をして。其句柄に依つて誰人なりと取らうと思ふ



が。何とわらう。▲アト「是は一段好う御さる。さア〜
 戻りませう。早これ御さる。下に御され。然らば足下から
 連歌をなされ。▲初アト「いや先なされまいか。▲アト」是
 非足下なされ。▲初アト「然れば。何と致して好う御さる
 ぞ。斯うも御さらうか。▲アト」何とで御さる。▲初アト
 「毘沙門の。よくわりのみと。きくからにと。致して御さる。
 此下の句を付させられ。▲アト「されば何と致さうぞ。く
 らまぎれより。むかでくひけり。と致して御さる。▲初ア
 ト「是は芽出度好う付ました。いざ。吟じて見ませう。▲
 二人 歌「毘沙門の。福ありのみと。きくからに。くらまぎれ
 より。むかでくひけり。▲シテ「セウ」びしやもんの。ひ
 かりをばなつてと。ころから。くらまぎれより。おらはれた
 り。▲二人「是は異香薫じて。只ならぬ御方で御さるが。
 足下は誰様で御さるぞ。▲シテ「身共は。汝らが常々信仰
 する多門天。現れ出て有ぞとよ。▲二人「はア。難有御さ
 る。先是へ御來臨なされて下されませ。▲シテ「床机をく
 れい〜。▲初アト「畏つて御さる。此へお腰掛られませ。
 ▲シテ「やい〜。汝等は毎年々々相變らず。年籠をする
 程に。福貴になしてとらせうぞ。▲初アト「難有御さるま
 す。▲シテ「汝も樂うなしてとらせうぞ。▲アト「それは

唇なう御さります。▲シテ「夫に付。夜前福ありのみを
 與へたれば。我の人のとせりあふ(競合)。それを此方へお
 こせ。好いやうに配分のしてやらうぞ。▲アト「それ〜。
 早う上さしませ。▲初アト「此で御さります。上ます。▲
 シテ「是へおこせ。汝等は小刀が有か。▲二人「否。小刀
 は持ませぬ。▲シテ「嗜の無い者共ぢやな。それなら。此
 鋒で割つてやらうが。此で割つたら錆がこう(來)。研ぎち
 んをするか。▲初アト「それ程の事は致しませう。▲シテ
 「是は戯事ぢや。是はなんばの鋒といふて。錆る鋒ではあり
 ない。然らば配分をしてやらう。歌い〜。わりのみ
 わかんとて。なんばのはこをとりなほし。まん中に押當て。
 さつくり。扱も〜。片割も無う。好う割れた。さア取れ。
 汝も取れ。餘り見事なわりのみで。酢だまりが出来た。是
 は。多門天が徳分にして食べう。扱最前聞けば。何やら連
 歌をした。其連歌は如何に〜。▲二人 誦フシセリ「びしや
 もんの。よくわりのみと。きくからに。くらまぎれより。む
 かで食ひけり。▲シテ 誦「びしやもん連歌のおもしろさに。
 舞臺進「おもしろさに。あくま降伏。災難をはらうほこを汝
 にとらせけり。▲アト「やら〜。けなりやけなりやな。わ
 れらも福をたび玉へ。▲シテ「ほしがる。とこそ尤なれ尤な

れと。▲三人 誰かふとをぬいで汝に取せ。是迄なりとてひしやもんでんはく。この所にこそ納りけれ。

同

大藏流木

▲アト「罷出たる者は。此邊に住居致す者で御座る。今日は初寅で御座るに依て。鞍馬へ参詣致さうと存ずる。夫に付。毎年申合せて参る人が御座る。これへ誘引て参らうと存ずる。斯う参つても内に居らるればよう御座るが。例年の事で御座る程に。定めて忘れは致されまいと存ずる。いや。参る程にこれちや。先案内を乞はう。物申。案内申。▲アト二「いや。表に物申とある。案内とは誰ぞ。誰様で御座る。▲ア一「私で御座る。▲ア二「いえ。此方の御出を待つて居りました。▲ア一「定めて左様で御座らうと存じました。夫ならば追付て参りませう。▲ア二「夫がよう御座らう。▲ア一「先此方から御され。▲ア二「先次第に御座れ。▲ア一「せんと仰せらるゝに依て。私から参りませう。▲ア二「夫がよう御座る。▲ア一「アアア。御座れ。▲ア二「参ります。▲ア一「扱何と思召すぞ。毎々毘沙門を信仰致し。初寅には必参詣致しますれば。次第に福貴になるやうに御座る。▲ア二「仰せらるゝ通り。毘沙門を信仰致してより。段々樂しうなるやうに御座る。▲ア一「いや。何彼と申内に。これは早や御前で御座る。▲ア二「誠に御前で御前。▲ア一「これへ寄つて拜せられ。▲ア二「心得ました。▲ア一「何時参つてもしんく。と致して。殊勝な御前では御座らぬか。▲ア二「中々殊勝な御前で御座る。▲ア一「さらば通夜を致しませう。▲ア二「一段とよう御座らう。兩人とも疑る。▲ア一「はアア。あら有難や。多聞天より御福を下された。▲ア二「申々。何事で御座る。▲ア一「只今多聞天より。福右の實を下されて御座る。▲ア二「夫はたい目出事で御座る。さらば私へも配分なされて下され。▲ア一「いや。私へ下された御福で御座るに依て。配分致す事はなりません。▲ア二「是は如何な事。私も例年申合いて。歩を運ぶことで御座るに依て。私へも下されぬ事は御座るまい。是非共配分なされて下され。▲ア一「夫ならば

連歌を致して。其上では如何様とも致しませう。▲ア二「夫がよう御座らう。▲ア一「先此方から致句をなされ。▲ア二「先此方からなされ。▲ア一「夫ならば出合に致しませう。▲ア二「夫がよう御座らう。▲ア一「何とて御座らうぞ。▲ア二「何とがよう御座らうぞ。▲ア一「斯うも御座りませうか。▲ア二「はや出ましたか。▲ア一「毘沙門の。▲ア二「毘沙門の。▲ア一「福ありの實と聞くからに。と致しませう。▲ア二「夫ならば。くらまされにて。むがで喚びけり。と付けませう。▲ア一「これは一段と好う御座る。と吟じて見ませう。▲ア二「よう御座らう。▲ア一「毘沙門の福ありの實と聞くからに。▲ア二「くらまされにて。むがで喚びけり。▲二人「いや。御殿の内が震動致し。露香薫じ。只ならぬ鉢で御座る。▲ア一「これへ寄つて御座れ。▲ア二「心得ました。▲シテ一「セイ「毘沙門の光を放つて所から。くらまされより願はれたりの。▲二人「これへきらびやかに出立せられたは。如何様な御方で御座るぞ。▲シ「汝等は得知らぬか。▲二人「何共存じませぬ。▲シ「是は毘沙門天なるが。毎年ノ奇特に歩を運ぶに依て。樂しうなして取らせうと思ひ。福ありの實を興へたれば。われ取らう。彼取らうと争ひ。連歌をしたがや。さしさに。配分をして取らせうと思ひ。多聞天是まで願はれ出でてあるぞと。▲二人「是は有難や。御座る。先斯う御來臨なされて下され。▲シ「心得た。床机をくれ。▲ア一「畏つて御座る。念いで床机を上げさせられ。▲ア二「心得ました。はア。御床机で御座る。▲シ「兩人ともこれへ出。▲二人「畏つて座る御。▲シ「扱汝等は。毎年ノ奇特に歩を運ぶなア。▲二人「はア。▲シ「さらば。最前の福右の實を配分をして取らせう。これへおこせ。▲ア二「いや。私の方には御座りませぬ。▲シ「それならばそこに在らう。是へ出せ。▲ア二「いや。私の方では御座らぬ。▲シ「身共が前でも其如く争ふ。儘に汝に渡した程に。これへおこせ。▲ア一「夫ならば上げませう。はア。ありの實で御座る。▲シ「これへおこせ。▲ア一「畏つて御座る。▲シ「扱も。見れば見る程見事なありの實ちや程に。やる事はならぬ。▲二人「是は如何な事。折角下された物を。取返へさせらるゝと申事があるもので御座るか。何卒配分なされて下され。▲シ「是は戯事。配分をして取らせうが。何ぞ又物があるか。▲ア一「いや。何も御座りませぬ。▲シ「汝は持たぬか。▲ア二「私も持たませぬ。▲シ「扱々汝

等は不嗜な者ぢや。夫ならば是非に及ばぬ。此鋒で割つて取らせうが。鋒で割つたならば。定めて錯るであらうが。其時分に磨賃は出すか。▲二人「磨賃程の事は出ませう。▲シ「是も戯事。是は雨掛の鋒と云ふて。錯る鋒では無いやい。▲二人「はア。▲シ「いで。右の實を割らんとして。なんばの鋒を取直し。真中よりさつくり。はア。二ツになつた。先汝取れ。▲ア「畏つて御座る。▲シ「さア。それも取れ。▲ア二「畏つて御座る。▲シ「餘り見事な右の實で。酢がたまつた。これが毘沙門が徳分に致さう。扱最前の連歌はいかに。▲二人「毘沙門の。福有の實と聞くからに。くらまされにて。むかひ喰ひけり。▲シ「毘沙門連歌のおもしろさに。(舞動)びしやもん連歌の面白さに。悪魔降伏打拂ふ。鋒を汝にとらせけり。▲ア二「あら。けなりや。な。われにも福をたび給へ。▲シ「欲しがる事こそ尤なれ。とて。兜をわいで汝に取らせ。これまでなりとて毘沙門天は。此所にこそ納まりけれ。

シテ毘沙門

着付大模倣厚板(但法被の肩取ても)そはつき。大口。透冠(おのゝきて)。腰帶。扇子さし。紙はさう付る。鋒。毘沙門の面

アト二人

着付小島色無段熨斗目。素襖村かける。折烏帽子。小き刀。扇子。

作物 鋒一本(鋒先一尺箱置。柄五尺三寸布卷。な五紙切)

二 秀句大名

▲シテ「八まん大名。此中の彼方此方の御参合は。夥しい事で御座る。夫に付太郎冠者を喚び出し。尋る事が有る。

やう。太郎冠者在るかやう。▲太郎冠者「はア。御前に居ります。▲シテ「汝を喚び出す事。別の事では無い。此中の彼方此方の御参合は。夥しい事で無いか。▲太「御意の通り。夥しい事で御座る。▲シテ「それに付。汝に尋る事が有る。各の一所に寄つて。何やら云ふてどつと笑ひ。笑ひめさるは何事ぢや。▲太「彼は秀句をいふて。それが可笑いとわつて笑はせられます。▲シテ「して汝は。其秀句を知つて居るか。▲太「いや。私は存じませぬ。▲シテ「身共も秀句を稽古して云ひたいが。何としたら好かる。それなら。汝は街道へ行て。秀句を知つた者が有らば抱へて来い。▲太「畏つて御座る。▲シテ「最早行くか。▲太「参ります。▲シテ「頼戻れ。▲太「はア。▲シテ「えい。▲太「やれ。俄な事を仰せ付られた。街道へ参り。何卒して抱へて参らう。道行。誠に今迄は。私一人で暇も御ざらぬ。秀句を抱へさせられたら。少休息致さう。やア。参る程に。海道ぢや。先づ爰に待ちませう。▲遠國者「罷出たるは。遠國方の者で御座る。某上方を見物致さぬ程に。此度都へ上らうと存る。又好さうな所が有らば。奉公をも致さうと存る。先づ。徐々と上らう。▲太「やア。是へ好さうな者が参つた。言葉をかけて尋ねませう。なう

く。これこれ。▲遠「此方の事か。何事で御さる。▲太「中々。足下の事ぢや。足下は何方から何方へ行く人ぞ。▲遠「私は遠國の者で御さる。奉公の望で都へ上ります。▲太「それは幸の事ぢや。某が頼うだ人は。お大名ぢや。是へ申て出さうが。只今でもおりやらうか。▲遠「中々。参りませう。▲太「それなら。さア。おりやれ。▲遠「参りませう。道行。▲太「假初に言葉をかけて。好い縁であらう。▲遠「これは定て。多少の縁で御さらう。▲太「なう。足下は。何と秀句がなるか。▲遠「然れば。秀句は。此指げて居ます傘に付てなり。一つ二つは申ませう。▲太「それは一段の事ぢや。御意に入るであらう。やア。何かと云ふうちにこれぢや。是に待たしませ。同道した通り申さう。▲遠「心得ました。▲太「中々。頼うだ人御さりますか。▲シテ「やア。太郎冠者が戻つたさうな。戻つたか。▲太「只今歸りました。▲シテ「何と。秀句を云ふ者を抱へて来たか。▲太「中々。抱へて参りました。▲シテ「やい。始ある事が終も有る。ぐわをいはう。答へ。▲太「畏て御さる。▲シテ「やい。太郎冠者。居るか。▲太「はア。▲シテ「居るか。▲太「御前に。▲シテ「今の聲を聞かうぞ。▲太「中々。承りませう共。▲シテ「行て云はうは。

秀句に。遙々の所好う来た。此へ出て目見えをせい。其上秀句を聞かうと云ふて。此へ出せ。▲太「畏つて御さる。なう。居さしますか。▲遠「是に居ります。▲太「只今頼うだ人。廣間へ出させられた。彼へ出て。目見えをせされ。其上秀句を聞かうと仰せらるるわ。▲遠「心得ました。▲太「さア。出さしませ。秀句これへ出まして御さる。▲シテ「此が秀句か。遙々の處好うこそ来たれ。早う秀句を聞きたい。我御料は何方から来たぞ。▲遠「嶋から参つた。▲シテ「遙々大義ぢや。先づ早やう秀句が聞きたい。▲遠「はねをつて参つた。▲シテ「骨折であらうと秀句をいへ。▲遠「かみげにく。▲シテ「かみげとは。▲遠「え申まい。▲シテ「退居ろ。やい太郎冠者。彼奴は秀句を云ふと思へば。何やらかみげにく。得申まいとぬかす。彼のやうな奴は。何の役に立まい。早ういなせ。▲太「貴殿には。何も御存無いに依てで御さる。彼が申事は。彼の傘に付ての。皆秀句で御さる。嶋から参つたと申は。傘にしと申所が御さる。かみげは。紙の事。皆傘に付ての秀句で御さる。▲シテ「扱は左様か。耻かしや。何も知らぬ者ぢやと思ふて。彼が笑ふであらう何とせうぞ。行て云はうは。秀句に。側で使はうと思ふて。心を引見ん爲。

刀の柄に手をかけたれば。傘で受け外したは。早速の利た
 事ぢや。堪忍するなら扶持をせう。其上まだ秀句を聞かう
 といふて此へ出せ。▲太「畏つて御さる。なう〜」。居り
 やるか。▲遠「これに居ります。▲太「秀句に。頼うだ人
 の仰せらるゝは。側近う使はうと思ふて。刀の柄に手をか
 けたれば。傘で受て外したは。早速な事ぢや。堪忍をする
 なら。扶持をなされうす。又秀句を聞かうと有る。彼へ御
 出やれ。▲遠「畏つて御座る。▲シテ「秀句。最前は肝潰し
 たであらう。今の秀句は聞きぢや。さア〜。又秀句を云
 ふて聞かせい。此刀は秀句の出来た褒美に取らすぞ。また
 秀句を云へ。▲遠「是は思ひも寄りませぬ。御刀を下され。
 辱なう御さる。▲シテ「扱も〜。面白い。傘に付て辱
 なう御さるは出来た。をかしい秀句ぢや。此上下。小袖を
 脱でやつて。秀句聞かう。▲太「是は御無用で御さる。▲
 シテ「何が惜かる。これ〜。此上下。小袖は着古るした
 れども。此も其方にやるぞ。▲遠「是は又重々拜領致し。
 難有御さる。▲シテ「扱も〜。をかしい事かな。傘の秀
 句に。難有とは出来た。扱も〜。秀句はをかしい物ぢや。
 ▲遠「なう〜。太郎冠者殿。此傘は私が張りました。
 此を貴殿へ上ますといふて。上て下され。▲太「心得た。

▲遠「一段の仕合せで御さる。すかさうと存ずる。▲太「申
 々。此は秀句が手張にはりました傘で御さる。差上ますと
 申ます。▲シテ「此傘をくれう筈は無いが。何と思ふてく
 れた。合點が行かぬ。定しこれは。古の小歌の心であらう
 なア。太郎冠者。▲太「其歌は何と申す。▲シテ「小歌節
 「雨の降には御さるな。傘故に名のたつに。扱も〜。秀
 句と云ふものは。寒いものぢや。何々。寒や寒や。

同 秀句傘

大藏流本

▲シテ「此邊に隠れもない大名です。天下治り。目出たい御代で御座れば。
 此間の彼方此方の御参會は夥しい事で御さる。夫に付。何れもの密合はせ
 られて。一言云ふてはどつと笑ひ。二言云ふてはどつと笑はせらるゝが。
 何共合點が秀らぬに依て。太郎冠者を呼出し。承らうと存ずる。常の如く
 喚出して。汝を呼出す事。別なる事でもない。天下治り。目出たい御代なれ
 ば。此間の彼方此方の御参會は。何と夥しい事ではないか。▲太郎冠者「御
 意の通り。あなた此方の御参會は。夥しい事で御座る。▲シテ「それよ。い
 夫に付。汝に尋ねる事がある。▲太「夫はいかやうな事で御座る。▲シテ「何
 れもの。一つ所へ寄り合はせられて。一言云ふてはどつと笑ひ。二言云ふ
 てはどつと笑はせらるゝが。あれは何とした事ぢや。▲太「此方は。あれ
 を御存じ御座らぬか。▲シテ「いや。何共知らぬ。▲太「あれは。秀句こ
 せ言と申て。面白いもので御座る。▲シテ「何ぢや。秀句こせ言と云ふて。
 面白いものぢやと云ふか。▲太「左様で御座る。▲シテ「某は又。其様な事
 は知らず。身共が身の上のことでも云ふて。笑はせらるゝと思ふて。殊の
 外氣遣をしたいやい。▲太「御存なければ。御尤で御座る。▲シテ「扱。某
 も其秀句こせ言が習ひたい程に。教へてくれい。▲太「いや。私は存じま
 せぬ。▲シテ「夫ならば。何としたものであらうぞ。▲太「何と寫されて好

う御座らうぞ。▲シ「いや。夫ならば。汝は太儀ながら。今から上下の街道へ行く。秀句をよも云ひ。又奉公をよもするものを抱へて来い。▲太「畏つて御座る。▲シ「早く戻れ。▲太「心得ました。常の如く。太郎冠者道行詞文相撲同断。秀句。名乗。道行。文相撲など同断。常の如く言葉をかけて。文相撲などの如く云ふて。一へん廻りて。扱。我御料は。秀句がなるか。▲秀句「秀句を申すと申程のことでは御座らぬが。私に余を細工に致すに依て。此傘に付ての秀句ならば。何程なり共申ませう。▲太「夫は一段の事や。斯様に申も。別なる事でもおられない。頼うだ人は。殊ない秀句好で。秀句さへ云へば。悦ばせらるゝに依ての事でおりにや。▲秀「只今も申す通り。傘についての秀句ならば。何程も申ませう。▲太「さア。おりにやれ。おりにやれ。▲太「頼うだ人は。今か。と御待兼であらう。其方を抱へた事を申上げたならば。殊ない御機嫌であらうぞ。▲秀「夫は一段の事で御座る。扱。程は違ふ御座るか。▲太「今少しぢや。念がしめ。▲秀「心得ました。▲太「何彼と云ふ内に戻り着いた。(冠者。秀句を待たして内に遣入る所より。シテ。過を云ふ所まで常の如し。シテ。過を云ひ。床机にかゝり)▲シ「太郎冠者。これへ出い。▲太「畏つて御座る。▲シ「何と。今のは聞かうか。▲太「夥しい御聲で御さつたに依て。定めて承りませう。▲シ「い。云はうは。秀句に。造々の所を太儀にこそあれ。追付け秀句が聞きたいに依て。これへ出いといへ。▲太「畏つて御座る。常の如く。秀句に。御聲をおきまつたかと云ふて。主の云ふたる通り云ふ。▲秀「畏つて御座る。▲太「つとと御出やれ。▲秀「心得ました。はア。秀句出まして御座る。▲シ「秀句はどれからおりやつた。▲秀「しまから参つた。▲シ「夫は造々の所を太儀にこそあれ。さらば秀句を聞かう。▲秀「骨折つて参つた。▲シ「鳥からならば。骨もをりやう。さア。秀句を聞かう。▲秀「小骨折つて参つた。▲シ「小骨も折らうぞ。秀句を聞きたい。▲秀「徒然に申さう。▲シ「何と徒然まで待たるゝもので。早う秀句をいへと云ふに。▲秀「かみけで候。▲シ「かみ氣とは。▲秀「得申すまい。▲シ「しさり居る。▲太「早う立たしめ。▲シ「やい。太郎冠者。今のを聞いたか。秀句を聞かうと云へば。鳥から来たの。骨折つて参つたの。徒然に申さうの。剩へ。得申すまいと云ふ。あの様な者が。何の役に立つものぢや早う追跡してやれ。▲太「先。御心を鎮

めて。よう聞かせられい。只今彼奴が申たは。傘に付ての秀句で。殊の外出来まして御座る。▲シ「何と云ふと。今のは傘に付ての秀句で。悉くよう出来たと云ふか。▲太「中々。左様で御座る。▲シ「是は如何な事。某は又。其様な事は知らず。刀の柄に手をかけた。はア。彼奴が心中が恥しいが。何としたならば好からうぞ。▲太「何と偽されてよう御座らうぞ。▲シ「夫ならば。行て云ふは。今の秀句。悉く聞事にこそあれ。さうあれば。ゆく。は側近もつかふ者ぢやに依て。心を引見ん爲に。刀の柄に手をかけたれば。取り敢へず側に在つた傘で受けたところは。ゆく。は用にも立たう者と思ふて満足する。又秀句が聞きたいに依て。これへ出いと云へ。▲太「畏つて御座る。いや。喃々。をりやるか。▲秀「これに居ります。私ばあの様な。御氣の早い殿様に。御奉公はなりました。最早斯う参りませう。▲太「いや。先御待ちやれ。頼うだ人仰せらるゝは。今の秀句悉く(主の云ふた通りを云ふ)又秀句が聞きたいと仰せらるゝ程に。あれへお出やれ。▲秀「夫ならば。心得まして御座る。はア。秀句出まして御座る。▲シ「なう。秀句。▲秀「はア。▲シ「今の秀句。悉く聞事にこそあれ。又行々は。側近もつかふ者ぢやに依て。心を見ん爲に。刀の柄に手をかけたれば。側の傘でうけた處。行々は。用にも立たう者と思ふて満足する。▲秀「左様に思召て下さるれば。近來視着に存じます。▲シ「はア。傘に付て。視着に存じます。それら笑ひする。太郎冠者。何と面白くはないか。▲太「殊の外。面白う御座ります。▲シ「此扇子を取らすると云へ。▲太「畏つて御座る。これ。此扇子を下さるゝと仰せらるゝ。▲秀「これは結構なる御扇子を拜領致して。大慶に存じます。▲シ「傘に付て。大慶に存じます。又空笑ひして。太郎冠者。これも殊の外出来たなア。▲太「左様で御座る。▲シ「此太刀がたなを取らすると云へ。▲太「畏つて御座る。なう。此御太刀がたなを下さるゝと仰せらるゝ。▲秀「これは存じよらず。御太刀がたなを頂戴致して。満足に存じます。▲シ「傘に付て。満足に存じます。又空笑ひする。傘に付て。満足に存じます。殊の外面白くはないか。▲太「殊の外面白う御座ります。▲シ「汝は何もやらぬか。▲太「私は何も御座らぬ。▲シ「吾い事を云ふ。此小袖上下を遣らう。取つてくれい。▲太「畏つて御座る。▲シ「何とよいか。▲太「一段とよう御座る。▲シ「早う取らせい。▲太「心得ま

した。これく。此御小袖。御上下を下さる。▲秀「これは色々拜領致して。身に餘つて難有う存じます。〇と云ふて。立て。一の松へ行き。太郎冠者を呼ぶ。▲シ「傘に付て。身に餘つて難有う存じます。▲秀「申。太郎冠者殿く。▲太「いや。彼奴が呼びます。いて参りませう。▲シ「早う来て来い。▲太「畏つて御座る。何事でおりにや。▲秀「此傘は。私の手紙に致いた傘で御座るに依て。頼うた御方へ上げて下されい。▲太「心得た。▲秀「好い時分で御座る。さつさう(外づさう)と存ずると云ふて引込む。▲秀「彼奴が申すは。此は手紙に致いた傘で御座るに依て。此方へ上げますと申す。▲シ「む。此傘を身共に呉ると云ふか。▲太「中々。▲シ「何と思ふてくれたぞ。定めて小歌の心でくれたものであらう。(歌)雨の降る夜は。な。おりやうぞ。傘ゆゑに。その名はたてかて。(傘すぢめ)は。ア。秀「秀は寒いものぢや。

シテ大名

若込白練。下袴。紅段裝束。目。茶袍。洞島帽子。小刀。扇子。太刀。

太郎冠者

菅の通り

秀句

太郎冠者と同断(但袴括る)

作物

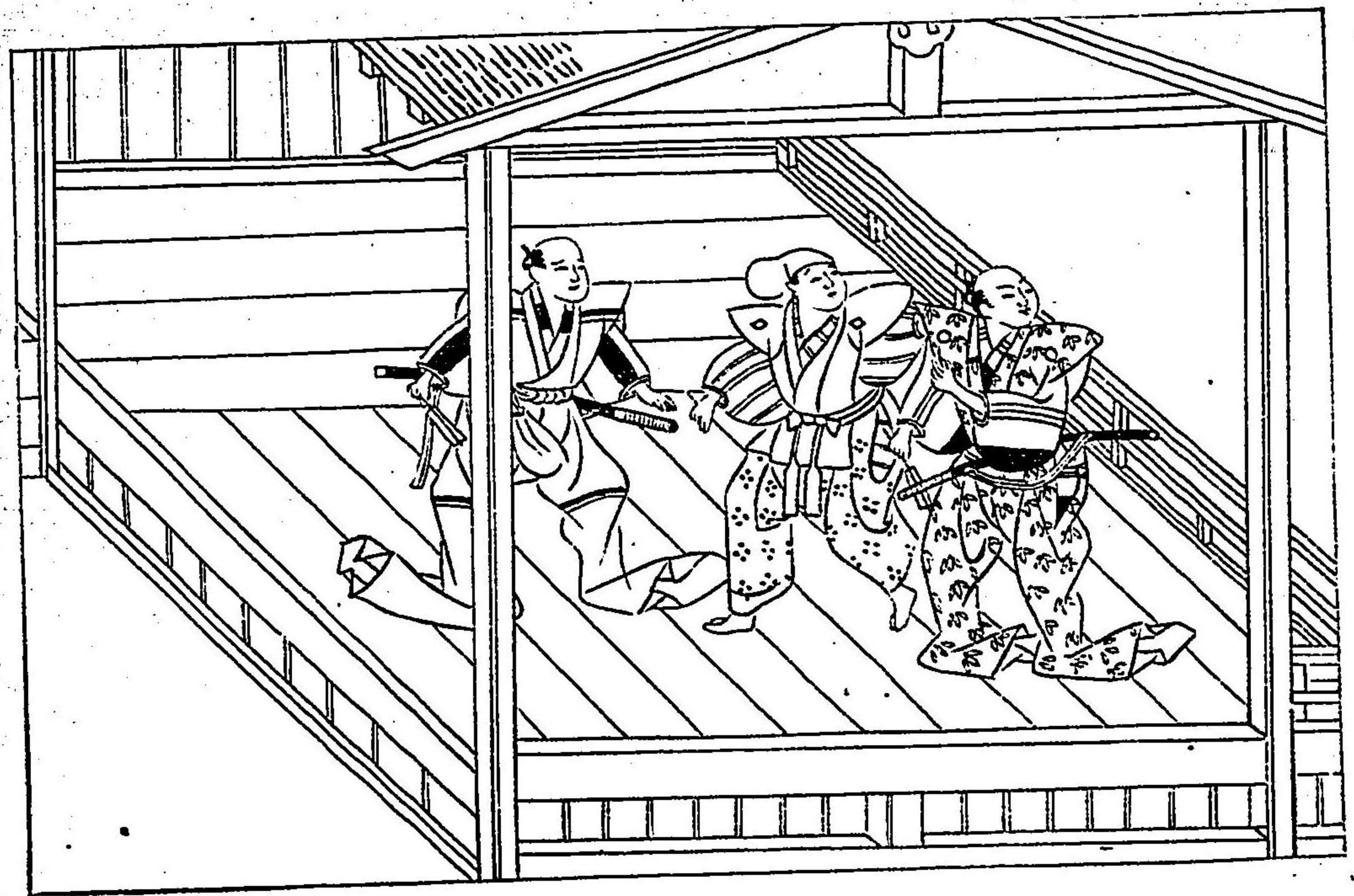
紅葉傘。腰桶

三 居杭

▲シテ「罷出たる者は。此邊に住居致す。居杭と申者で御座る。爰に誰殿と申て。御出入致す御方が御座る。是へ参れば。好う来たと有て御馳走はなさるれ共。参る度々に。頭を打せらる。何共迷惑に存て。此中清水の觀世音へ。祈誓をかけて御されば。何と思召てか。此頭巾を下されて御座る。此を被れば。定て打る。時。痛う無い物でがな御

ざらう。今日は此を持て。御見舞申さうと存ずる。急いで参らう。道行やれ。人には種々の癖が有る。頭を撲と云ふは。悪い癖で御座る。やア。参る程に是ぢや。物もう。案内もう。▲アト「表に案内と有る。誰様で御座る。▲シテ「いや。私で御座ります。▲アト「ゑい。居杭か。好うこそ来たれ。何として此間は見舞ぬぞ。▲シテ「然れば。折々参りたう存ますれ共。此如くに。参る度々に。頭を撲せらるゝに依つて。得参りませぬ。▲アト「それは其方が悪い合點ぢや。憎う思ふては撲ぬ。可愛さが餘つては。心に掛すとも。節々見舞へ。▲シテ「尤足下には左様で御ざらうけれども。世間から見まして。彼の如くに頭を撲れても。御出入申さねばならぬかと申す。此前が迷惑に御座る。▲アト「兎角世間は何といふ共かまはず。再々見舞ふてくれい。▲シテ「やア。頭巾を被ませう。▲ア「居杭。是は如何な事。今これに居た居杭が見えぬ。不思議な事ぢや。何方へ行たぞ。居杭く。▲シ「是は不思議なことで御座る。此頭巾を被たれば。身共が姿が見えぬさうな。扱も調法なことかな。▲ア「其許へ。居杭は参らぬか。居杭く。▲シ「さらば頭巾を脱つて参らう。是に居ります。▲ア「ゑい。其方は何處へ行たぞ。▲シ「彼に人が逢はう

と申ました程に、逢に参りました。▲ア「久しぶりて来て。逢に行くといふ事が有るものか、兎角奥へ通れ。▲シ「母つて御さる。通りませう。▲ア「やい。久しうて来た程に。緩りと居て話をせし。▲シ「心得ました。やア。又頭巾を被ませう。▲ア「これは如何な事。又見えぬ。何處へ行た知らぬ。居杭。▲サンオキ「うらなひさん。占の御用。しかも上手なり。うらやさん。▲ア「是へ一段の者が参つた。見て貰はう。▲シ「やア。算置を呼ばる。見物致さう。▲ア「なう。これ。▲サン「此方の事で御さるか。何事で御さる。▲ア「少見て貰ひたいものが有る程に。此方へ通らせられ。▲サン「畏つて御さる。此は足下の御屋敷で御さりますか。先づは芽出度御指圖で御さる。五百八十年。万々年も。御福貴。御繁昌の御屋敷で御さるよ。▲シ「是は如何な事。算置が例の輕薄を申す。▲ア「いや。足下方が其様におしやれば。身共も満足致した。先下に居さしめ。見て貰ひたい事が有る。▲サン「それは如何やうの事で御さる。▲ア「失物でおりやる。見てもれ。▲サン「何時頃のことと御さる。▲ア「只今の事ぢや。▲サン「何と。只今の事ぢや。是は知れました。生類で御さうが。▲シ「扱も。彼奴は上手ぢや。疑ひも



無い生類ぢや。▲ア「足下は上手でおやりや。成程生類ぢや。とてもものことに。何處許に居るぞ。一算置てたもれ。

▲サン「是は。一算置かすばなりません。總じて此失物と申すは。とつと置悪いもので御ざる。乍去。私の算は。違ふ事が無いと。何方にも仰せられて。私の名は云はずに。たい有やうくと仰せられます。▲ア「然うであらう。上手ぢや。▲サン「然らば一算置ませう。▲ア「おうく。

これは異つた算でおやりや。▲サン「是は天狗の投算と申て。他の家には御ざらぬ算で御ざる。追付て算を置出させう。▲ア「一段好かる。▲サン「一とく六がいの水。二義七よりの火。三しやう入なんの金。四せつ九やくの木。五き十の土。知れました。これは足下の左の方に在ると御ざる。▲ア「さや。左の方には何も無い。又左に居て見えぬ者では無。▲サン「それは何で御ざるぞ。

▲ア「人でおやりや。▲サン「是は如何な事。人ならば見えぬと云ふ事は御ざるまい。此うらの西に。確さう御ざるが。誠に。こゝにきんこくもくと。こくいたして見えぬ處が御ざる。例目には見えずとも。捜して見させられ。居りませう。▲ア「それなら捜して見よ。さや。何も居りないわ。▲シ「扱も。危険ことかな。既に捕へられうと

した。所を變て見物致さう。二人の真中に居やう。▲サン「不思議な事で御ざる。縦表の表に。左の方に在ると御ざるが。それなら一度置いて見ませう。▲ア「一段好からう。

▲サン「今度置いたら。緋に置き出させう。大水出れば堤のよわり。大風吹けば古家のたより。何と聴えましたか。▲ア「尤な事でおやりや。▲サン「犬士走れば。猿木へ登る。鼠桁走れば。猫急度白眼む。白眼むと有るに依つて知れました。今度は彼奴が所變て。此二人の間に居て。占の面をしるく見て居ると御ざる。▲ア「否々。見やれ。二人の間には何も無い。▲サン「否々。彼奴は。佛力を得た奴で御ざる。目には見えずとも。今度は兩人して捜ませう。▲ア「それなら捜さうか。其方に居ぬか。▲サン「其方へは參らぬか。▲ア「いやいや。何も無い。▲シ「扱も。又捕へられうとした。致しやうが有る。此八卦も引ちらし。算木を取ましたら。算は合ひますまい。▲ア「なう。足下は初とは違ふて下手ぢや。一つも合はぬ。▲サン「これ。合はぬこそ道理で御され。只今まで。數多有つた算木が。二三本になる。其上大事の家の書物を。此様に引散かして。足下が隙ぢやとい入て。算置を擲らぬもので御ざる。▲ア「こゝな者は。算は得置かぬ

くせに。身共は無實を云ひかくるか。▲サン「無實とは足下ならで。外にせう人が無い。算置と思ふて悔つても。方々に旦那が有るぞ。▲シ「面白い事かな。言分になりさうな。此算木を、頭の上から落さう。▲ア「是は何故に身共に打付る。▲サン「足下が取つたに依つて落したわ。これは身共に打付るか。▲ア「身共が指もささ(さし)たか。皆其方が手前から落るわ。是は耳を引か。▲サン「何を云ふ。手もさゝぬに。あいたく。是は身共を打擲するか。▲ア「何を云ふぞ。どこに打擲した。▲サン「是は堪忍ならぬ。討果してくれう。▲ア「汝、物を言はして置けば。憎い奴の。身共が胸ぐらをとつて何とする。汝に負る事では無いぞ。▲シ「これは如何な事。餘り嬲り過ぎ。耳を引き。打擲したれば。喧嘩になつた。これは出さばなるまゝ。まをし。御尋の居杭はこれに居ります。▲ア「あれ。あれ。あれ。捕へさせられ。やるまゝぞ。逃るわ。やれ。捕へさせられ。やるまゝぞ。」

同

大藏流本

▲シテ「是は、邊に住居致す居杭と申者で御座る。こゝに御目をかけさせらるゝ御方が御座るが。是へさへ参れば。居杭よく来たとしておたまはり。ひたもの天窓をばらせるが迷惑さに。清水の觀世音へ祈誓をかけて

御座れば。御夢想に此頭巾を被下て御座る。此頭巾を着たならば天窓をばられぬか。但はられても痛くないか。何ぞ奇特の無いと申ことは御座るまい。今日はおれへ参り。頭巾の奇特を見やうと存する。先そりりと参らう。斯う参つても御宿に御座ればよう御座るが。御宿に御座らぬ時は参つた詮も無い事御座る。いや。参る程に是で御座る。先案内を乞はう。物申。案内申。▲亭主「いや。表に物申とある。案内とは誰ぞ。誰様で御座る。▲シ「私で御座る。▲亭「いな。居杭。そちらなら案内に及ばうか。何故につゝと通りはせぬぞ。▲シ「左様には存じて御座れ共。若御客はし御座らうかと存じて。案内を乞ひまして御座る。▲亭「夫は念の入つた事ぢや。扱此間には久しう来んだが。何として見ぬなんだぞ。▲シ「されば其事で御座る。此間は田舎へ参つて。夫故御無沙汰を申まして御座る。▲亭「某は又其様な事は知らないで。誰ぞ申事でもいふて来ぬかと思ふて。氣遣ひをしたわ居杭。▲シ「誰も申事を申者は御座らぬが。ありやうはこれへさへ参れば。居杭よう来たとして天窓をばり。ひたもの天窓をばらせるが迷惑さに。おのづと御無沙汰致しまして御座る。▲亭「是は如何な事。そちらが天窓をばるは情うてはばらぬ。可愛さ餘つてはる事ぢやに依て。そつとも心にかける居杭。▲シ「御存じの御方はよう御座るが。御存じ無い御方の思召は。あの居杭はあの様に天窓をばられても。何ぞ嬉しうて御出入するぞと思召所が迷惑に御座る。▲亭「是は如何事。そちらが天窓をばるはいづれも御存じの事ぢやに依て。そつとも心にかける居杭。是は如何な事。今迄居た居杭が見ぬ。居杭。▲シ「扱も。不思議な事で御座る。此頭巾着たれば見ぬさうな。ちと鼻の先へ参らう。▲亭「居杭。居杭はごらへ行たぞ。居杭はそれへ行かぬか。居杭。▲シ「いよ。見ぬさうな。ちと頭巾を取て見やう。▲亭「居杭。いよ。居杭。そちらはどらへ行たぞ。▲シ「只今表で人が逢ひたいと申ましたに依て。表へ参りました。▲亭「たま。来てはばや表へ出る。かう通れ。▲シ「いや。これが。御座る。▲亭「いや。中に斯う通れ。▲シ「夫ならば畏つて御座る。▲亭「扱此間は久しう来んだ程に。五日も十日も留めて置いて。ひたもの天窓をばらうぞ居杭。▲シ「假令いれと仰せられても。五日や十日ではないぬる事では御座らぬ。▲亭「又往なうと云ふたりとも。いなす事ではないぞ居杭。又居杭が見ぬ。何方へ行たか知らぬ。居杭。」

▲シ「扱も」奇特な事で御座る。清水の親世者は敬佛者ぢやと申が。疑も御座らぬ。▲算「うらや算。占の御用。しかも上手。うらや算。うらの御用。しかも上手。▲亭「いや。これへ算置が参る。一算おかせうと存する。いや。なう。し。申。▲算「やア。この事で御座るか。何事で御座るか。▲亭「いかにも我御料の事ぢや。そなたは陰陽か。▲算「如何にも陰陽で御座る。▲亭「ちと頼みたい事がある。斯う通らしめ。▲算「心得ました。はア。此は此方の御屋敷で御座るか。▲亭「中々身共が屋敷で御座る。▲算「先は五百八十年萬々年も御子孫繁昌の御屋敷の圖と見はます。▲亭「餘の者の云ふと違ふて。我御料違のさうおしやれば。近來満足する事でおしやる。▲算「是は我々の存せいで叶はぬ事でおしやる。▲亭「さうであらう。扱頼みたい事がおしやる。先下に居りやれ。▲算「心得ました。扱御座れなされたいと仰せらるゝは如何様な事で御座るか。▲亭「別なる事でもおしやらない。失物でおしやる。▲算「失物。▲亭「申々。▲算「總て失物の待人のと申が算置の手取物で御座る。▲亭「さうであらう。▲算「さて何時の事で御座るか。▲亭「今日只今の事でおしやる。▲算「今年は。一年の元と日月刻限をいつて。先手占を置て見ませう。たんちやうけんるさんなんば。はア。是は生類で御座るの。▲亭「扱々我御料は上手ぢや。いかに生類でおしやる。▲シ「扱も。いかに上手かな。疑も無い生類で御座る。又何事を申す承らう。▲算「此生類が合ふて申は如何で御座るか。私のおく算はよう合ふとあつて。有る名は仰せられいでありやうが有りやうが来たかなど仰せらるゝ事でおしやる。▲亭「定めてさうであらう。扱其生類が此屋敷を離れたか。離れぬかを見てくれさしめ。▲算「はア。斯う見ました處が。此廣い屋敷で御座るに依て。手占の分では知れませぬ。一算おきませう。▲亭「夫ならば一算おいてくれさしめ。▲算「心得ました。唯今おき現はいて御目につけませう。先今日の卦跡がとうとこれにあつて居ります。▲亭「はア。是は珍らしい算でおしやるの。▲算「此方は素人かと存じて御座れば。好い所へ御氣が付きました。是は天狗の投算と申て。我が家ならで他に無い算で御座る。▲亭「さうであらう。終に見た事がおしや無い。▲算「算木配りと申て。此を悉く置直す事でおしやる。殊の外六ヶ敷い事でおしやる。▲亭「定めてさうであらう。▲算「一往六寄の水。二義七陽の火。三生八離の木。四殺九厄の金。五鬼十の土。水生木。

水生火。火生土。土生金。金生水。金尅木。▲亭「何とておしやる。▲算「はア。大方知れまして御座るが。茲に金尅木と尅致いた所で。ちと六ヶ敷うは御座れ共。乍去。大方知れまして御座る。▲亭「何と知れとおしやる。▲算「御屋敷の事は扱おき。御座敷を離れぬ失物で御座る。▲亭「いや。座敷に居て見ぬものではない。▲算「扱夫は何で御座る。▲亭「人で御座る。▲算「や。人。▲亭「申々。▲算「人などが此盛り霞みもない御座敷の内で見えぬと申は。何共不審な事でお座る。▲亭「夫に付最前から合點の行かぬ事がある程に。彼奴が居所をさいてくれさしめ。▲算「居所をさいてくれ。▲亭「申々。▲算「是は好い所へ御氣が付きました。今一算置て。今度こそ神變奇特をおき現はいて御目につけませう。▲亭「夫がよからう。▲算「夫土は。れば松木へ登る。鼠術走れば猫きつと見たり。知れまして御座る。▲亭「何とておしやる。▲算「こなたの左の方に座して居ると御座る。▲亭「いや。某が左の方には何も見ぬぞや。▲算「いや。見た處は見ませぬ。彼奴は神佛の加護を得た者と思はますに依て。中々見た分では見ませぬ。ちと搜いて見させられい。▲亭「夫ならば搜いて見やうか。▲算「夫が好う御座らう。▲亭「やつとな。▲シ「是は如何な事。すでに捕へられうと致いた。ちと所を變へう。▲算「何と御手に躍りまするか。▲亭「何も手へさはらぬ。▲算「體に左の方に居ると御座るが。▲亭「いや。何も手に當らぬ。▲算「申々。はや所を變へました。▲亭「何ぢや。所を變へた。▲算「申々。▲亭「夫は何處に居るぞ。▲算「夫は今一算おければ知れませぬ。▲亭「夫ならば今一算おいてくれさしめ。▲算「心得ました。今度こそおいたり。と仰せらるゝ様に置現はいて御目につけませう。▲亭「早う置てくれさしめ。▲算「大水出つれば堤の弱り。何と尤な事では御座らぬか。▲亭「尤な事でおしやる。▲算「人風吹けば古家のたまり。是も尤な事でお座る。▲亭「其通りでおしやる。▲算「あちと。こちらは隣なりけり。知れまして御座る。▲亭「何とておしやる。▲算「今度こそあなたと私の間に居て。こなたの顔をちくり。私の算をおく所をじりり。と見て居ると御座る。▲亭「其方は最前も其様な事をおしやつたが。お見やれ。我御料と私がおしやる。▲算「見た處に見ませぬ共。總じて解かくしなと。申て。斯様の事は時々ある事でおしやる。其上最前はこなたの聲高に仰せ

られたに依て。彼奴がほづいたもので御座らう。今度はあなたと私と致いで。だらいて捜しませうが何と御座らう。▲亭「是は一段とよからう。▲算「かまへておからせらるゝな。▲亭「わかる事ではおられない。▲二人「やつと卦を取散し。算木を取つて。これ／＼。いかな上手でも。此を取つたならば算は合ふまいと存する。▲算「何と御手にはさばりませぬか。▲亭「いや／＼。何も手には隙らぬ。▲算「儘に此邊に居る客で御座るが。いや申の合はぬこそは道理なれ。此様に八卦を取散し。其上算木が見えませぬ。あなたの取せられて何の益に立たぬ物で御座る。こちへ返させられい。▲亭「それはむざしとした事を云ふ。身共が取つて何にするものぢや。▲算「てもこなたの取らせられいで誰が取るもので御座る。▲亭「これ／＼。皆これへ出た。我御料は最前の生類が合ふた斗りで。いかい下手ぢや。早う仕舞ふて歸らしめ。▲算「こなたは算置を呼んで。算はおかせうでは無うて。歸らせらるゝと申もので御座る。▲シ「ちと喧嘩をさせう。▲亭「あいた／＼。やい。其處な者。▲算「何事で御座る。▲亭「なぞに身共が鼻の抜くる程引いた。▲算「何ぢや。鼻を引いた。▲亭「中々。▲算「此方は物に狂はせらるゝか。身共は算木を仕舞ふて居て。其處へ手もやりはせぬものな。▲亭「おのれがせいで誰がするものぢや。▲算「お痛／＼。なう其處な人。▲亭「何事ぢや。▲算「何事とは。なぞに某が耳を引かせられた。▲亭「それは気が違ふたか。身共はそれへ手もやりはせぬ。▲算「はてこなたがせいで誰がするもので御座る。▲亭「お痛／＼。やい／＼。其處な奴。▲算「やア。▲亭「やアとおのれ情い奴の。諸侍をなぞに打擲した。▲算「何ぢや。打擲。▲亭「中々。▲算「笑ふてい／＼。こなたは物に狂ふと見えた。これお見やれ。まだ算袋の紐をしめて。そこへ手もやりは致さぬ。▲亭「おのれがせいで誰がするものぢや。▲算「お痛／＼。なう／＼。其處な人。▲亭「何事ぢや。▲算「何事とは落着た。算置も公界者ぢや。なぞに打擲された。▲亭「いや。おのれは最前から色々の言掛をする。某はそれへ手もやりはせぬ。▲算「はて。我御料が爲いで誰がするものぢや。▲亭「お痛あ痛／＼。あ／＼。いた／＼。最早堪忍ならぬ。果し合はう。▲算「引くことでは無いぞ。▲二人「いざ御座れ。やア／＼。▲シ「扱も／＼面白い事かな。是は如何な事。見

れば眞の喧嘩になつた。出ずばなるまい。はア。申々。▲亭「何やら聲が致す。▲算「眞に致す。▲シ「聊爾をなさるゝな。お尋ねの居机はこりやこれに居ります。▲亭「尋ねる者はおれで御座る。算「急いで捕へさせられい。▲亭「あの横着者。捕へてくれい。遣るまいぞ。▲シ「あゝ。許させられい／＼。

シテ 着付島組闘斗目。肩衣。腰帶。居机頭巾懐中。
亭主 色無段闘斗目。狂言袴。扇子。
算置
作物 算袋(中に八卦。算木)。

四 飛越新發意

▲アト「罷出たる者は。此邊の者で御座る。今日は或方へ茶の湯に参る。それに付。こゝに某の存た新發意が御座るが。何方へなりとも。心安い所へ茶の湯に参るなら知らしてくれ。稽古の爲。様子を見たい。と申された程に。今日は誘ふて参らうと存する。先づ徐々参らう。道行。やれやれ。宿に居らるれば好う御座るが。何と内に居られうか知ぬ。やア。参る程にこれで御座る。先づ案内を申さう。物もう。案内も。▲シテ「やア。表に案内がある。誰様で御座る。▲アト「私で御座る。▲シ「えい。足下か。好うこそ御出なされた。先づ此方へ通らせられ。して。只今は何と思召て御出ぞ。▲ア「然れば。別の事でもおりない。或方

へ茶の湯に参る。足下も内々見習ひたいと仰せられた程に。誘ひに参つた。▲シ「それは辱なう御さる。内々望で御さる。成程参りませう。▲ア「それなら御され〜。▲シ「参ります。道行。▲ア「なう〜。茶の湯と申は。様々次第の有ることで御さる。節々見て置かせられ。▲シ「さかにも左様に承つて御さる。▲ア「やア。参る程に。是に大きな溝川が有る。さア〜。飛ませう。足下も飛せられ。▲シ「足下は早飛せられたか。身共は如何やら飛乗ます。可怖う御さる。▲ア「はて扱て。是程の溝川を飛乗るといふ事があることで御さるか。飛せられ。▲シ「やア。思ひ出しました。兎角走りかゝつて。此様な處は飛ませう。▲ア「どうなりともして飛せられ。▲シ「是から走りかゝつて飛ませう。さア飛ますぞ。▲ア「あ〜。これ〜。危険〜。▲シ「われ。飛ぶ處を危険〜とおしやるに依つて。得飛ませぬ。▲ア「それでも今のは。其儘陥没りなうに見えた程に。危険と申た。▲シ「いや。兎角此目といふものが。臆病な物ぢや。目を塞いで。走りかゝつて飛ませう。▲ア「如何してなりと飛せられ。▲シ「是から目を塞いで飛ませう。さア飛ますぞ。飛ぞ。▲ア「あ〜それ〜。危険〜。▲シ「あれ〜。飛ぶ所を危険〜とおしやる。兎

角身共は。これから最早歸りませう。▲ア「これ〜。是迄来て。いぬるといふことがあるものか。平に御され。▲シ「やア。足下は又此方へ飛せられたか。それならいざ手を引わふて飛ませう。▲ア「一段好う御せらう。いざ手を引ませう。さア飛ますぞ。飛ぞ。さア。身共は飛だ。▲シ「はア。悲しや〜。陥没りました。これは〜。さふりと濡たわ。▲ア「扱も〜。彼の形體は。これはどの處はよう飛ばいで。彼の形體は。なう〜。をかしや〜。扱も笑止なことかな。▲シ「なう〜。これ〜。足下は聴えぬ。身共が陥没つたら。其々に笑止がつくれう人が。其如くに笑ふと云ふ事があるものか。總じて人の身の上には。可笑い事が有る物でありやる。我御料のこともいふたら耻をかきやらう。▲ア「いや〜。身共が身の上に。何も覺えは無い。有らばおしやれ。▲シ「それならば云ふて聞さう。夫いつぞや。上野に角力の有つたわ。其時身共も見物して居たれば。西と東と立分つてとつた。西の方やより。小さい小男が出て。出る程の者を。片端皆取つて投た。最早今日の角力も是迄ぢや。いざいなう(行なう)といふて。皆々見物が戻つた時に。いや〜。や。まだ角力こそあれといふて。東の方から出た。それを何者ぞと思ふたれば。我御料

では無かつたか。身共の思ふは。いらぬ所へ出られた勝
 るれば好いが。笑止なと思ふと。角力も立かた。手に汗
 を握つて見物して居たれば。行司が合すと思ふたれば。や
 アといふて。手を合すると否や。彼の小男が。我御料が腕
 を取つて。右へはきり。左へはきり。と引まはし。
 さまたにかけ。すでいとうとつて投げた。其時の姿を思
 ひ出せば。笑止なやら。可笑いやら。扱も扱もかしいと
 かな。▲ア「これ」。總じて角力といふ物は。勝も負る
 も。時の仕合せでおりやる。それが其様にをかしいか。▲
 シ「可笑う無うてならうか。其方が大きな體で小男にな
 げられて。したゝか腰を打たと見えて。痛さうにして。か
 たやへ。ちと御免なませ」。と這入た姿を思ひ出せば。
 可笑うてならぬ。▲ア「なう」。それ程可笑くば。我御
 料と。さぎ角力を行らう。▲シ「さや。身共は茶の湯に参
 つた。角力取りには参らぬ。▲ア「さや」。取ぬに於て
 は。後へも先へもやる事では無いぞ。▲シ「それならいざ
 一番取らう。▲ア「さア。おりやれ。▲二人「やア」。
 ▲シ「是は何とするぞ。何とするぞ。▲ア「やア。お手ま
 いたつたの。▲シ「や」。今のは勝負が知れぬぞ。角
 力は三番の物ぢや。戻れ。勝負をせよ。やるまいぞ」。

同 飛 越 大 藏 流 本

▲アト「是は此邊に住居致す者で御座る。今日は山一ツ彼方へ茶の湯へ参
 るが。兼て旦那寺の御新發意の茶に行くならば誘ふてくれいと申されて御
 座る程に。誘ふて参らうと存する。先そろり。と参らう。斯う参つても
 御宿に御座れば。若御座らぬ時は参つた餘も無い事。御座
 る。いや。参る程に。さや。案内を乞はう。物申。案内申。▲シ「
 」いや。表に物申とある。案内とは誰ぞ。誰様で御座る。▲ア「私で御座る。
 ▲シ「いゝ。あなたならば案内に及びませうか。なせにつ。と通りはなされ
 いて。▲ア「左様には存じて御座れ共。若御宿はし御座らうかと存じて。夫
 故案内を乞ひまして御座る。▲シ「近來念の入つた事で御座る。扱只今は
 何と思召しの御出で御座るぞ。▲ア「只今参るも別なる事でも御座らぬ。兼
 々。あなた茶の湯に行くならば誘ふてくれいと仰せられて御座る。▲シ「い
 かにも左様に申て御座る。▲ア「今日は山一ツ彼方へ茶に参りますに依
 て。お暇ならば御供致さうと存じて。御誘ひに参りまして御座る。▲シ「や
 れ。ようこそ誘ふて被下て奈な。御座る。乍去。今日は師匠の留守で
 御座るに依て。得参られますまい。▲ア「いや。御師匠の歸らせられたな
 らば。私のよい様に申ませう程に。平に御座れ。▲シ「夫ならば参りませ
 う。▲ア「夫がよう御座らう。先。あなたから御座れ。▲シ「案内者の爲に此
 方から御座れ。▲ア「夫ならば私から参りませう。さア。御座れ。▲
 シ「参る」。▲ア「總て茶の湯など申ものは。つとと六ヶ敷いもの
 で。度々よそへ行て人のよしあしを見て。扱此處彼處へ氣をつければなら
 ぬ事で御座る程に。あなたもよう見ておかせられい。▲シ「何が扱。此處彼
 處へ氣をつくるで御座らう。▲ア「いや。参る程に。いつもの飛越へ参つた。
 ▲シ「誠に大きな川へ出ました。上が降つたと見えて。いかう水が増しま
 した。▲ア「誠に水が増しまして御座る。扱是を飛越へ参りませう。▲シ
 「いや申。何と此川が飛越るもので御座るぞ。▲ア「扱々此方は臆病な事
 を仰せらる。こればかりの川を飛越さいで何とするもので御座る。私は最
 早飛びます。やつとな。▲シ「ばア。最早飛びせられたか。▲ア「中々
 越えました。此方も早う飛びせられい。▲シ「いや。私は中々只は飛べれ

ませぬ程に。つゝとあれから走りかゝつて飛びませう。▲ア「夫が好う御座らう。▲シ「此邊から走りかゝつて参らう。ヤア。▲ア「あゝあぶない。▲シ「是は如何な事。まんまと飛ばうと存じたれば。あなたの聲をかけさせられたに依て。飛損うて御座る。▲ア「すでに此川へはまらうとなされたに依て。夫故聲をかけた。▲シ「兎角目が臆病で御座る。今度は目をふさいで飛びませう。▲ア「如何様にしてなり共飛ばせられい。あゝあぶない。▲シ「是は如何な事。此度こそまんまと飛渡ませうと存じたれば。又聲をかけたに依て。目がおいて飛ばれませぬ。▲ア「又私の聲をかければ。川へはまらせらるゝ所て御座つた。▲シ「兎角私は飛ばれませぬ。最早斯う戻りませう。あゝ。これ。あなたは又此方へ飛ばせられたか。▲ア「又飛ばいで何とする物で御座るぞ。折角これまで御出なされて。是ばかりの川を飛ばいで戻らせらるゝといふ事があるもので御座るか。是非共とばせられい。▲シ「何程に仰せられても。飛越す事はなりませぬ。▲ア「夫ならば引添ふて飛ばせられい。▲シ「夫ならばあなたに引添ふて飛びませう。▲ア「さア。これへよらせられい。▲シ「心得ました。▲ア「屹度とらへて御座れ。▲シ「中々とらへて居ます。▲ア「飛びますぞ。▲シ「早う飛ばせられい。▲ア「やつとな。と云ふて飛ぶ時。シテ川へはまる。▲シ「是は如何な事。一ト絞りになつた。耳へも水が入る。あゝ。苦々しい事を致した。▲ア「これ斗りの川を飛越ゆると。ちの形は何事ぢや。悉皆濡鼠を見る様な。と云ふて笑ふ。▲シ「あゝ。いやなう。其處な人。▲ア「何事ぢや。▲シ「人の川へはまつたを笑止に思はいで。なぞに御笑やるぞ。▲ア「よく思ふて見せしめ。其方が川へはまつたは氣の毒な。共。これ斗りの川を飛越ゆると。其形は何事ぢや。と云ふて又笑ふ。▲シ「あゝ。これ。人の身の上にはなかしい事もあるものぢや。其方の身の上にも可笑い事があらうが。▲ア「餘の者は知らず。某が身の上に限つて。何もなかしい事はおりない。▲シ「云ふたらば恥をかゝうが。▲ア「いや。恥をかゝ覺はは無い。有らばおしやれ。▲シ「夫ならば云はう。夫先度門前に相撲があつたわ。▲ア「夫がなかしいか。▲シ「先お聞きやれ。東西と立分つてとつた。▲ア「中々立分つてとつた。▲シ「其時西の方より小さい男が出て。東のかたやの者を悉く取て投げた所で。最早相撲は是迄ぢやといふに依て。身共戻らうとし

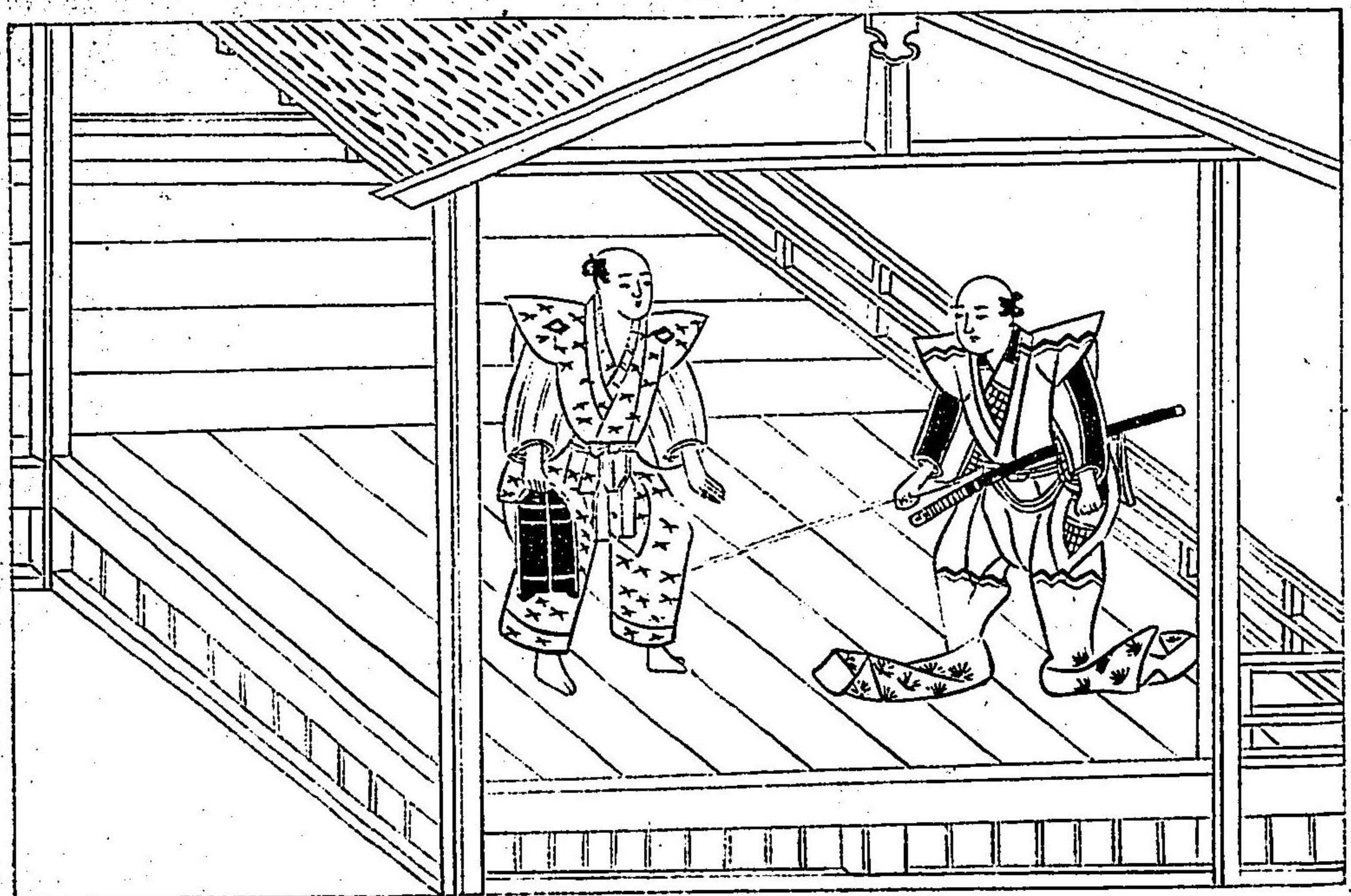
たれば。又相撲。とあれと云ふ程に。誰が出ると思ふたれば。あの其方が出たでは無い。▲ア「夫がなかしいか。▲シ「先お聞きやれ。出ると其儘。あの小さい男にきり。と引廻され。小股を取て場中へすでいど。▲シ「笑ふ。▲ア「あゝ。これ。相撲と云ふものは。勝つと喜び。負くると苦ひぢやが。其負けたのが可笑いか。▲シ「負けたはなかしう無いが。腰の骨をたたかに打つたと見れば。かたやへり。▲シ「笑ふ。あゝ。氣の毒な体であつた。▲ア「其方はいかう相撲自慢と見えた。一番参らう。▲シ「身共は茶の湯にこそ参つたれ。相撲とりに参らぬぞ。▲シ「と云ふたり共取らずにはおくない。▲シ「又とつたり共負ければ。▲シ「二人いざ御座れ。ヤア。やつとな。と云ふて飛びぢがひて。左をかつて右へ引廻し。夫より右をとつて引廻して倒いて。▲ア「ヤア。お手勝つたぞ。と云ふて入る。▲シ「やい。相撲は三番のものぢや。横着者。どちへ行くぞ。捕へてくれい。やるまいぞ。と追入る。

シテ新發意 着付無地闘斗目(但小島類にて)。狂言後。腰帶(兼子類)。角頭巾。福繩。塗笠。馬子。主打扮。

五 鶯

▲アト「罷出たる者は。此邊の者で御座る。某は鶯を好みて飼ます。今日は殊の外天氣も好う御座る程に。鶯に水を浴せうと存じ罷出た。此先に谷水の流るゝ所か御座る。彼へ持て参らう。道に。誠に。諸鳥様々御されども。鶯程重寶な鳥は御座るまい。ヤア。此處計が好かる。先づ茲處に置いて。身共は彼處から見物致さう。(鶯籠は圓床机

を持出るなり) ▲シテ「罷出たる者は。此邊に住ん者で御
 ざる。某或方で小人を見初めまして。様々と縁を以て申て
 御されば。情深い御方で。お盆を下されて御ざる。此やう
 な嬉しい事は御ざらぬ。餘り嬉しさに申ことは。足下の御
 用ならば。如何やうの事なりとも仰せられ。命の御用にな
 りとも。立ませうと申たれば。彼の御若衆の仰せらるゝ
 は。其義ならば別に望なことも無いが。然の好いがあら
 ば欲いと仰せられた程に。それこそ易い事で御ざる。差上
 申さうと申て請合しました。それに付。今日は盆を差さうと
 存じて。如此に。竿迄持て罷出て御ざる。遊行。如何許
 になりとも。好い盆があれかし。差して進せたい事で御ざ
 る。やア。これに盆が有る。扱もく好い盆かな。彼は世
 間に重寶する。三光とやら云ふ盆であらう。何でも差して
 くれう。何處から差さうぞ。茲處から差さうか。此方から
 差さうか。▲アト「やい〜」。是は聊爾な事をする。
 身共が秘藏の盆を。何故に差すぞ。▲シ「此は足下が盆か。
 ▲ア「中々。身共の盆ぢや。狼籍な人ぢや。▲シ「然れば
 是には仔細が有る。聞いてたもれ。身共は或るお若衆に心
 をかけ。様々と申たれば。情有る御方で。お盆を下された。
 餘り嬉しさに。足下の御用なら。命なりとも差上ると申た



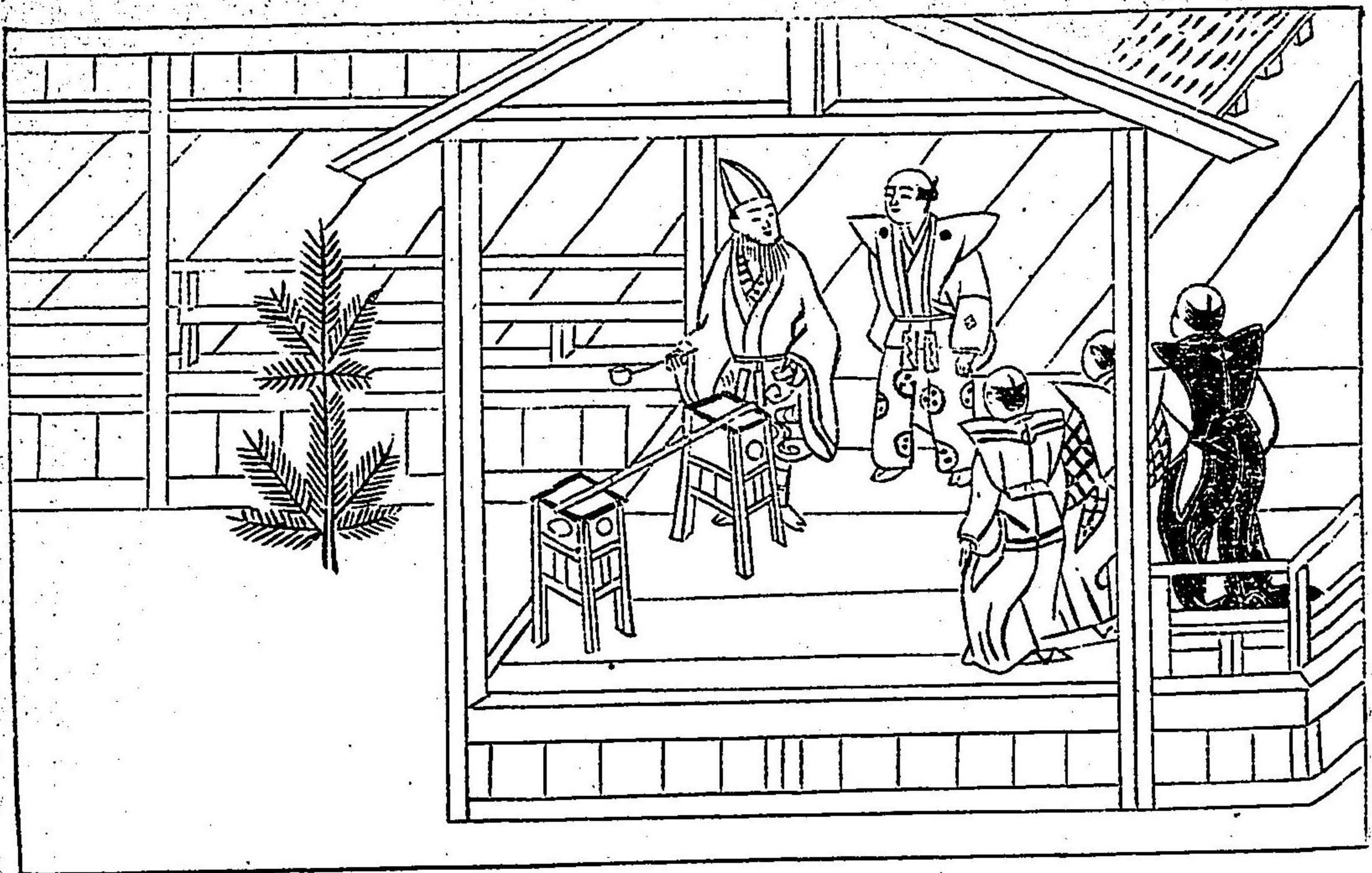
れば。其義なら。別に望も無い。露の好いがあらば欲いと仰せらるゝ。それ故此如に差に出た事ぢや程に。平に差したもれ。▲ア「尤それは聴えたれども。彼は某が秘蔵の毒ぢや。差さす事はならぬ。▲シ「はて扱それは氣の毒ぢや。それならかけろくにしてたもらうか。▲ア「然ればかくろくには何をするぞ。▲シ「此太刀を得差さずば我御料にやらうぞ。▲ア「夫なら成程差させう。差して見やれ。▲シ「心得た。太刀はこれに置ぞ。扱何方から差いて好かろぞ。茲處から差さう。狙ひすまして差いてくれうぞ。南無三寶。差し損なうた。▲ア「そりや好う差さぬわ。先づ。此太刀は我が物ぢや。嬉しや。▲シ「なう。餘り残多いことぢや。今度は此刀をやらう程に。差してたもれ。▲ア「又得差しやらねば。其刀を取るぞ。▲シ「如何にも其通ぢや。然らば差しまするぞ。何でも今度は差いてくれう。稱を好う延して置いて差さうぞ。はア。是は如何な事。又差し損なうた。▲ア「さアこそ。此刀も身共が物ぢや。なう。嬉しや。思ひもよらぬ仕合せぢや。太刀。刀。鳥も持て。急いで歸らう。▲シ「なう是々。それは餘りどうよくぢや。それなら。茲こそ差し損うたれ。歌を一首思ひよつた。此歌を聞いて。其益をくれまいか。

▲ア「これは優しい事を仰やる。如何にも歌によつて。與ることもあらうが。して。其歌は何とぞありや。▲シ「もの。▲ア「何と。▲シ「初春の。太刀も刀も。差さでを歸る。もとの住家に。とした。益をたもれ。▲ア「尤歌は出来たが。益はやることはならぬぞ。▲シ「やい。それは餘り情無のことぢや。せめて。も一度差さしてくれ。やれどうよく者。やるまいぞ。

六 河原新市

▲女「妻は此邊の者で御さる。今日は河原の新市で御さる。常例の如く。酒を賣に参らうと存ます。道行。誠に今日は天氣も好う御さる程に。夥しい人で御さらう。参る程にこれで御さる。此處許に店を出しませう。(竹の先に杉葉つけ。腰掛に持せ懸け置く。徳利一つ側に置なり。)▲アト「罷出たる者は。此近邊の者で御さる。今日は河原の市で御さる。彼へ参り。賣物を見物致さうと存る。何方も若い衆御さるか。▲二人「中々。これに居ります。▲アト「さア。河原の市へ参りましょ。▲二人「一段と好う御せらう。▲アト「さア。御座れ。や。何かと云ふうちにて

れで御ざる。これに酒を賣て居る、いざ酒を飲ませう。な
 ア〜。これへ御され〜。▲女「何方も。酒參れ〜。
 諸白の好い酒で御ざる。▲シテ「これへ出たる者は。河原
 太郎と申者で御ざる。某の女房どもに。河原の市へ。酒を
 賣に遣て御ざる。先程參り。一つ飲して見よ。好い酒か。
 試て見て買らせうと申せど。いや未賣初致さぬと申して。
 飲しませぬ。扱も〜。憎い奴で御ざる。彼へ參り。身共
 が邪魔を入れ。致し様が有るやア。何人やら大勢酒買ふ人
 が有る。是々。其處な人。此方へ御され。用が有る。皆御
 され〜。▲三人「何事ぞ〜。▲シテ「いや。別のこ
 とでも無いが。身共も。彼の酒を。最前知らいで飲うで見
 たが。酔を飲む如くで。酸うて飲まるゝことではない。必
 飲ませらるな。申りませうぞ。▲三人「扱は左様で御ざる
 か。好う知らせたもつた。夫なら他所で飲う。いざ此方
 へ御され〜。▲女「申り。彼は嘘で御ざる。成程好い酒
 で御ざる。悪くは代を取ませぬ。これ〜。これは扱。は
 や歸りやつた。▲シテ「やア。嬉しや〜。まんまと邪魔
 を入て往した。致様が有る。やア女共。又見舞た。何と今
 日は。大分の人であつた程に。商が有らう。鳥目を繋がう
 と思ふて。繒を持って来た。さア〜。錢を此處へ出さしめ〜



▲女「其處な人。よう其様な事おしやる。そなたが何かと邪魔を入れて。酒を買はうといふ人にも賣せぬやうにしやる。鳥目があらう筈が無い。空た人ぢや。それは誰が損ぢや。そこな人。▲シテ「何ぢや。鳥目が一銭も無い。汝は憎い奴の。商をせず。遊び歩いて居ると見えた。其上男をうつけたとぬかす。おのれ堪忍がならぬ。打殺てくれう。」

▲女「これは如何な事。又其酒はやしをとつて。それで打擲するか。あゝ悲しや。わいた〜。やア思ひ付た。これ〜。先これを一つ飲うで。打なりとも。叩きなりともしやれ。先飲しめ。▲シテ「何のおのれ。人の飲うと云う時は飲さいで。最早今は飲ぬ。其盃も徳利も。打割つてくれうぞ。▲女「あゝこれ〜。それは短氣な。打割らうよりは。先づ飲ましませ〜。▲シテ「何と云ふぞ。打割らうより飲といふか。いかさま其方が云ふ通。割つて捨てるも無益ぢや。それなら一つ飲うか。▲女「はて扱。飲しませ〜。下に御され。▲シテ「さア〜。茲へ注げ。▲女「心得ました。注ましよ。▲シテ「然らば飲まうか。扱も〜。此は好い酒ぢや。今日は念を入れたやら。平日より酒が好いわ。▲女「も一つ飲しめ。▲シ「いかさま是は。一つや二つでは堪忍がならぬ。さア〜。注げ〜。扱も

〜。飲ば飲む程甘い。其方も少飲んか。差さう。▲女「いや。妾は嫌で御さる。最早酔はせられたさうな。▲シ「いや〜。此様な事で酔ふことでは無〜。さア〜。注げ〜。飲ば飲む程好い氣味ぢや。さ此上は。瀧飲にせう。▲女「心得ました。後から注ご。▲シ「是は如何な事。いかに瀧飲ぢやといふて。頭へ酒を浴せ居るか。おのれ憎い奴の。兎角打殺すぞ。▲女「又々酒に酔うて。あれ〜。足もたぬ態で。つえとりばへをしやる。あの態は。▲シ「汝可笑いか。何方へうせる。やることでは無いぞ。やるまいぞやるまいぞ。(酒に酔ひ。ひよろ〜して。追かけ入なり。)

同 河原太郎 大藏流本

▲女「是は此邊に住居致す太郎と申者の妻で御座る。妾は毎年酒を造つて商賣致します。則今日は河原の市で御座るに依て。あれへ参り。商賣致さうと存する。先そり〜と参らう。誠につもとは申ながら。當年は殊の外酒がよう出来て。此様な嬉しい事は御座らぬ。いや。参る程に河原へ参つた。扱も〜。今日は天氣が好いに依て。勢しい市立ちや。此邊が好さうな。さらばこれへ店を出さう。(腰桶を置き。内より錫を出し。酒ばやしを立掛け。五斗土器も出して置く。やい〜。太郎が酒はこれで御座る。御用があらば此方へ仰せられいや。と云ふて居付く)▲シテ「是は此邊に住居致す太郎と申者で御座る。某が女共は毎年酒を造つて商賣致します。則當年も造つて御座る。夫に付。衣前試を致さうと申て御座れば。明日河原へ参れと申たに依て。これより河原へ参り。ねだつてたべうと存する。先そり〜と参らう。誠につ今日は一段の天氣で御座るに依て。定

めて市立も數多御座らうと存する。何彼と申内に河原ぢや。扱もく、夥しい市立ぢや。今日は好い天氣ぢやに依て、やがて人も數多出るで御座らう。扱女共は何處許へ店を出した事ぢや知らぬ。いや、さればこそ、これに居る。なう、女共。早う御出やつたの。▲女「いえ。これは出させられて御座るか。▲シ「今日は天氣が好いに依て、夥しい市立でおりやう。▲女「中々夥しい人で御座る。扱、なには何と思ふて出させられて御座るぞ。▲シ「其事ぢや。夜前も試をせうと云ふたれば、明日河原へ来いとおしやつたに依て夫故參つた。▲女「やれ、能うこそ出させられたれ。乍去。今朝からまた賣初を致さぬに依て。後に御座れ。▲シ「扱々其方は悪い合點ぢや。身共が試をしたといふも別の事ではない。酒がよう出来たか、悪しう出来たか心許無いに依て。きいて見やうと云ふ事でおりに。▲女「其分ならば御氣遣をなさるゝな。いつもとは申ながら。當年は取分き風味がよう出来て御座る。▲シ「いや、其方はかりよう出来たと云ふて。身共がきいて見れば知れぬ。其上方一惡しい酒を市立の衆へ進めては。重れて太郎が酒は惡しい杯と仰せらるれば、以來商賣の邪魔になる事ぢやに依て。飲みたうは無けれ共。少しばかりきかせてくれさしめ。▲女「近來尤では御座れ共。其分は必御氣遣なさるゝな。妾もいつもの旦那衆で御座る程に。中々惡しい酒を進する事では御座らぬに依て。此方のきいて見させらるゝには及ばぬ事でお座る。▲シ「其上甘い酒をすく衆もあり。又辛いな參る衆もある處で。とかく某がきいて見れば知れぬ。深しう飲みはすまい。唯一ツきかせてくれさしめ。▲女「いや、何程に仰せられても。賣初をせぬ内は進する事はかりませぬぞ。▲シ「いかに賣初をせぬと云ふて。外の者ではなし。身共に飲まするは則賣初と同じ事でおりに。▲女「妾はおあしを取らば賣初とは思ひませぬ。▲シ「扱々其方は義理の堅い事をおしやる。假令賣初をせぬ内に人に振舞ふたとて。賣るゝ酒ならばうれうぞ。又賣れぬものならばうれまいぞ。▲女「なう。腹立や。此方は此酒を誰が物ぢやと思ふて其様なさきの悪い事をおしやるぞ。▲シ「總じて商は吉相と云ふが。其方の様にきつい事を云ふたならば。得賣ればすまいぞ。▲女「いよ、さきの悪い事をおしやる。其様におしやつたならば。尙々酒を振舞ふ事はなりませんぞ。▲シ「すれば是程に云ふても振舞ふ事はならぬか。▲女「中々なりませんぞ。▲シ「おきおれ。飲むまい。おのれ

後程来て酒が賣れずば仕儀があるぞ。(と云ふて立て)扱々憎い奴で御座る。散々に打擲致さうと存じて御座れ共。人多ければ外間もいかゞぢやと存じて堪忍を致したが。何と致さうぞ。いや、思ひ出した仕儀が御座る。(と云ふて大鼓座へ引込む)▲立衆「申、何れも御座るか。▲立衆「これに居ります。▲立衆「今日は河原の市で御座るに依て。參つて市立を見物致し。又例の太郎が酒をたへうでは御座らぬか。▲立衆「一段とよう御座らう。▲立衆「夫ならば何れもさア、御座れ。▲立衆の皆「参りませぬ。▲立「今日は天氣も能う御座るに依て夥しい市立で御座らう。▲立「誠に夥しい市立で御座らう。(立衆出るを見て。太郎笠をきて一の松よりさし扇にて招く)▲立「誰やら呼びます。▲立「誰やら呼びます。▲立「いて参りませう。▲立「夫が好う御座らう。▲立「誰ぢや。▲シ「私で御座る。▲立「おゝ太郎か。今そら所へ行くとゝあつた。▲シ「私も左様に存じて。これまで出迎へまして御座る。▲立「夫は又如何様の事でおりに。▲シ「されば其事で御座る。當年は何と致してやら。私の酒を散々作り損ふて。中々召上らるゝ御酒では御座らぬ程に。女共にも。私持て出そと申て御座れ共。女のはかなさは。夫も水はらいで持て出まして御座る程に。必召上られて下さるゝな。▲立「扱々夫は氣の毒な事ぢや。乍去。皆いつも参りつた事ぢやに依て。少づゝなり共飲うてやらう。▲シ「いかな、甘う。酸う。苦う。辛う。一ト口も召上らるゝ酒では御座らぬ程に。平に御無用で御座る。▲立「扱々そらは正直な者ぢや。總じてあし物をも善いと云ふてこそ賣るに。扱々そらは奇特な者ぢや。▲シ「私も賣りたうは御座れ共。いつもの旦那衆へ惡しい酒を進めては。以來が賣れませぬに依て。斯様に申ます。又好う出来た時分には。左右を致しませう程に。皆御出なされて召上られて下さい。▲立「何が扱さうを申たならば。皆いて飲うてやらうぞ。▲シ「夫は忝う御座る。▲立「夫ならば是非に及びませぬ戻りませうぞ。▲立「夫が好う御座らう。▲立「さア、御座れ。▲立「参る。▲立「今日は太郎が酒が惡しうて散々で御座る。▲立「左様で御座る。(立衆一通廻る女見付けて)▲女「申々。いつもの太郎が酒で御座る。いづれも是へ寄つてまゐりませぬ。▲立「いや、其様な酸い酒はいやぢや。▲女「いや。殊の外好う出来まして御座るぞ。▲立「其様な辛い酒はいやぢや。▲立「苦い酒はいやぢや。

(など云ふて引込む) ▲女「はて合點の行かぬ。いつも寄らるゝ衆が皆寄られぬ。(と云ふて又居付く) ▲シ「なう〜嬉しや。まんまと調儀致いていつもの旦那衆は皆戻いた。外に珍らしい人は得参るまい。さらばあれへ行ってくだらうと存する。いや。なう〜。今日は天氣がよいに依て夥しい市立ちや。定めて酒も最早賣り切つたであらうと思ふて迎へに参つた。▲女「なう。腹立や〜。そなたはいつもの旦那衆へ何やら云ふて〜御歸しやつたの。▲シ「愛な者は何事を云ふぞ。何しに身共が其様な事をするものぢや。其上最前試をせうといへば。寶剣をせぬと云ふて振舞はなんだ程に。定めて夥しく賣れたであらう。鳥目も數多あらう。これへお出しやれ。某が繋いでやらう。▲女「ない。腹立や〜。我酒を散々に悪口して賣れぬ様にすると云ふ事があるものか。こゝな男畜生奴。▲シ「何ぢや。畜生ぢや。▲女「中々。▲シ「おのれ。云はせておけば方量も無い。薬で束ねても男は男ぢやに。其人に對ふて男畜生と云ふ事があるものか。▲女「ても我物を賣れぬ様にするは畜生も同じ事では無いか。▲シ「昔葉甘ういふておけば勝にのつて色々の事をぬかす。おのれ散々に打擲してやらう。(やつとなと云ふて酒ばやしを取りて打擲する。女迷惑がりて酒壺を弄出す) おのれが酒壺を身共にしつけたと云ふて某は飲みたうは無い。おのれ腰の骨を打折つて遣らう。(女又さしつくる) 何程さし出したと云ふてし飲む事ではない。おのれ酒壺共に打碎かう。(女又頻にさしつくる) 最前から頻に其酒壺を身共にさしつくるが。夫は眞實某に飲ませうと思ふてさし出すか。但うたるゝが迷惑さに差出すか。▲女「眞實此方に進ませうと存じて出します。▲シ「何ぢや。眞實舞ふ心で弄出すと云ふか。▲女「中々。▲シ「夫程に思ふ事ならば。飲みたうはなけれ共。是非に及ばぬ。堪忍して飲うてやらうか。▲女「夫は奈う御座る。何卒丁簡なしてのうで被下い。▲シ「夫ならば先下に居やう。▲女「夫が好う御座らう。さア〜。此で一ッ參れ。(五斗土器を出す) ▲シ「飲うてやらう程に是へ注がしめ。▲女「心得ました。▲シ「おう。丁度ある。▲女「丁度御座る。扱風味は何と御座るぞ。▲シ「風味の。▲女「中々。▲シ「ありやうは今朝から飲みたい〜と思ふ所へ。つかけて飲うだに依て。只ひいやりとばかりして風味を覺ぬ。今一ッ飲うて風味を覺ぬ。▲女「夫が好う御座らう。▲シ「又注がしめ。▲女「心得ました。▲シ「丁度ある。▲女「又丁度御座る。▲シ「いや。なう〜。▲女「何事で御座る。▲シ「誠に其方の白慢をする程あつて。いつもとは云ひながら。取置きよう出来ておりや。▲女「中々。殊の外よう出来て御座る。扱今一ッ参りませぬか。▲シ「む々。今一ッ飲まうか。逆もの事に其酒壺の蓋で飲まう。▲女「何でなり共参りませぬ。▲シ「又注がしめ。▲女「心得ました。▲シ「扱も〜。飲めば飲む程うまい酒ぢや。扱其方にちと願がある。▲女「夫は如何様の事で御座るぞ。▲シ「某も今迄色々として飲うだれ共。まだ濾のみをした事が無い程に。濾のみをさせてくれさしめ。▲女「何が扱こなたの酒で御座るによつて。如何様にしてなり共参れ。▲シ「夫は近來満足した。さア〜。是へ注いでくれさしめ。▲女「心得ました。▲シ「さらば飲む程に。此蓋の中に酒のたえぬ様に注がしめ。▲女「心得ました。注がしますぞ。▲シ「さア〜。注がしめ〜。むむ。扱甘い事ぢや。(女顔へ酒をかくる) やい。こゝな者。なぜに顔へ酒を注がけたぞ。▲女「今のは妾が粗相でかきました。許させられい。▲シ「夫ならば許す。此度は顔へかくらぬ様についでくれさしめ。▲女「心得ました。▲シ「むむ。扱も〜。氣味のよい事ぢや。▲女「さア〜。參れ〜。(と云ひながら又顔へかくる) ▲シ「是は何とするぞ。▲女「さア〜。飲ませられい〜。▲シ「是は何とするぞ。▲女「さア〜。參れ〜。▲シ「あゝ許さしめ。▲女「どれへ御座るぞ。こなたの存分にまぬれ(と云ふて。女後からづきかけながら追入りにする。)

又酒をつぎかくる時。おのれ情い奴め。顔へ酒をかくると云ふ事があるものかと云ふて。又酒ばやしに追入る。女許させられい〜と云ふて追入るにも。

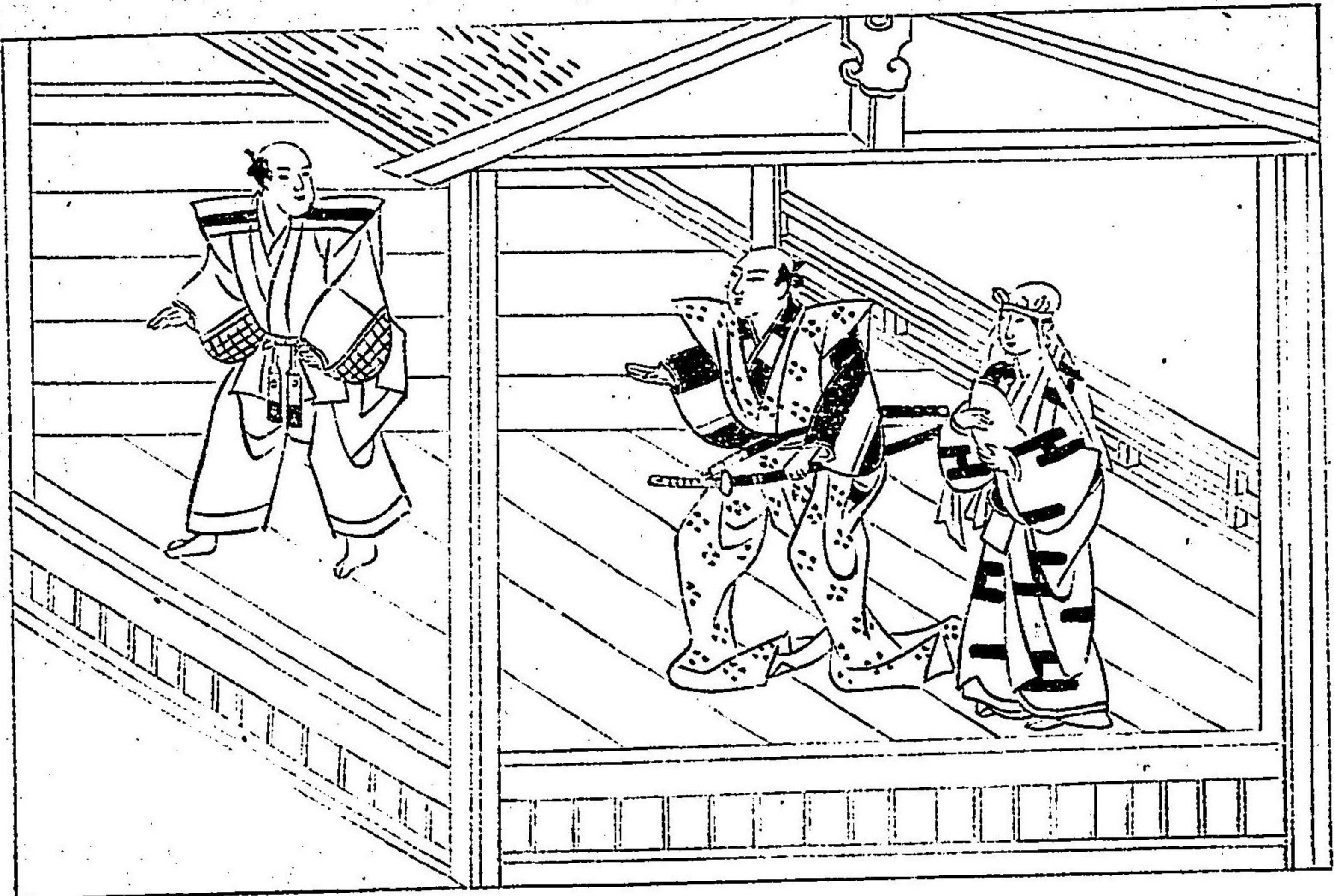
シテ 打擲兼同席。
常の通り。

立衆 何人にてち主打擲。

作物 槍棒一本。五斗土器一ツ。杉の葉少々。錫大瓶子一
(白丁徳利にても)。清水繩一房。晒布一丈五尺。熊
谷編笠一かい(黒緒組つけ)。

七子盗人

▲ウバ「扱もく、好うお寝ことかな。お座敷にそつと寝さしましよ。なうく嬉しや。下に寝さしました。此際に寛りと茶を飲ませう。▲シテ「此邊に隠れも無い。勝負人で御さる。此中平常の博徒等と寄合て、勝負を致したれば。さんく仕合せが悪うて。金銀は中に及ばず。女共が衣類迄。悉く打込で御さる。是では何とも致さう様も無いこと御さる。それに付。思ひ出たことが御さる。茲に誰殿と申て。有徳な人が御さる。これは金銀米銭大分持て居らるゝ程に。今夜彼へ忍入り。何なりとも取て参り。も一ト勝負致し。仕合せ致さうと存する。先づ徐々参らう。道行。やれく。皆人の意見をめぐる。時思ひ止れば好う御さるに。取返さうくと思ふて。うかく致し。此態になつて御さる。やア参るうちにこれちや。はや日が暮たちやによつて。確とは見えぬが。これは普請しられたと見えて。結構になつた。これでは表から這入れまい。裏へ廻らう。さればまた塀の手が合はぬよ。此塀を越さずばなるまゝ。越れうか知ぬ。えい。なうく嬉しや。塀は越すまし



た。これに葦垣が在る。此を切破らう。めり〜。はア悲しや。誰も聞かぬか知ぬまで。聞かぬやら人も出ぬ。嬉しや〜。先づ垣を潜らう。やア潜りすました。此様の戸を明れば座敷ぢや。さらば戸を明けう。さらさらさら。はア是は有明が在る。宵に客が有たと見えた。人は聞かぬかしらぬ。誰も聞かぬと見えた。扱も〜。結構な道具取散してゐる。風爐釜。茶入。茶碗。扱も〜。好い道具さうな。どれぞ一色取ても。一元手は有る。やア。これに小袖が有る。是は重疊のことぢや。此中女共が着る物を打込うだれば。殊の外機嫌が悪い。此小袖を盗て行て取らしたら。盗で御ざらう。先盗て歸らう。是は如何な事。子が寝させてゐる。扱も〜。乳母と云ふものは横着な者ぢや。此處へ寝させて置て。何處へぞ遊びに行たと見えた。扱も〜。好い子ぢや。やア手を出して。抱れうか。少抱かうか。ア。おぢやれ。はア。抱いたわ〜。扱々好い子ぢや。何も藝は無いか。振頭はふらぬか。かぶり〜。扱も〜。振頭がなるわ。しをらしいことかな。まだ藝は無いか。しほのめ〜。是は〜。しほのめもなるわ。扱も〜。藝者かな。嘸親達嬉からうの。やア。是はかひをつくて。身共が笑ふ聲が大きかつたで。肝が潰れたか。然らば

少睡しましたよ。肩に乗せましたよ。向ひ殿のゑのころ(犬ころ)は。未だ目が開かぬ。ころ〜。や。さらば少笑はしましたよ。やア。くつ〜。はア。機嫌が直つた。▲ウバ「若子様を。お座敷に寝かして置ました見に參らう。是は如何な事。盗人が這入つて居る。申々。御ざりますか。盗人が這入つて。若子様を抱いて居ます。▲主「何と云ふ。盗人が這入つたか。心得た。表へ人を廻せ。何處に居る。一撃にしてくれう。▲ウバ「はア。危険う御ざる。先づ待せられませ〜。▲シ「是々。盗人では無いぞ。座敷を見物に參つた。▲主「まだ汝。其様な事をぬかすか。打切てくれう。▲ウバ「あ。悲しや。若子様危険う御ざる〜。▲主「何の子共に切てくれう。▲シ「これ〜。切が實正なら。先づ此子から切りやれ。さアされ〜。▲主「切りでは。何方へ失せるぞ。やるまいぞ〜。▲ウバ「なう〜。是は如何な事。若子様を捨て逃居つた。なういとしや。此方へ御され〜。乳母が乳を進ませせう。なうなういとしや。疝氣が起らうか知らぬまで。

同

大藏流本

▲女(始に乳母子を抱て)「扱も〜能う御寝なる御子様かな。さらば表の御

座敷へ連れまして休ませませう。申々の爰に縋りと休ませられい。爰は勝手へ行って茶をたべて参りませう。(と云ふて申入) ▲「ミチ」名譽の是しやで御座る。此間あたりの若い者と寄合て。鹿の角を採む程に。繩に縛ふ程致打込うて御座るに依て。宿へ戻る事もならず。何共致さう様か御座らぬ。誠に世話に申如く。角力の果は喧嘩になり。博奕の果は盗を致すより外は無いと申が。某も只今は左様の手段ならでは致さう様か御座らぬ。夫に付。下の町に誰殿と申て。大有徳な人が御座るが。殊ない道具好で。不勘道具を取散いてあると申に依て。今夜あれへ参り。何ぞ道具の一式二色も案内なしにそつと借つて参り。夫を元手に致し。何卒打返さうと存する。雖じて斯様の事は背からつたがよいと申に依て。時分も好う御座る程に。先それり〜と参らうと存する。誠に斯様の事を致せば。後には面白うなつて。本ものになると申が。私に中々左様の事では御座らぬ。参る程に是で御座る。扱も〜用心きびしい棘かな。是では中々道入られまい。それ〜。先度愛道を通つたれば。まだ辨の手の合はぬ所があつた。さらば裏道へ参らう。何卒先度のまゝであれば。御座るが。さればこそ此裏垣一重ぢや。此を切明れば。則表の座敷ぢや。此様な事があらうと存じて。罾を用意致した。さらば切明けう。づか〜。づか〜。づか〜。づか〜。づか〜。づか〜。づか〜。されば此を引めくらう。めり〜。めり〜。めり〜。めり〜。鳴つたり〜。したまかな鳴様であつた。身共はうろたへた。人に聞かすまいと思ふて我耳をぢやつと塞いだ。人は聞きつけぬか知らぬ。誰も聞きつけぬと見ぬて静な。さらばくづらう。ふい〜。やつとな。はア。仕つけぬ事をすれば胸がくくめて氣味が悪い。いや。又これに辨がある。此分の辨は飛越ぬて参らう。やつとな。さればこそ是が表の座敷ぢや。先戸を明けて見やう。さら〜。肝を潰して退きて。火がともつてある。先落着いた。人が居るならば其儘とつて出やうか。人は居らぬと見た。だますかも知れぬ。見とけて参らう。あゝ是はこはものぢやが。めき足にて行き。のぞき見て。なう〜。嬉しや〜。誰も居らぬ。さら〜。扱も〜結構な世話かな。いや又有徳人の世話は違ふ物ぢや。腰から隠までも手のかうだ。好い世話ぢや。さればこそこれには色々道具を取散いてある。是は何ぢや。はア茶の湯道具ぢや。風爐。釜。茶碗。茶入。扱も〜。若

構な道具ぢや。此釜は定めて薦屋であらう。又此茶碗は疑も無い高麗であらう。扱又此茶入の装形のしならしさ。是は何を一色取つても一かどの元手ぢや。はア武器。馬具。扱も〜。美々しい事かな。や。これに結構な小袖がある。是はこはらの道具とはとり合はぬ。夫はともあれ。此間女共が機嫌も悪しう御座つた程に。さらば是を取つて。女共に遣はさうと存する。(と云ふて小袖を取り。子を見つけて) はア。これに子が寝させてある。(と云ふて) 是は定めて誰殿の稚いで御座らうか。何として此様な人達い所へ疑せて置いたか知らぬ。定めて乳母奴が此子なこれへ疑させて。已に勝手へ行て糞跡がな云ふて居るで御座らう。や。目をほつちりして。何ぢや。手を出して。おう。抱きませう〜。さらば抱きませう。やつとな。扱も〜。こなたは好い子ぢや。纏じて下々の子は知らぬ者を見ては必泣くものぢや。我御料は有徳人の子程あつて。此むくつけな者を見て。御笑やるの。何ぞ疑は無いか。てうち〜。(笑ひて) もう無いか。かぶり〜。(笑ふ) 扱々其方は藝者ぢや。餘り聲高に云ふたに依て機嫌がそれた。ちとすかしませう。ころころ〜。や。いとし子で御座るな誰か又泣いた。馳が来るに。泣くまいぞや〜。(返して云ふ) さればこそ機嫌が直つた。某も子を持って覺のが御座るが。眉目の悪し子で。ハ親の身では可愛う御座るに。誰殿は果親な人ぢや。そなたの様な好い子を持つて。さぞ嬉しう御座らう。纏じて狐の子は頬白と云ふが。其方は誰殿に能う御似やつて好い子ぢや。好い器置ぢや。最早何も疑は無いか。や。何ぢや。合點〜。もう無いか。にぎ〜。(笑ふて) 扱々藝者ぢや。あの餘念の無い顔は。ちとこぞりませう。こそ〜。(笑ふ) 扱々い機嫌ぢや。あゝ餘り聲高に申に依て又ちと機嫌がそれた。今度は肩車にのせてすかしませう。(子を肩に乘せて) はア。いとし殿御を肩にのせて。乗せてのせて。御所へ参らう〜。(いくつも返して云ふ) ▲「女」最前子様の座敷に疑さしまして御座るが。よう御寝なると見ぬて御聲が致さる。参つて見ようと思ひます。(と云ふて盗人を見付けて) 申。御座りまするか。▲「亭主」何事ぢや。▲「女」表の御座敷へ盗人が入つて。御子様の御守をしまする。▲「亭主」心得た。(と云ふて肩をぬき。太刀持て。やい〜。表の座敷へ盗人が入つた。此所は某が受取つた。裏へし脊戸へも人を遣はせ。出合〜) ▲「是は如何な事。見付けられたさう

な(と云ふて子を脇座へ置いて。シテ柱の方へ逃ぐる。▲亭「やい。おのれ情い奴の。胸切にしてやらう。▲シ」御座敷を見物に参りました。▲亭「何の夜中に座敷を見物。から竹割にしてやらう。▲シ」あゝ申々。聊爾をなさるゝな。私は盗人でない証據には。こなたの御大切のわ子様を乳母奴が人違い所へ寝さしまして。おのれはどれへやら雑談に参つて御座敷に依て。則御守りを致して居りました。▲亭「何の子の守りをするものか。胸切にしてやらう。▲シ」すればどうもつても切らせらるゝか。▲亭「斬らいて何とする物ぢや。▲シ」夫ならば先此子から斬らせられい。▲亭「其子をそこにおけ。▲シ」さア斬らせられい。▲亭「置ずは其子共に斬つて仕舞はう。乳母もだえて。あゝあぶない。先待せられい。早う其御子をおいて逃げて行けと云ふて主へ留める。▲シ」さア斬らせられい(と云ふて段々廻りて。仕手柱のきはへ子を下し逃している。あゝ許させられい。いぞ(と云ふて追入る。)

乳母は後にて子を抱き上げ。扱々あぶない目に逢はせられた程に。御毒命は長からう。いとをしのわ子様や。五百八十年七廻り迄も生延びさせられう。なう(と云ふて入る。

シテ
亭主
女
作物

打扮太郎冠者の通り。
主の打扮。太刀。
常の通り。子を箱をさせ抱きて出る。子。箱。
晒布一丈五尺。

八荷文

▲主「罷出たる者は。此邊の者で御ざる。兩人の者を喚び出し。或方へ使にやらうと存る。やい(と云ふ。太郎冠者。次郎冠者在るか。▲二人「はア。御前に居ります。▲主「早

かつた。汝等を喚び出すこと。別のことで無い。此文を左近の三郎殿方へ。兩人して持て行け。▲シテ「畏つて御ざる。此御状斗で御ざらば。次郎冠者一人遣され。私は宿に居りませう。▲主「いや(と云ふ。一人遣れば道寄をするやら。遅い程に。二人遣る。返事取たらば。早う歸れ。▲二人「畏つて御ざる。▲主「行て云はうは。此中は打絶えて人をも進ませなんだ。餘り床しさに文を以て申ますといふて。行て來い。▲二人「畏つて御ざる。▲主「早う歸れ。▲二人「はア。▲主「えい。▲二人「はア。道行▲シテ「次郎冠者。さア來い(と云ふ。此文を遣さるゝには一人でも苦しい無事。二人遣さるゝは。其方が常々戯談する故ぢや。少たしなめ。▲次郎「其方が道寄をする故ぢや。▲シ「やア。先から身共が持た。少其方持て。▲次「どれ(と云ふ。身共持たう。此方へおこせ。随分此度は早う歸らうぞ。▲シ「中々。其通ぢや。▲次「やア。除程持つた。さア又汝持て。▲シ「はて扱重物ではなし。すぐに持て。▲次「いや(と云ふ。持つことはならぬ。下に置ど。▲シ「やい(と云ふ。それなら好い事を思ひ付たわ。仕様が有る。竹に結付け。二人して荷ふて行かう。▲次「是は一段好かる。さア(と云ふ。結付させ。▲シ「心得た。さア好いぞ。こゝを擔げ。身共も擔

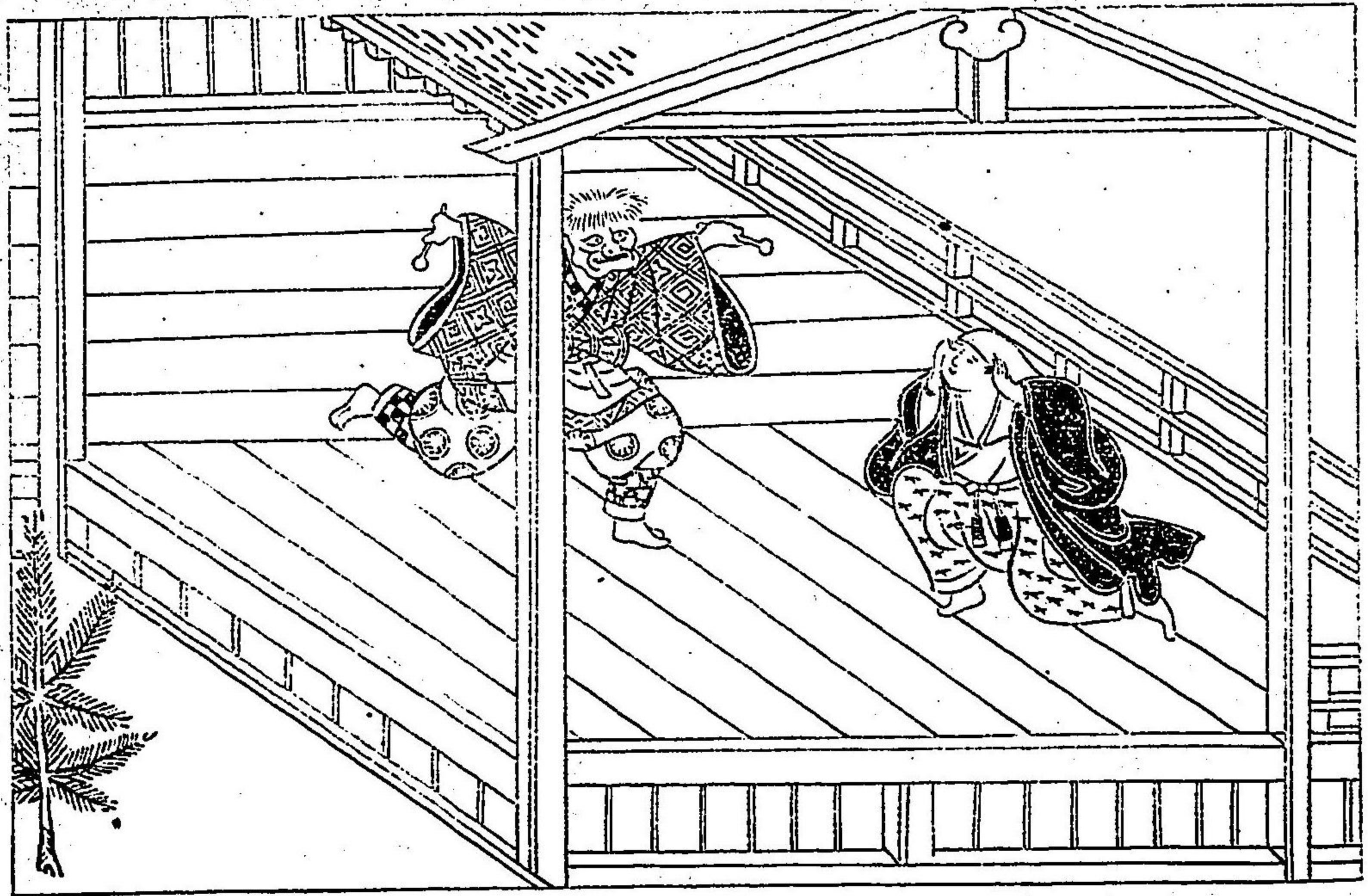
ぐるぞ。これ〜是でよいわ。やア。甚重たいと思へば。身共が方へばかり寄せて置いた。▲次「いや〜寄せはせぬ。中にあるわ。▲シ「此文が重からう筈は無い。不思議な事ぢや。戀の重荷といふことが有る。聞き及うたが。此文が戀の文ぢやによつて。重いと見えた。思ひ出した。此文の重うなつたに付た小歌を唱ふて行かう。▲次「一段好からう。▲二人「よしなき戀をするがなる。富士でみれどもをらればこそ。苦しや獨寝の。我手枕のかたかへて。持てどももたれず。そもこは何の重荷ぞ。▲シ「戀の文は。如何様な事が書いてあれば重いぞ。此文を披いて見まいか。▲次「むぎとしたことを云ふ。頼うだ人が聞かせられたら。善いとはおしやるまい。無用にせい。▲シ「見てから。元のやうに封じて置かうまで。▲次「いや〜。いらぬ事ぢや。無用にせいで。是は如何な事。早開いた。▲シ「さア〜。其方もこれへ来て讀うで見よ。▲次「さア〜讀まう。▲シ「扱も〜。過日の辱なき。海山〜。これこれ。重いこそ道理なれ。海山とあるわ。▲次「すれば。重が尤ぢや。▲シ「まだ有るわ。海ならば滄溟海。山ならば須彌山。之を聞け。扱も〜。わいたてないことを書入て置れたわ。▲次「どれ〜見せい。▲シ「先待て。▲次「は

て扱見せい。是は如何な事。引裂たわ。▲シ「それ〜。よい事を仕やつた。歸つて急度申さう。▲次「我御料が引たによつてぢや。身共は知らぬ。何としたらば好からうぞ。▲シ「されば何とせうぞ。▲次「思ひ出した。此破れた文。先へは持つて行かれまい。た々何方から來たとも無う。あをいでやらう。▲シ「一段宜からう。とてもものに。小歌節であをがう(扇がう)。あをがしませ。▲次「心得た。▲二人「かもの河原を通るとして。文を落したよの。風のたよりにつたへとかけかし。▲二人「あをけ〜。▲主「兩人の者を使に遣て御さる。殊の外遅い。見に參らう。これは如何な事。汝等何をして居る。これは如何な事。大事の文を引裂居つた。▲シ「いや。是は御返事で御さる。▲主「何の返事とは。扱も〜。憎い奴の。何方へ失せる。やるまゝぞ〜。

九 針立雷

▲イシヤ(次第に出づる)やくしゆも持たぬやぶくすし〜。きはだや頼みなるらむ。是は都に住居致す御醫者で御さる。都には上手の醫者が數多御さるに依つて。身共が如く

なる下手な醫者は流行ませぬ程に。此度思ひ立。東の方へ
 持ぎに参らうと存する。道行。先急いで参らう。やれく、
 久々仕なれた故郷をふり捨て。此如くに東へ下るは。何と
 も氣の毒なことで御ざる。乍去。又追付仕合せを致して上
 らうと存る。やア参る程に。これは廣い野へ出た。定て是
 は聞き及うだ。武藏野といふが是であらう。扱もく廣い
 ことかな。やア。今迄好い天氣であつたが。俄に暗うなつ
 た。夕立がすると見えた。此野で夕立に遇ふたら。何共な
 るまい。はア。何方やら雷の鳴る音もする。さればこそ夕
 立がして来た。雷も頻に鳴るわ。落はせまいか。桑原く
 く。▲シテ雷「ひつかりくく」づでいどう。あ、悲
 しや。これは踏損して落た。扱もく。した、か腰骨を打
 た。はア痛や。やい、そこな奴。汝は何者ぢや。▲「私
 は醫者で御ざります。東の方へ下ります處に。夕立に遇
 ひました。▲シテ「何ぢや、醫者ぢや。身共不慮に爰へ落
 た。した、か腰を打た。療治を爲てくれ。▲「私も人間
 の療治は。形の如く致しましたが。雷殿の療治は。終に
 致しませぬ。御免されませ。▲シテ「いや、人間の療
 治の雷の療治のと云ふて。別に差違は有るまい。療治せ
 い。▲「い、如何御ざつても。御免されませ。▲シテ「汝は



憎い奴の。療治を爲ぬに於ては、たつた一攫に攫み殺してやらうぞ。▲イ「あゝ、悲しや。眞平御免されませ。成程療治致しませう。先づ脈をうかひませう。▲シテ「いかにも見てくれ。▲イ「然らば脈をとりませう。▲シテ「やい、これは異つた脈ぢやなア。▲イ「其義で御さる。人間の脈は手に御さる。雷殿の脈は頭脈と申て。頭でとります。▲シ「それ。夫程知つて居て知らぬといふ。何とあるぞ。▲イ「されば。脈が殊の外高ぶりますが。足下には、御持病が有ると見えました。▲シ「やア。其方は大きな上手ぢや。成程己は持病が有る。持病は何でわらうと思ふ。▲イ「然れば御持病は。中風が有ると見えました。▲シ「扱も上手ぢや。中風がある。何と中風も治り。又した、か腰を打たも。療治をして癒してくれまいか。▲イ「されば。中風は。宿で御されば、薬を調合致しませうけれど。途中の事で御さる。何共なりますまい。腰の痛には。針を持合せました。針を致しませう。▲シ「其針と云ふは。痛い物では無いか。▲イ「いや。痛うは御さらぬ。人間さへたてます。▲シ「それなら立てくれ。▲イ「畏つて御さる。横にならせられ。此如くに針を懐中して居ります。何處許が好う御さらう。爰は何と御さる。▲シ「成程

其處が好いさみぢや。▲イ「それなら爰に一本立てませう。はつし。▲シ「あいた。▲イ「はつし。▲シ「あいた。やれ。痛いわ。早う抜いてくれ。▲イ「これは雷殿。とも覺えませぬ。人間さへ立ます。経絡が違ひます。何んと身を悶えなされる。▲シ「いや。堪忍ならぬ。早う抜いてくれ。▲イ「尤で御さる。扱さすぞ。耐へさせられ。さア扱きました。何んと御さる。▲シ「はア。さても。痛い物ぢや。去ながら今の針で。痛みが餘程治つた。乍去。未何處やら痛みの残つた所が有つて。氣味が悪い。▲イ「夫なら。も一本立てたら。痛みも中風も。すさと癒りまして。根を切つて進ませせう。▲シ「それなら。も一本立てくれ。痛う無い様にしてくれ。▲イ「心得ました。爰が好う御さらう。爰に立ませう。はつし。▲シ「あいた。▲イ「はつし。▲シ「あいた。やれ。やれ。耐へられぬぞ。早う抜いてくれ。▲イ「今少しで御さる。待せらう。抜きますぞ。きつとして御され。▲シ「いや。痛うて如何もならぬ。早う抜け。▲イ「心得ました。扱さすぞ。さア扱きました。何と御さる。▲シ「扱も。痛い物かな。はア。今の針で。痛がすきと好いわ。▲イ「さう

で御ざらう。それなら。少立て見させられ。▲シ「立て見やう。手を執てくれ。▲イ「心得ました。手を執て立たしませう。何と御ざる。▲シ「立て見ても好い。嬉しうこそわれ。最早身共は天上するぞ。▲イ「是申々。▲シ「何事ぢや。▲イ「只今療治を致した薬代を下され。▲シ「いや身共は。ふと爰へ落たによつて。持合が無い。好い便宜におこさう(遣さう)ぞ。▲イ「いや。それが何時のことやら知れませぬ。此如くに。私の遠國へ廻りますも。薬代を取り。身を立う爲で御ざる。如何でも只今取らねばなりませんぬ。▲シ「それでも無い物は是非が無い。やア好い事を思ひ出した。ものとせうぞ。▲イ「何とで御ざる。▲シ「今度夕立のする時に。其方が處へ落ちて。其時薬代を遣らうぞ。▲イ「ホウ。をとまし(疎まし)や。聞きも厭で御ざる。いやでもおうでも。今取らねばなりませんぬ。▲シ「それは醫者殿。聞分がない。持合せがなければ。此處に近付と云ふては無し。借て遣らうやうもない。何とそれならば。身共に薬代の代に。何ぞ似合ふた望は無いか。▲イ「されば何で御ざらうぞ。や。思ひ付た。此如く。田舎遠國を廻りますれば。今年水損がいた。早損がいたのと申て。薬代呉れませぬ程に。今から早損も水損も

無いやうにして下され。▲シ「それは何より易い事ぢや。身共が儘ぢや。水損早損のいかぬやうにして。世の中の好いやうにしてやらうぞ。▲イ「夫は辱なう御ざる。▲シ「其上を。典薬の頭に祝ふてやらうぞ。▲イ「いよ。辱なう御ざる。▲シ「それなら。此様子を諸に唄うて。天上せう程に。汝も唄へ。▲イ「心得ました。▲シ「太鼓打上げ」「ふつてはてらしつ。」「一千年が其間。水損早損あるまじき。御身はやくしのけいんかや。中風をなはす醫師をば。てんやぐのかみといひすて。又なるかみは上りけり。びつかり。▲イ「桑原

同雷

大藏流本

▲アト(次第)「薬種も持たぬ敏くすし。黄蘗や頼みなるらん。是は落中に住居致す醫師で御座る。只今部には典薬頭何のと申て。上手の醫師が數多御座るに依て。われ等如きの醫師には誰も味を見する者も御座る程に。今は渡世を遣らうやうがなうて迷惑致す事御座る。夫に付承れば。香妻には醫師が少いと申に依て。是より香妻へ下り。一ト稼ぎかせいで見やうと存ずる。先そろり。と参らう。誠に住馴た花の都をふりすて。他國へ参ると申は本意に御座られ共。是も浮世の習ひなれば是非もない事御座る。又仕合を致いたならば都へ上らうと存ずる。いや。参る程に。是は渺々とした廣い野へ出たが。是は何と云ふ所ぢや知らぬ。是は如何な事。俄に空が曇つて神鳴が致す。此様な處に永居は無用。た急いで里近くへ参らうと存ずる。▲シ「びつかり。ぐわらり。▲ア「あ

桑原「二」這廻りて膝座へかゝむ。▲シ「びかり／＼。ぐわらり／＼。ぐわらり／＼。どう。あゝ。痛や／＼。今日に心面白う鳴り渡つたれば。ふと雲間を踏外いて此野へ落ちて。したゝかに腰の骨をうつつた。いや。これに何者やら居る。やい／＼。そんな奴。▲ア「はア。▲シ「おのれは何者ぢや。▲ア「私はいして御座る。▲シ「石がものを云ふものか。▲ア「いや。醫師と申て人間の病を直す者で御座る。▲シ「何ぢや。醫師と云ふて人間の病を直す者ぢや。▲ア「中々。▲シ「身共は雷ぢやい。▲ア「はア。▲シ「今日に心面白くなり廻つたれば。ふと雲間を踏外いて此所へ落ちて腰の骨をしたゝかに打た。乍去。何ぞ取つく物があれば即天上するが。折節何も無い所。今は天上せう様が無い。汝誠の醫師ならば身共が腰を直してくれい。▲ア「畏つては御座りますが。私も今迄色々の療治を致して御座れ共。お雷の御療治は終に致いた事が御座らぬ。是は御免なされて被下い。▲シ「おのれは情い奴の。人間の雷のと云ふて別に違ふ事はあるまい。おのれ療治せずば引裂いてのけう。▲ア「はア。眞平助けて被下い。御療治を致しませう。▲シ「何ぢや療治をせうと云ふか。▲ア「左様で御座る。▲シ「夫ならば命を助けてやらう程に早う直してくれい。▲ア「畏つて御座る。先御脈をうかいませう。▲シ「如何様にしてなり共直してくれい。▲ア「心得ました。と云ふて頭脈を見る。▲シ「これは何とする。▲ア「はア。人間の脈は左右の手で見ますが。お雷の脈は頭脈と申て頭で見ます。▲シ「夫程知つて居るでは無いか。▲ア「はア。▲シ「扱何とあるぞ。▲ア「お雷には御持病に中風があると見えます。▲シ「扱々汝はいかい上手ぢや。中々持病に中風があるはやい。▲ア「左様で御座らう。容許で御座らば御薬を上げませうが。こゝもとは途中で御座るに依て。御針を致しませう。▲シ「針とは。▲ア「是で御座る。▲シ「夫を何とするぞ。▲ア「之を痛所へ打込みます。▲シ「甚な者は。何と夫がたてらるゝものぢや。▲ア「是は如何な事。人間でさへたてまする物を。お雷のたてさせられぬと申事があるもので御座るか。▲シ「何ぢや。人間が立てる。▲ア「中々。▲シ「よい／＼。人間のたてるものならば身共もたてう程にうつつてくれい。▲ア「畏つて御座る。先横にならせられい。▲シ「心得た。▲ア「此邊で御座るか。▲シ「おう。其邊ぢや。▲ア「只今うちます程に動かせらるゝな。▲シ「動く事ではない。▲ア「はッし／＼

▲シ「あゝいた。▲ア「申。其様に動かされてはなりませぬ程に。動かぬ様になされい。▲シ「心得た。痛まぬ様に打て。▲ア「畏つて御座る。はッし。▲シ「お痛。▲ア「はッし。▲シ「お痛。▲ア「はッし／＼。▲シ「お痛／＼。早うとつてくれい。▲ア「只今とります。何とよう御座るか。▲シ「む々。何とやらこちらの方は餘程快う覺ゆる。今度はこちらへも打てくれい。▲ア「畏つて御座る。▲シ「必痛まぬ様にうて。▲ア「今の様に動かせられては針がうたれませぬ程に。動かぬ様になされて被下い。▲シ「心得た。▲ア「此邊で御座るか。▲シ「おう。其邊ぢや。▲ア「今うちます。▲シ「心得た。▲ア「はッし。▲シ「お痛。▲ア「是は如何な事。其様に動かせらるゝな。▲シ「痛まぬ様にうて。▲ア「心得ました。はッし。▲シ「あゝ痛。▲ア「はッし。▲シ「あいた。▲ア「はッし／＼。▲シ「あいた／＼。早う取てくれい。▲ア「畏つて御座る。はア。とりまして御座る。▲シ「何とつたか。▲ア「中々とりました。▲シ「夫ならば起きて見やう。やつとな。はア。一段と快うなつた。逆もの事に立て見やう。▲ア「夫がよう御座らう。▲シ「はア。すきと快うなつた。もはやすぐに天上せう。▲ア「あゝ。先待せられい。▲シ「何事ぢや。▲ア「薬禮を被下い。▲シ「薬禮とは。▲ア「されば其事で御座る。人間の病も療治致せば。分限に應じてそれ／＼に禮を致します。こなたも禮をして天上なされい。▲シ「むむ。是は尤ぢや。乍去。今日には不圖雲間を踏外いて此所へ落ちたに依て。何も持合がない。汝が宿を云ふておけ。重ねて落ちてとらせうぞ。▲ア「夫は何共迷惑に御座る程に。何ぞ薬禮をおいて御座れ。▲シ「夫ならば此掬をやらう。▲ア「それは何の益に立ちませぬもので御座る。▲シ「夫ならば此大鼓をやらうか。▲ア「それもいらぬ物で御座る。▲シ「今も云ふ通り。外には何も持合が無い。夫に付。人間と云ふ者は願望の有るものぢや。汝は其様な事は無いか。▲ア「中々望が御座ります。▲シ「夫を云ふて見よ。▲ア「雨風は此方の御自由になりますか。▲シ「中々。雨風は身共がまゝになる事ぢや。▲ア「總じて人間は。當年は早損の。又は水損のと申て薬禮をくれませぬ。我等如きの者は。世の中さへよう御座れば渡世が致しやう御座る程に。早損水損の無い様に守つて被下い。▲シ「是は尤な望ぢや。夫は如何程の間守つてとらせうぞ。▲ア「如何程と申事は御座らぬ。何時迄も世の中

い様にして被下い。▲シ「何時までもと云ふては限りがない。百年が間早損水損の無い様にしてとらせう。▲ア「百年と云ふては餘り少なう御座る。一万年計りも守つて被下い。▲シ「夫も夥しい事ぢや。ふい〜。某が了簡を以て八百年が間早損水損の無いやうにしてとらせう。▲ア「是は奈なう御座る。▲シ「其上汝を典樂の頭になて取らせうぞ。▲ア「尙々で御座る。▲シ「約束の違はぬ様に此由を唄ふて天上せう。それへ寄てきけ。▲ア「畏つて御座る。▲シ「降りつ照らいつ〜。八百年が其間。早損水損もあるまじや。御身は樂師の化現かや。中風を直すくすしを典樂の頭といひ捨て。又雷は上りけり〜。びかり〜。ぐわらり〜。▲ア「桑原〜。と云ふて耳を塞ぎあとより入る。

シテ雷

着付大格子類厚板。下袴。大猿様厚板つば折り。腰帶。赤頭。色鉢巻。武悉の面。羯鼓をつけ杵をもつ。但はつびの肩取ても。

アト醫師

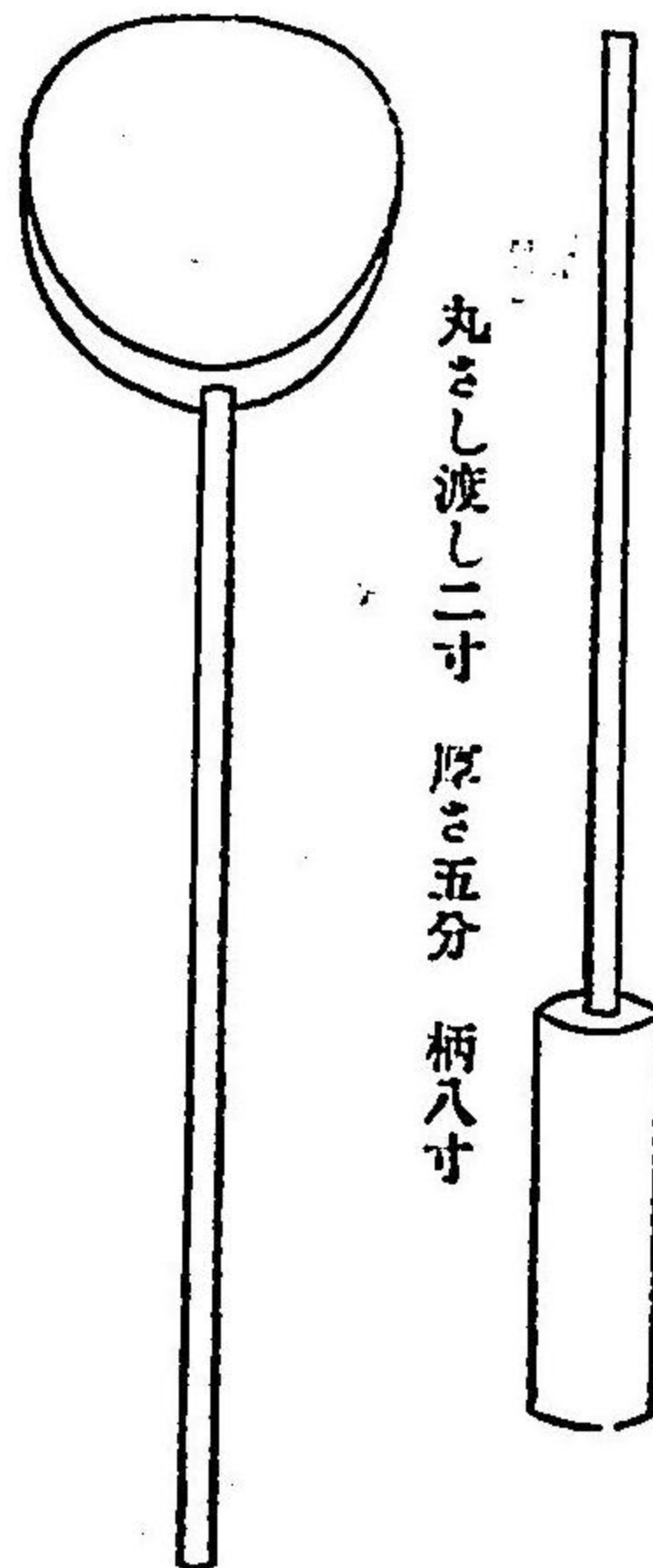
着付無地髪斗目。狂言袴。腰帶へんとつ。角頭巾。

作物

針。針。

箱置柄木白 柄共に九寸

丸さし渡し二寸 厚さ五分 柄八寸



十 墨塗女

▲シテ大名「遠國に隠れも無い大名。長々在京する所に。

訴訟思のまゝに相叶ひ。新地を過分に拜領致した。これ程嬉しう事は御ざらぬ。先づ太郎冠者を喚び出し。悦ばさうと存る。やいやい。太郎冠者在るかやい。▲太郎冠者「はア。▲シテ「居たか。▲太「お前に居ります。▲シテ「汝を喚び出すこと別の事でも無い。長々在京する所に。訴訟悉く相叶ひ。新地を大分拜領したは。芽出度事では無いか。▲太「是は御意なざる、通り。お芽出度事で御ざる。▲シテ「夫に付。國元へ追付下るであらう。さうわらば、彼の人に又何時逢はうも知れぬ程に。今日は暇乞ひに。彼の人の方へ行かうと思ふが。何とあらう。▲太「是は一段と好う御ざりませう。▲シテ「それならいざ行かう。汝も供をせい。▲太「畏つて御ざる。道行。▲シテ「さア来い〜。▲太「参ります。▲シ「やい〜。此仕合せを國元に聞いたら、今日か明日かと思ふて。待兼て居やうぞ。▲太「左様で御ざる。申々。何かと申内にこれで御ざる。御出なされた通り申ませう。それに御ざりませ。▲シ「心得た。▲太「申御ざりますか。頼うだ御方の御出なされて御ざる。▲女「やア。珍しい聲がする。太郎冠者。何と頼うだ人の御ざつた。▲太「中々左様で御ざる。▲女「おう〜珍しいや。これはどちら風が吹いて御出なされた。此中は久々見えませなんだ

に依つて。心許なう存じました。▲シテ「いかにも此中は久しうおりやる。先づ我御料も息災で。満足致した。夫に付。太郎冠者。今のことはいはうか。▲太「仰せられませ。▲女「何事で御ざる。心許無う御ざる。▲シテ「いや。別の事でも無い。長く在京する所に訴訟思ひのまゝに叶ひ。近日國へ下る程に。今日は其方に。暇乞ひに来ておりやるわ。▲女「やア。何と仰せらる。國元へ下る。それなら又何時逢ひませうも知れまい。扱も。悲しい事で御ざる。(水入を側に置貌へぬり泣く)▲シテ「其方の嘆は尤ぢや。乍去國へ下つたらば。追付迎ひを上すであらう。待て居させませ。(泣なり)▲女「さう仰せられても。足下の心が。國元へ御さつたら變り。妻が事を忘れさせられうと思へば。悲しう御ざる。▲太「是は如何な事。誠に泣かると思ふたれば。貌へ水を塗つて泣かる。惜い事ぢや。申々。一寸御され。▲シテ「何事ぢや。▲太「彼を貴君は。眞實泣と思召か。彼は。貌へ水を塗つて泣かれます。▲シテ「何の其様な事が有らう。あれ程離別を悲しがつて泣くの。何を譯も無いことをいひ居る。▲女「申々。何方へ御ざります。御目にかゝるも。少時のうちで御ざる。爰に御ざりませ。▲シテ「されば。太郎冠者が。用が有ると云ふ

たによつて。彼へ行たれば。譯もなし事を云ひ居つた。▲太「是は如何な事。彼程水を眼へ塗つて泣に。未氣が付かぬ。思ひ付た。致しやうが有る。墨を取代て置ませう。(水入と墨ととりかへる)▲女「扱も。悲しや。片時も離れぬやうに思ひましたれば。離別になりまして。悲しう御ざる。▲太「扱も。可笑い事かな。取代へ置いたを知らいで。墨を貌へ塗つた。彼の貌は。扱も。をかしや。申々御され。▲シ「何事ぢや。▲太「貴君は誠になされぬに依て。私が水と墨と取代て置ました。彼の貌を見させられ。▲シ「誠にあれは汝が云ふ通ぢや。扱も。驅された。惜い事ぢや。何とせうぞ。思ひ出した。此鏡は形見ぢやと云ふてやつて。耻をか。せう。▲太「一段と好う御ざらう。▲シ「なう。國元へ下つたらば。追付迎ひを上さうけれど。それ迄の形身ぢやと思ふて。此鏡を見ても。我御料に此をやるぞ。▲女「扱も。いや。悲しう御ざる。此様な形身を貰はうとは。夢にも思ひませなんだ。扱も。情無い事で御ざる。やア。これは何者が。此様に墨を塗らし居つた。わ。腹立や。足下が仕やつたか。腹立や。▲シ「いや。己は知らぬ。太郎冠者が才覚ぢや。▲女「知らぬとおしやつても猶かぬ。

墨を塗らねばおかぬぞ。▲シ「是は何とする。貌へ墨を塗つて。やれ。許容せ〜。(逃入る)▲女「やア。太郎冠者め。其處に居るか。汝も塗つてやらう。▲太「これは何とめさる。此様に塗られて。どう行なれうぞ。わゝ免さしやれ〜。▲女「何方へ失せる。また塗らねばならぬ。やるまじぞ〜。

同墨塗 大藏流本

▲シテ「遠國に隠れもない大名です。永々在京致す所に。訴訟悉く叶ひ。安堵の御教書を受き。新地を過分に拜領致し。其上國許への御暇迄を下されて御座る。此様な難有い事は御座らぬ。先太郎冠者を呼出して。悦ばせうと存する。(常の如く喚出して)汝を喚出す事。別なる事でもない。永々在京する所に。訴訟悉く叶ひ。安堵の御教書を受き。新地をも過分に拜領したば。何と難有い事では無いか。▲太郎冠者「斯様の御仕合せを待受ます所に。近來目出たう存じます。▲シ「夫〜。夫に就。又汝が悦ぶ事があるいやい。▲太「夫は又。如何様の事で御座るぞ。▲シ「國元迄の御暇を下された。▲太「これは重れ〜。思召すまの御仕合せで御座る。▲シ「其通りぢや。扱。夫に付。明日は國許へ下らうと思ふが。彼の人の方へ。暇乞に行たものであらうか。但し又。沙汰無しに下らうか。▲太「かれば。御恨深い御方で御座るに依て。これは。御出なされたならば。御座らう。▲シ「某もさう思ふ程に。夫ならば追付て行かう。▲太「好う御座りませう。▲シ「さ〜。来い来い。▲太「参ります。▲シ「此方へ喚うて逢うてもよけれ共。皆暇乞に見た時。宿に居ながら。逢はぬも氣の毒ぢやに依て。あの方へいて。緩りと暇乞をして戻らう。▲太「夫が好う御座る。▲シ「さりながら。恨深い人ぢやに依て。明日立て行くと聞かれたならば。嗚肝を潰されう。▲太「誠に。殊ない御款で御座らう。▲シ「いや。参る程にこれぢや。男共は表へ通らう程に。床机をくれない。

▲太「長つて御座る。はア。御床机で御座る。▲シ「汝は勝手へ行て。身共が来た事を云ふて来い。▲太「心得ました。物申。案内申。▲女「いや。聞馴れた聲で。表に物申とある。案内とは誰様で御座る。▲太「いや。私で御座る。▲女「ふい。太郎冠者か。よ〜。しい。我御料ならば。案内に及ばうか。なぜに斯う御通りやらぬぞ。▲太「左様に存じて御され共。御客はし御座らうかと存じて。案内を乞ひました。扱。頼うだ人の御出なされて御座る。▲女「何ぢや。頼うだ御方の御出なされた。▲太「中々。▲女「是は如何な事。何の頼うだ人は。妾が方を見限らせられたものを。何として御出なさるものぢや。これは其方の。妾を悦ばすのであらう。▲太「いや。早表へ通られてで御座る。▲女「ならさるゝと思へ共。さうおしやるに依て。夫ならば。あれへ行て見やう。いや。これは誠に御出なされた。やれ〜。おなつかしや。今日はどち風が吹いての御出なされて御座るぞ。定めて妾が方へでは御座るまい。門邊で御座らう。▲シ「御恨は御尤で御座るが。此問は殊の外せはしう御座つて。久しう御見舞も申さず。太郎冠者さへ忙しうて。便をも致しませなんだ。▲女「此方の口のきかせられたいままに。其様な事を仰せらるゝ。たとへ此方こそ御用多に御座らう共。太郎冠者を下さるゝ事のならぬ程の事は御座るまいが。妾を忘れさせられたもので御座らう。▲シ「何しに忘るゝもので御座るぞ。眞實暇が無うて。無沙汰致いて御座る。扱。今日参るも。別なる事でも御座らぬ。先こなにも悦うて下されいば。内々の訴訟の事。思ひのまゝに叶ひ。安堵の御教書を受き。新地を過分に拜領致いて御座る。▲女「やれ〜。夫は目出たい事で御座る。妾も此方の御訴訟の事を案じて居りました。思召すまに叶ふて。御加増迄とらせられ。此様な嬉しい事は御座りませぬ。▲シ「さりながら。外にこなたの肝を潰させらるゝ事が御座る。▲女「夫は心が。よりに御座るが。いぢやうの事で御座るぞ。早う云ふて聞かせられい。▲シ「國許への御暇までを下されて。明日は下りまするに依て。今日は御暇乞に参つて御座る。▲女「や。何と仰せらるゝ。御暇が outcome。明日は早御國許へ下らせらるゝ。▲シ「中々。(女泣きて。猪口の水を目にぬる)▲女「扱〜。妾は何時迄も此方に御出なさるゝことと存じて。御目に掛つて御座るに。斯様に今なと御別れ申と存じたならば。初より御目に掛りますまいものを。▲シ「私も斯様に御座らうと存じたならば。御

目に掛るまいものな。さりながら。又近い内には上ります程に。其時分。緩りと御目に掛りませう程に。さう思ふて下されい(など云ふて。シテも泣く也。女。ひたもの水を塗るを太郎冠者見つけて)▲太「是は如何な事。あの女は。誠に泣くかと存じて御座れば。側へ水を置いて。それをつけて泣く真似を致す。此由を頼う人へ申さう。(と云ふてシテを呼ぶ)▲シ「何事じや。▲太「申。あの女は。眞に泣くと思召しますか。▲シ「爰な者は。むざとした。あれ程眞實歎かるものな。なぜに其様な事を云ふぞ。▲太「いや。あれは側へ水を置いて。それを塗つて泣く真似を致します。▲シ「又むざとした事を云ふ。其様な事は。いはぬものぢや。▲女「申々。どれへ御座るぞ。▲シ「今用の事があつて。太郎冠者が呼びまするに依て。あれへ参つた。▲女「それ見させられい。たまへ御出なされても。はや妾をうるさう思召て。表へ出させらるゝ。其御心ぢやに依て。御國へ歸らせられたらば。妾が事などは。ふつりと忘れさせらるゝであらうと思へば。悲しうてなりませぬ。▲シ「何しに今迄御馴染申たものな。忘るゝもので御座るぞ。御許へ下りたらば。早々文の便をも致しませう。▲女「只今こそ左様に仰せらるれ共。御國許へ下らせられて御座らば。色々向白い御樂も御座らう程に。中々妾などが事は。思召出さるゝ事では御座らぬ。忘れさせられぬ御心ならば。爰許に御出なさるゝ内も。折々は御出なさるゝ筈なれ共。近來は何の彼のと仰せられて。御出もなされず。太郎冠者へ下されぬものな。何として。御國許で妾が事などを。思召出さるゝもので御座るぞ。逢ふは別れの始とは申せ共。斯様に果敢ない御別にならうと存じたらば。御馴染申まいものな。近來くやしい事を致した。(右の言葉の内。又太郎冠者シテを呼ぶ)▲太「あれ程に水をつけて泣くを。此方は御氣が付きませぬか。▲シ「扱々そらばむざとした事をいふ。あの様に眞實に云て泣く物を。又してもむざとした事を云ふか。すつこんで居る。▲太「是は如何な事。又誠にされぬ。思へば。あの女めが。憎い奴で御座る。何卒して耻を與へたいものぢやが。夫々。好い事を思ひ出した。と云ふて。墨と水とを取替る(これ)。斯様に致いたならば。頼うだ人も御合點が悉るであらう。(と云ふて座に着く)▲女「申々。頼うだ御方。どうへ御出なされたぞ。申々。頼うだ人。▲シ「いや。どれへも参らぬが。又表で人が逢はうと申に依て。一寸あれへ参つた。▲女「それ。それ見させら

れい。妾がとやかう申をうるさう思召して。何の彼のと仰せられて。立ちつ居つなさるゝ。いかに男ぢやと云ふて。さりとは御心強い御方で御座るぞ。▲シ「扱々。なたはむざとした。何しにうるさう存じませう。明日は爰許を立つ事故。色々用の事があつて。夫故での事で御座る。▲女「妾は少しの間御目に掛からいでさへ堪へ難う御座るに。御國へ下らせられたならば。何としてよう御座らうぞ。▲シ「去程に思召すならば。御許へ下つたならば。早々太郎冠者を迎ひに上させませうか。何とで御座らう。▲女「何と仰せらるゝ。太郎冠者を迎ひに下さるゝ。▲シ「中々。此邊にて。シテ。女の顔に墨の着いたるを見付けて。肝を潰し。大臣柱の方へ退きて。太郎冠者。此方へ来い。▲太「用は御座るまい。▲シ「ちと用がある。早う来い。▲太「何事で御座るぞ。▲シ「あれは何とした面ぢや。▲太「夫見させられい。私の中を聞かせられぬに依て。墨と水とを取替へておきました。▲シ「一段と出かいた。扱々憎い奴ぢや。何卒して耻を與へたいものぢや。▲太「誠に。あの面を見せたい事で御座る。▲シ「いや。思出した。此は身共が朝夕持つた鏡なれ共。形身に進じまると云ふて。遣つてくれい。▲太「畏つて御座る。(此言葉の内)▲女「夫は近來悦ばしい事で御座るが。さりながら。最前も申通り。爰許でさへ。太郎冠者を御使にも下さらぬを。遙々と御國許へ下らせられて。何として迎ひには遣はさるゝもので御座らう。御國許へ下らせられて。美しい氣様に御目に掛らせられたらば。妾が事などは。夢にも見させらるゝことではあるまいと思ひませれば。身も世もあらぬ様に悲しうてなりませぬ。(と云ふて。ひたもの泣く)▲太「いや。中々。其様に泣かせらるゝな。頼うだ人の仰せらるゝは。此は朝夕肌身を離さず持たせられた髪鏡で御座るが。こなたへ御形見に進ぜらるゝと仰せられます。▲女「いや。妾は御形見いらぬ。頼うだ人に御別れ申て。何にするものぢやぞ。▲シ「いや。其様に仰せらるゝな。最前も申通り。御許へ下つたならば。早々太郎冠者を迎ひに進じます程に。夫迄に某をなつかしう思召す時は。其鏡を見させられて。心を慰めさせられいと申事で御座る。▲女「はア。何と仰せらるゝ。追付太郎冠者を迎ひに上させせらるゝに依て。夫迄に此方を御懐しう思ひまする時分に。出て見て。心を慰めと仰せらるゝか。▲シ「中々。其通りで御座る。▲女「夫ならば。御志で御座るに依て。申受けて置ませう。▲シ「夫でこそ此方も嬉しう御座

る。夫ならば。先蓋をとつて見させられい。▲女「夫ならば。蓋をとつて見ませうか。」と云ふて蓋を取り。己が顔を見て。はて。合點の行かぬ。やい。わ男。よう妾に耻を興へおつたの。何としてくれうぞ。▲シ「いや。身共は知らぬ。太郎冠者が仕た事でありや。▲女「やい。太郎冠者。よう妾に耻を興へたの。おのれ引裂いてくれうか。喰裂いてくれうか。」と云ふて墨を顔へ塗る。▲太「あ。私では御座らぬ。頼うだ御方で御座る。許させられい。」と云ふて逃る。▲女「やい。わ男。妾に耻を興へおつたに依て。おのれ引裂いてやらうか。喰裂いてのけうか。▲シ「身共は知らぬ。許さしめ。」▲女「逃げたと云ふて逃がさうか。あの横着者。捕へてくれい。やるまいぞ。」(進入る也。シテへも顔へ墨を塗る也。)

シテ大名

着附紅段髪斗目(但長上下にてする事もあり。鏡懷中する)。

太郎冠者

常の通り。

女

着付箱。女帯。ひなん。

作物

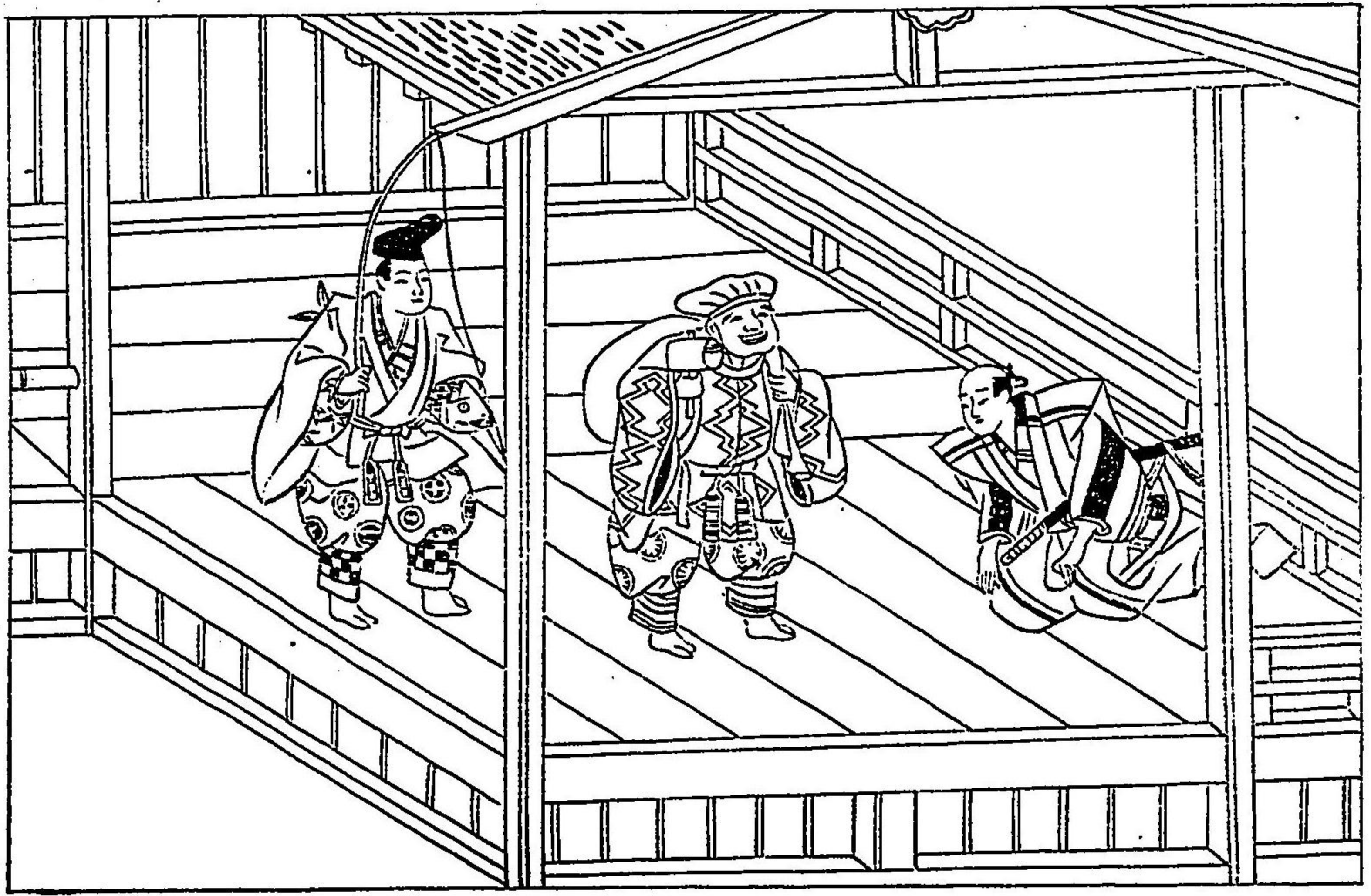
猪口ニツ(ニツの猪口は水を紙にひたし置く。一ツの猪口は墨をすき油へ混ぜて入れおく。)晒布一丈五尺。腰桶。

續狂言記 卷の二

一 蛭子大黒天

▲アト「罷出たる者は。津の國邊に住居致す者で御ざる。某福貴になりたる存じて。西の宮の蛭子三郎殿と。比叡山三面の大黒殿へと。祈誓をかけて御ざれば。先吉日を擇び。勸請せよと。示げん(示現)を下させられて御ざる。幸今日は最上吉日で御ざる程に。注連などを張り。家内を清め。勸請致さうと存る。先注連を張りませう。やア中々好う御ざる。(蛭子と大黒とさがりはにて出る)大黒と蛭子とこゝろを合せつ。かすの寶を取持て。衆生にいざや與へん。此衆生にいざや與へん。▲アト「これへ四邊も輝く態にて御出なされたは。誰様で御ざる。▲蛭子大黒二人「これは汝が常々信仰して北を連る西の宮惠比子三郎。比叡山の大黒殿にてあるぞとよ。▲アト「はア。有難う御ざります。先これへ御來臨なされて下され。▲大「やい。汝は常々信仰する程に。福貴になして取らせうぞ。▲ア「夫は有難う御ざります。▲蛭「やい。身共も其方を樂うして

取らせうぞ。▲ア「忝う御ざります。夫に付まして申上た
 き事が御ざります。終に御兩殿の御由來を承りませぬ。語
 つて聞かさせられましたらば。愈信仰申たう御ざります。
 ▲蛭「はて扱。汝は今迄夫を知らぬと云ふは。少不信心で
 おりやる。語つて聞かさう。能う聞け。▲ア「畏つて御ざる。
 ▲蛭「抑伊邪那岐伊邪那美の尊。天の岩倉にて男女の御
 かたらひをなされ。日神。月神。蛭子。素戔嗚の尊を設け
 給ふ。蛭子とは某が事なり。天照大神より三番目の弟な
 ればとて。西の宮の惠比子三郎と云はれ。威光を現す。貧
 なる者には福を興へ。福貴に守ることなり。何ばう由々し
 き惠比子三郎殿にては無きか。▲ア「御由來承り。いよ
 く難有う存ます。又大黒殿の御由來を承りたう御ざる。
 ▲大「中々語つて聞かさう。好う聞け。▲ア「畏つて御ざ
 ります。▲大「抑比叡山は尊き御山なり。此山に守護神
 なくてはかなはじと。傳教大師祈り給へば。此大黒殿顯は
 る。傳教此山には三千人のしゆと(衆徒)あり。大黒
 は一日に千人を扶持し給へば。三千人を守り給ふ守護神を
 と。重て祈誓し給へば。其時此大黒殿。忽三面六臂と顯は
 れければ。傳教貴く思ひ。此大黒を比叡山の守護神と祝ひ。
 佛法今に繁昌せり。信仰せよ。汝に福を興ふぞ。▲ア



「是は彌有難う存ます。▲二人「やい」。汝寶を與へて今よりは。大福貴になしてとらせうぞ。▲ア「はア。忝う御ざります。▲蛭（諸舞働有鼓うちわけて）い、い、い、寶を與へんとて（舞働有）與へんとて商ひみやうが作り冥加。萬の幸わらす釣針を。魚ながらこそは取らせけれ。▲大（諸舞働大鼓打上げて）其時大黒進み出。（舞働有）進み出で。七珍萬寶入れおきたる袋を汝にとらせけり。猶も寶を打だす打出の小槌を。おなじくとらせ。▲二人「これまでなりとて。惠比壽大黒歸らんとせしが。猶も所の福神とならん」と。此處にこそ納りけれ。

同 惠比須大黒 大藏流本

▲アト（次第）「歸る嬉しき。故郷に」。急いで妻子に逢はうよ。是は津の國蘆屋の里の者で御座る。某比叡山三面の大黒天と。西の宮の惠比須殿へ。樂しうなして下されいと。祈誓をかけて御座れば。吉日擇び勸請せよとの御示現で御座る。則今日は吉日で御座るに依て。注連を引き。勸請致さうと存する。大臣柱より目付柱へ引く。一段とよう御座る。（さかりはにて。惠比須先。大黒あと。）（地）大黒。と惠比須は心を合せつ。多くの寶持つて。衆生にいざや與へん。▲ア「いや。是へ御機嫌よう出させられたは。いか様な御方で御座る。▲惠比須「某を得知らぬか。▲ア「何共存じませぬ。▲惠「是は西の宮の惠比須三郎殿なるが。吉日を擇び勸請せよと示現をおられたれば。勸請したがやましきに。樂しうなしてとらせうと思ひ。現はれ出で。あるぞとよ。▲ア「ばア。是は難有う御座る。又あれに立たせられたは。如何様な御方で御座る。▲シテ「是は比叡山三面

の大黒なるが。三郎殿とわれは一所にあるものなれば。共々樂しうなしてとらせうと思ひ。現れ出でであるぞとよ。▲ア「ばア。難有う御座る。先御兩天共に。斯う御來臨なされて下されい。▲二人「心得た。床机をくれい。▲ア「畏つて御座る。はア。御床机で御座る。▲惠「是へ出い。▲ア「畏つて御座る。▲惠「奇特に歩を運ぶなア。▲ア「ばア。扱御兩天の御由來が承りたう御座る。▲惠「安い事。語つて聞かせう。よう聞け。▲ア「畏つて御座る。▲惠「夫伊邪那岐。伊邪那美の尊。天の岩倉の苦進にて男女のかたらひをなし給ひ。日神。月神。蛭子。素戔鳴尊をまうけ給ふ。天照大神より三番目の弟なればとて。西の宮の惠比須三郎殿とはいはれたり。信仰せよ。樂しうなして取らせうぞ。▲ア「これは難有う御座る。大黒天の御由來をも承りたう御座る。▲シテ「語つて聞かせう。能う聞け。▲ア「ばア。▲シ「押比叡山延曆寺は。傳教大師。桓武天皇と御心をひとつにして。延暦年中に開闢し給ふ。さあるに依て。寺號を延曆寺と號す。されは一念三千の機を以て三千の衆徒を置き。佛法今に繁昌たり。其時傳教大師。斯程の山に守護神無くては叶ふまじとて。一日に三千人を守り給ふ天部をと祈誓し給ふ所に。此大黒出現す。開山。い、や。大黒は一日に千人をこそ扶持し給へ。此山には三千人の衆徒あれば。大黒天はいかゞとある。其時大黒大きに怒て。いでさらば。三千人を守る奇特を見せんとて。忽ち三面六臂と現はれ給へ。開山喜悅の思をなし。夫より比叡山無動寺の三面の大黒天といはれ。今に於て佛法繁昌に守るなり。心易う信仰せよ。樂しうなしてとらせうぞ。▲ア「ばア。斯様の御由來を始めて承つて御座る。さあらば。樂しうなして給はり候へ。地。いで。奇特を見せんとて。舞かけり。大黒一の松へくつる。▲惠「いで。奇特を見せんとて。汝が望む金銀珠玉。いづれも。ほしい物を。心のまゝに釣取る釣針を。魚ながら。こそは取らせけり。地。其時大黒進み出で。舞かけり。▲シ「其時大黒進み出で。一大三千大千世界の寶を。これに入れ置きたる袋を汝に取らせつ。尙も寶を打出す。打出の小槌も汝に取らせ。是迄なりとて惠比須大黒歸らんとせしが。尙も所の福天にならん」と。此所にこそをさまりけれ。▲二人「やア。い、や。やア。

惠比須

袋。袖。大黒の面。
着付箱。狂言袴。脚絆。水衣。腰帶。たすき。大臣烏帽子。しやうす掛。扇子さし。夷の面。紙ばさら付る。鯛。釣竿。釣緒。

アト

色無段。斗目。狂言袴。脚絆。掛素袍。小き刀。腰帶。扇子。

作物

釣竿。腰桶ニツ。

二 鷄立の江

▲アト主「これは此邊に住居致す者で御さる。某一人召仕ふ太郎冠者が殊の外不精に御さつて。使にやれども。時ざしをして呼ぶに。其時参つたことも御ざらぬ。明日も或方へ使に遣らうと存る程に。前方より。参れと申付うと存る。やい。太郎冠者あるか。▲シテ太郎冠者「はア。▲ア「居たか。▲シテ「お前に。▲ア「念無う早かつた。汝を喚び出すこと別の事でもない。明日或方へ使に遣る程に。一番鷄の唱ふ時分に必来い。▲シ「畏つて御さる。やア頼うだ人の。一番鷄の唱ふ時分に参れと申付られたを。臥り過ごいて。日の出させられた。何と致して好う御さらうぞ。去ながら。頼うだ人は驅しよい御方ぢや。如何様とも辨舌に任せて申さう。御ざりますか。▲ア「太郎冠者か。言詰

道断の奴ぢや。汝は今うせをつたか。▲シ「されば鷄が鳴くか。と存て。随分聞いて居ましたれども。終に鳴きませなんだけれども。日がたけて御さる程に。先参つて御さる。▲ア「やア。おのれ。鷄の唄ふ時分に来いと云ふに。鳴くとは何とした事ぢや。鷄は唄ふところ云へ。鳴くとは云はぬ。▲シ「いや。左様では御ざらぬ。歌にも詩にも鳴くところ御され。唄ふとは御さるまい。▲ア「然らば鳴くといふことがあらば云ふて聞かせい。▲シ「畏つて御さる。歌とりが鳴く。東の奥の。みちのくの。をたもる山に。こがね花さく。と申時は。鳴くでは御ざらぬか。▲ア「汝が方に歌あれば。此方にも唄ふと云ふ歌がある。▲シ「わらば仰せられ。▲ア「鷄立の江の邊には。其雞もうたふなりけり。▲シ「足下に一首などは御ざらうが。此方にはまだ御さる。▲ア「有らば急で讀め。▲シ「なけばこそ。別もうけれ。とりの音の。聞えぬ里の。曉もがな。と申時は。何と鳴くでは御ざらぬか。▲ア「此方にもまだ有る。▲シ「有らば仰せられ。▲ア「鷄立の江の邊には。其雞もうたふなりけり。何とうたふではないか。▲シ「扱は足下の事で御さる。▲ア「こなたの事とは。▲シ「けにもはれにも歌一首と申は。疑も無き足下の事で御さる。其上此方にはまだ御さ

る。▲ア「有らば讀め。▲シ」心得ました。夜も明けば。きつね(きつに)はめなで(なん)くだかけの。まだきに鳴きて。せなをやりつる。▲ア「夫もうたふであらう。▲シ「Sや〜鳴くで御座る。其上唐土にも鳴くと云ふ證據が御座る。胡會詩と云し者の詩にはく。寂々函關鎖未開。田文車馬出秦來。朱門不養三千客。誰爲鷄鳴得放。廻。これは唐土に函谷が關と申す關が御座る。鷄の鳴く聲を聞き關の戸を開く。孟嘗君と申者。討もらされ隣國へ落て行時。夜半時分に彼の關に到り。鷄の鳴く眞似を仕ければ。誠かと存て關の戸を開く。かるが故に。難なく隣國に着たり。これにも空鳴きしつるとこそあれ。やはか唄ふとは御座るまいぞ。▲ア「Sや此方には歌にこそなけれ。鷄の唄ふと云ふ謠が有る。唄ふて聞かさう。能う聞け。▲シ「畏つて御座る。▲ア(作り謠)「うちうたふく。ちまちの鳥がうちうたふ。▲シ「頼うだ人の作り謠をうたはる。致しやうが御座る。殿様。▲ア「何事ぢや。▲シテ謠「まぢばかりの鳥はんないて。他所の鳥はなかにぬか。▲ア「何でもなほこと。彼方へうせい。▲シ「はア。▲ア「る。▲シ「はア。

同 鷄 鳴 大 藏 流 本

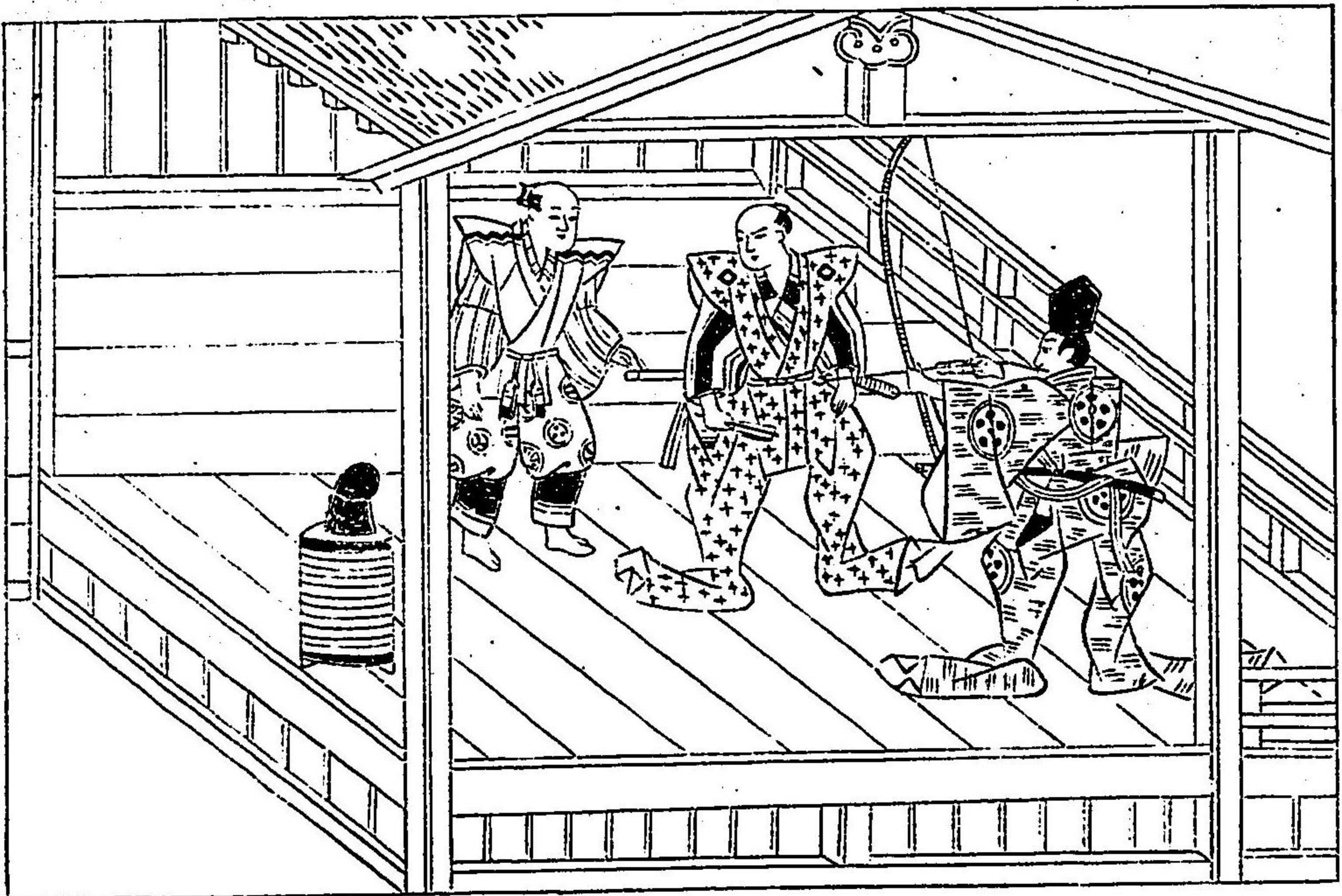
▲主「是は此邊に住居致す者で御座る。明日は未明に。太郎冠者を山一ッ彼方へ使に遣さうと存ずる。喚出して申付けう。常の如く喚出して。汝を喚出す事別なる事でも無い。明朝未明に山一ッ彼方へ使にやる程に。一番鷄がうたふたならば起せ。▲シ「畏つて御座る。▲主「必忘れぬ様にせい。▲シ「心得ました。▲主「る。い。▲シ「はア。是は如何な事。明朝未明に御使に遣はさるゝに依て。一番鷄がうたふたならば起せと仰付けられた。何卒難忘れぬ様に致さうと存ずる。はア。よう寐た。是は如何な事。拔群に日がたけた。何と致さう。いや。致様が御座る。申々。▲主「何事ぢや。▲シ「夜が明けまして御座る。▲主「是は如何な事。一番鷄がうたふたならば起せと云ひ付たに。是ははや拔群に日がたけた。なせに早く起さぬぞ。▲シ「されば其事で御座る。私も鷄が唄ふか〜と存じて。耳をすまいて居りましたが。世に鳴く鳥は御座るか唄ふ鳥は御座りませぬ。▲主「ん。な者ぢござとした。鳴くと云ふも唄ふと云ふも同じ事ぢやいやい。▲シ「古歌にも鳴くとこそ御座れ。唄ふとは御座るまい。▲主「推察な。おのれが分て古歌だてを云ひ居る。古歌にあらばよめ。▲シ「心得ました。とりが鳴く香妻の奥の陸奥の。なだもる山に。黄金花咲く。何と鳴くでは御座らぬか。▲主「夫は定めて唄ふであらう。▲シ「ななたの分と致いて。古歌を直させらるゝ事はなりませんまい。▲主「某が方には唄ふと云ふ古歌がある。▲シ「あらばよませられい。▲主「心得た。鷄立の江の邊には。それ難もうたふなりけり。何と唄ふでは無い。▲シ「いや。申。何と其様な短い歌があるもので御座るぞ。▲主「いや〜。長歌短歌と云ふて。短い歌もあるいやい。▲シ「いかに。長歌短歌ぢやと申ても。其様な短い歌は御座るまい。其上私の方には。まだ鳴くと申古歌が御座る。▲主「有らばよめ。▲シ「心得ました。鳴けばこそ別れもうけれ。とりの音の。關のわりの曉もがな。何と鳴くでは御座らぬか。▲主「夫も唄ふでなあらう。▲シ「此方の分として。古歌を直させらるゝ事はなりませんまい。▲主「またこちらにも有る。▲シ「あらばよませられい。▲主「心得た。(又初のを早く云ふ。▲シ「扱は此方の事で御座る。▲主「此方の事とは。▲シ「寝にも暗にも歌一首と申が。夫は最前の歌で御座る。▲主「爰な奴は。歌は一ッなれ共。

早歌と云ふて違ふてある。▲シ「いかに早歌でも歌は同じ歌で御座る。其
 上私の方にはまだ御座る。▲主「有らばよめ。▲シ「心得ました。夜も明
 けば。きつにはめかん。くだかけの。またきに鳴きてせななやりつる。其
 上詩にも。寂々函關鎖未開。田文車馬出。奏來。朱門不。養。三千客。誰爲
 雞鳴。得。放。烟。此心は。昔もろこしに函谷關と申關の候ひしが。此關の習
 ひにて雞の鳴聲を聞いて關の戸を開く。孟嘗君といひし人。討洩らされて
 隣國へ落ちて行く時。夜半ばかりに彼の關に至り。雞の鳴く眞似をさせ
 れば。關の人々眞の雞と心得關の戸を開く。かるが故に雞なく隣國へ落ち
 て行く。それにも雞の空鳴きしつるとこそ候へ。やはか空唄ふとは御座る
 まい。▲主「先それに待て。▲シ「心得ました。▲主「是は如何な事。太
 耶冠者といらざる古歌穿鑿を致してはうと詰つた。何と致さう。いや。致
 様が御座る。やい。太郎冠者。▲シ「何事で御座る。▲主「こらには
 唄ふといふ諺があるが。汝が方にもあるか。▲シ「なたの方に御座れば私
 の方にも御座る。有らば唄はせられい。▲主「心得た。うう唄ふ。▲
 シ「いや。作り話を唄はう。致様がある。▲主「ちましの鳥がうら唄ふ。▲
 シ「ちまばかりに鳥がうたふて他所の鳥は鳴かぬか。▲主「何でも無い事。
 しさり居れ。▲シ「はア。▲主「ふい。▲シ「はア。

シテ太郎冠者 常の通り。
 主 色無段髪斗目。狂言袴。扇子。

三 雁 争

▲シテ「罷出たる者は。此邊に隠もない大名で御座る。今
 日も野遊に参らうと存する。道行。誠に慰はおほけれど。
 殺生程好い慰はあまるまゝ。やアこれに雁が居る。何でも
 此弓で射てやらう。此處から射やうか。何處から射やうぞ。



▲アト「罷出たる者は此邊の者で御さる。某は急用わつて去方へ参る。先急いで参らうやア。これに雁がある。これは捕たいものぢや何として捕らうぞ。思ひ出した。飛磔をうたう。やア。ゑい。さればこそ中つた。先雁はしてやつた。▲シテ「やい〜」。其雁は何故に取つて行くぞ。▲ア「此は身共が飛磔で捕つたに依つて持て行くが何と。▲シ「いや〜。それは身共が。最前から瞰殺して居つた。遣ふことはならぬ。おこせ。▲ア「いや〜。身共が飛磔で捕つた。遣ふことではなすぞ。▲シ「おのれ惜い奴の。おこさぬに於は。此弓矢で射てくれうぞ。▲ア「やア危険い。出合〜。▲所の者「やいやい〜。これは何事ぢや〜。聊爾をすな〜。これは如何した事ぞ。▲ア「されば〜。能う聞いて下され。此雁を身共が飛磔をうつて捕つたれば。己が雁ぢやおこせと云ふに依つてのことぢや。無理な事では御ざらぬか。▲所の者「其方が飛磔で捕つたが定か。▲ア「なか〜定で御さる。▲所「それなら其通いはう。これ〜。其方は人躰と見えた。彼の者が飛磔をうつて捕つた雁を。おこせとは如何したことぞ。▲シ「されば其事ぢや。身共が捕らうと思ふて。此弓矢で最前から狙ふて居たれば。大方瞰み殺したを。彼奴が取つて行く。如何でも此

方へおこせと云ふてたもれ。▲所「其通云はう。これこれ今のを聞かしましたか。無理な事を云ふわ。▲ア「されば〜。無理な事を云ひます。如何でも遣ふことはならぬと云ふて下され。▲所「心得た。如何でも遣ふことはならぬと云はるゝわ。▲シ「何と遣ふことはならぬ。夫なら其處を退きやれ。此弓矢で射殺してくれう。▲ア「それ〜。止めてたもれ〜。危険い〜。▲所「先待たしませ〜。身共がこれに居るからは。聊爾はさせぬぞ。兎角身共が思ふは。其様に云ふては罅が明かぬ。此上は。彼の雁を元の處に置いて。も一度射て見させませ。中つたら其方取りやれ。若中らずば。其方へ遣る事はなるまい。▲シ「夫なら射やう程に。元の處へやつて置け。▲所「心得た。なうなう。今の通ぢや。身共次第にして射したら好からう。彼の手許では中るまい程に。元の處へやつておかしめ。▲ア「心得ました。足下次第に致さう。▲所「さア〜射て見やれ。▲シ「心得た。射るぞ。此處から射やうか。何處から射やうぞ。▲二人「これ〜。それは近い。初の處から射やれ。▲シ「夫ならこれから射やう。さア射るぞ。南無三寶。中らぬわ。▲ア「そりやこそ中らぬぞ。先雁は身共が取つて歸らう。なう〜嬉しや〜。▲シ「やい〜。も

一度射さして見よ。やれ待て〜せめて其羽なりとくれ。
 ▲ア「羽を何にするぞ。▲シ「羽箆にするわ。▲ア「いや〜それもならぬぞ〜。▲シ「やれ夫は聞えぬ。せめて羽をくれ〜。

同 雁 磔 大藏流本

▲シテ「是は孰れも御存じの者で御座る。此間は久敷う何方へも出れば。心が屈して悪しう御座る。今日は天氣も好う御座るに依て。野遊びに出やうと存ずる。先そり〜と参らう。誠に今日は天氣もよう御座るに依て。何ぞ獲物の無いと申事は御座るまい。其上一兩日中には客を申入れる客で御座るに依て。何ぞ射たらば其時分のもてなしに致さうと存ずる。いや。何彼と云ふ内にはや野へ出た。いつも此邊には鳥が居るが。今日はすきと見ゆぬ。いや。あれに雁が居る。さらば之を射て取らう。(と云ふて弓矢を番へ。名乗座違いと云ふて目付柱の方より狙ひ。是からは寄りていと云ふて箭の上の方へ行き。綾などしめし。矢をためしなどして居る内にアト出て打殺す。シテ目付柱の方へ行き狙ふ時分。アト出て吉一の松にて名乗る。)

▲アト「なう〜。忙がしや。急な御使に参る。急いで参らう。いや。あれに見事な雁が居る。飛磔をうつつて見やう。(石を拾ふて打付る真似する。ふい。やつとな。さればこそ申つた。なう〜。嬉しや〜。さらば持つて参らう。)

▲シ「やい〜。その名者。▲ア「や。▲シ「やとはおのれ情い奴の。なに諸侍の狙ひ殺いた雁に手をさゆるぞ。▲ア「いや申。見ればこなたは御人跡で御座るぞ。よう思ふても見させられ。何と雁が狙ふた斗りで死ぬるもので御座るぞ。是は私の飛磔で打殺いた雁で御座るに依て。斯う持つて参る。)

▲シ「おのれ其つれを云ふて。其處へおいて行かすば爲に悪るからうぞ。)

▲ア「爲に悪るからうと云ふて何とめさるぞ。)

▲シ「目に物を見せう。)

▲ア「夫は誰が。)

▲シ「身共が。)

▲ア「此方の分て日に物を見せうと云ふて深し事があるもの。)

▲シ「ていとさう云ふか。)

▲ア「おんでも無い事。)

▲シ「悔やうぞ。)

▲ア「何の悔やう。是はどうしても身共が持つて参る。)

▲シ「おのれ一矢に射殺してくれ。)

▲ア「おま。許させられ。)

▲シ「おのれ逃げたりと逃がさうか。(一逼追廻す。)

▲ア「あ。出合へ〜。)

▲濟人「あ。いや申々。此御政道正し御代に。殊に見れば御人跡で御座るが。何事なわつばと仰せらる。)

▲シ「されば其事ぢや。我御料も聞いてくれさしめ。今日は天氣もよいに依て野遊びに出ておりやうが。あれに雁が居たに依て。身共が狙ひ殺いておいたれば。あの者が何方からやら来て。取つて行かうと云ふに依て。夫を云ひ上つての事ぢや。某が狙ひ殺いた雁ぢやに依て。取つてくれさしめ。)

▲濟「其通り申ませう。先待たせられ。)

▲シ「心得た。)

▲濟「いや。なう〜。其雁はあの御待の狙ひ殺しておいた雁ぢやと云はる。程に。あの御待へ返さしめ。)

▲ア「いや申。こなたも能う思召しても御覽せられ。生きた雁が何と狙ふた斗りで死ぬるもので御座るぞ。是は私の飛磔をうつつて打殺いた雁で御座るに依て。返す事はならぬと云ふて被下。)

▲濟「心得た。申々。其通り申て御座れば。あの者が飛磔で打殺いた雁ぢやに依て。進する事はならぬと申ます。)

▲シ「又其つれな事を云ひます。よう思ふてもお見やれ。あの雁が何と飛磔などで死ぬるものであらうぞ。どうあつても身共が狙ひ殺いた雁に違ひは無程に。是非共〜へおこせと云ふておくりやれ。)

▲濟「心得ました。いや。なう〜。今のお聞きやつたか。)

▲ア「中々承つて御座る。)

▲濟「とかくこれでは是非が分らぬに依て。身共が思ふは。其雁をもとの處へおいて。あの御待に射させて。申つたならば御待におまさうす。もし申らば我御料取つていたがようおりやう。)

▲ア「これは一段とよう御座らうが。最前は生きた雁で御座る。只今は死んだ雁で御座るに依て。此は申るは必定で御座る。是はなりません。)

▲濟「いやいや。さうおしやるな。あの人の態を見た處が。中々申りさうには無いに依て。平に身共が云ふ通りにさしめ。)

▲ア「夫ならば左も右も致しませう程に。其通り云ふて被下。)

▲濟「心得た。いや。申々。是では兎角是非が分りませぬに依て。あの雁をもとの處へ置いて。此方射させられて。申つたならば取らせられ。若申らばあの者にやらせられたがよう御座る。)

▲シ「我御料もよう思ふてもお見やれ。最前生た時でさへ狙ひ殺いたものを。今では申るは知れた事ぢや。射るには及ばぬ程に。こゝへ取つてくれさしめ。)

▲濟「乍去。是を射させられれば此方の御負けで御座る。)

▲シ「何

續狂言記 卷の二 八七

ぢやの某が負けになる。▲濟「中々。▲シ「夫ならば是非に及ばぬ。射て見せう程に。最後の處へ雁をおけと云ふておくりやれ。▲濟「心得ました。これ。今の通り云ふたれば射て見せう程にもとの處へおけと云はる。▲ア「夫ならば元の處へおきませう。此邊で御座つた。▲シ「これ。其邊ではない。つゝとちでおりやる。▲ア「いや。此邊で御座る。さア。早う射させられい。▲シ「夫ならば今射て見せう。と云ふて矢を番へて。舞臺の真中頃よりつかつかと雁の方へ行くを見て。▲ア「あ。申々。何と生た雁の其様に近う寄するもので御座るぞ。其上最前は其邊には御座らぬ。つゝとあれに御座つた。元の所から射させられい。▲シ「いや。最前も此邊から狙ひ殺いた。▲ア「いや。其邊では御座らぬ。つゝとあれで御座る。▲シ「夫ならば此邊から射て見せう。と云ふて射る。申らぬ故アトは雁を取つて笑ふて。よい仕合せをしたと云ふて引込む。濟人も笑ふて。殊の外の下手ぢやと云ふて引込むを見て。やい。やい。やア。其雁は取るとも片はびなりとも置いて行け。▲ア「片羽がひを何にする。▲シ「羽帯にするはやい。▲ア「いや。片羽がひもやる事にならぬぞ。と云ふて引込む。▲シ「あの横着者。捕へてくれい。やるまいぞ。と云ふて追入る。

シテ侍

粟田口シテと同断。

アト

太郎冠者打扮。

濟人

色無段髪斗目。長上下。小き刀。扇子。洞烏帽子。

作物

弓。矢。

四 菊の花

▲アト「これは此邊に住居致す者で御座る。某一人召仕ふ下人が。身共に暇を乞はいで。何方へやら參つて御座る。承れば。夜前歸つたと申せども。未某に目見えを致さぬ。

ぬ。言語道斷憎い奴で御座る。今日は彼奴が私宅へ參り。急度折檻を致さうと存する。道行。やれ扱。身共に暇をくれいと申したら。五日や七日の暇は取らせうものを。暇を乞はぬ處が憎う御座る。やん參る程に。彼奴が私宅は此で御座る。某が聲と聞いて御ざらば。定めて留守をつかひませう。作り聲をして喚び出さうと存る。物も。案内もう。▲シテ「やら奇特や。夜前某が歸つたをはや誰様にやら御存あつて表に案内とある。案内とは誰ぞ。誰様で御座る。▲ア「逃居る。▲シ「はア。▲ア「俄の慇懃迷惑致す。少お手を上られ。汝は誰に暇を乞ふて。此中は何方へおりそうて有ぞ。▲シ「されば。一人召仕はる。下人のことで御ざれば。御暇と申たりとも。よもお暇を下さるまいと存て。かそふて京うち參り致して御座る。▲ア「何と。一人召仕ふ下人が京内參りすれば。主に暇を乞はぬ法でおぢやるか。▲シ「はア。▲ア「あ。憎い奴の。やれ扱急度折檻を致さうと存て。これまで立越えたれども。彼奴が京うち參りしたとあれば。都の様子も聞きたう御座る。先此度は差置かうと存する。やい。存する次第あつて許す。先たて。▲シ「夫は誠で御座るか。▲ア「誠ぢや。▲シ「眞實か。▲ア「眞實ぢや。▲シ「一定か。▲ア「をんでもない事。▲シ

「やう心安や。▲ア」して今の心は何とわつた。▲シ「其事
 で御さる。平常とは。御機嫌も異り。御手討にもあふかと存
 て。身の毛をつめて御さる。▲ア「さうあらう。身共もい
 つもとは云ひながら。今日は急度折檻をせうと思ふて立越
 えたれども。汝が京うち参りしたとあれば。都の様子も聞
 きたさに許した。急いで語れ。▲シ「畏つて御さる。先天下
 治り目出たき折なれば。此處彼處の参り下向が、夥しい事
 で御さつた。▲ア「さうあらうとも。先都は何處へを見
 物した。▲シ「されば先都は。北野へ参り。路次に見事な
 菊の花が咲いて御さつた程に。一枝折まして。手に提て参り
 たれば萎れませうと存じ。頭にさいて参りましたが。夫より
 祇園へ参らうと存じ。暇へ参つて御されば。都上臈と見えて
 華やかに出立て。婢下女などを數多連れて御ざりました。通
 さまに。私が頭にさいた菊の花について。歌を一首詠せら
 れて御さる。▲ア「それは何といふ歌ぢや。▲シ「都には。
 處は無さか菊の花。はゝをかしらに。咲ぞみだる。とな
 された程に。私も返歌を致さずばなるまいと存じ。鸚鵡返
 しに返歌を致して御さる。▲ア「何としたぞ。▲シ「都に
 は。所はわれと菊の花。思ふかしらに。咲ぞみだる。と
 致して御されば。扱も。田舎者さうなが。やさしい者

ぢやと仰せられ。これより祇園清水へ参る程に。來いと仰せ
 られ。私も参りまして御されば。東山の邊に暮うちまはし。
 皆々其内へ入らせられた。身共には此方へ這入と申者も御
 ざらぬ程に。田舎者の怖たは見苦しいものぢやと存じ。暮
 を覆み上げて内へはいつて御されば。私を此方へ來い
 と仰せられ。一の上座に置かせられて御さる。▲ア「夫は何
 共合點がいかぬ。汝が居た近邊には何が在つた。▲シ「私
 の居ました近邊には。緒太のこんがうが御さつた。▲ア「そ
 れは上座では無い。靴脱と云ふて下座ぢや。して何とした。
 ▲シ「時に腰元が先盃を持って出ました。何でも一つたべ
 うと存て居ましたれば。つゝと脇へ持て行きました。又其
 次に。結構な蒔繪の重箱に。色々の肴を入れて持て出まし
 た。定てこれは私が方へ持て参ると存て御されば。身共が
 鼻の先をすりこすつて通つて。これも奥へ持て参りました
 處で。私も腹が立まして。兎角此様な所に居ていらぬもの
 ぢや。酒はくれず。振舞は食はせずと存じ。それよりつゝ
 と立て歸りましたれば。後からお婢が急に呼びました。や
 れ〜歸れ。戻れ。用が有ると申て追かけました。身共の
 存まするは。今迄居てさへ何もくれぬ。何の用があらう。
 戻ることではないと存じ。聞かぬ顔して歸りましたれば。

彼のお婢が難なく追付まして。其儘私の腕を無手と取り。汝は憎い奴の。今の盗んだ物を返せと申て御座る。私は何も取はせぬ。聊爾なことを云ふものぢやと申ましたれば。取らぬとは云はせぬ。其方が取らぬで誰が取らうと申て。扱も強いお婢で御座つた。私の腕を振上りました處で。私が先それは何でおやりやると申て御座れば。緒太のこんがうが見えぬ。返せ〜と申ました。それで私が。女ぢやといふて。其様な粗漏な事を云ふ。田舎者ぢやと思つて侮て云ふか。身共は知らぬと申たれば。まだわらがうかと申て。腕を頻に振上りました程に。餘り振られ。息がはづんで物が云はれぬ。やれ先物を云はせ〜と申て御座れば。そこで少寛めて御座る程に。此かと申て。懐から出し。返しました。▲ア「是は如何な事。汝は都へ上つて。盗を仕をつたか。憎い奴の。やるまいぞ〜」。▲シ「許させられ〜」。

同 茫々頭

大藏流本

▲アト「罷出たる者は此邊に住居致す者で御座る。某召仕ふ下人が。暇をも乞はいで何方へやらおりそつて御座る。承れば。夜前の歸つたと申せ共。未某が前へ目見ぬも致さぬ。言語道斷僧い奴で御座るに依て。今日は彼れが私宅へ立越え。散々に折檻を加へると存する。先そり〜と参らう。いや。誠に暇を乞ふて御座らば。五日や十日は取らせませうものを。暇を乞はぬところが憎う御座る。いや。参る程に彼れが私宅は是で御座る。

某が聲と聞いたら。は出ますまいに依て。作り聲を致し喚出さうと存する。(氣をかざして)物申。案内申。▲シ「テ」やら奇特や。夜前の歸つたを。はや誰様やら御存じあつて。表に物申とある。案内とは誰ぞ。物申誰様で御座る。▲ア「しさりなる。▲シ」はア。▲ア「俄の慙慙迷惑致す。御手上げられい。▲シ」はア。▲ア「其如く主の聲をも聞ゆる程の不幸公ではなるまい。此間は某に暇をも乞はいで。何方へおりそつた。▲シ」は其事で御座る。一人召仕はるる太郎冠者の事で御座れば。御暇の義を申上げたりとも。逆も下されまいと存じ。忍うて京内参りを致しまして御座る。▲ア「むむ。京内参りをすれば。主に暇を乞はぬ法ですか。▲シ」はア。▲ア「憎い奴の。是は如何な事。散々に折檻を加へると存じて御座れば。京内参りを致したと申。都の様子も承りたう御座るに依て。先此度は差許さうと存する。やい〜。許す程に立て。▲シ」夫は誠で御座るか。▲ア「誠ぢや。▲シ」は實で御座るか。▲ア「一定ぢや。▲シ」あら心安や。▲ア「何と氣遣にあつたか。▲シ」何時もより御氣色が變らせられて御座るに依て。今は御手討にでもあひませうかと存じて。身の毛をためて居りました。▲ア「定めてさうであらう。某もいつ〜よりは腹は立たれ共。京内参りをしたと云ふに依て許した。それへ出て都の様子を語れ。▲シ」長つて御座る。天下治り目出度い御代で御座れば。物見遊山のと申て。都は殊の外賑かな事で御座る。▲ア「定めてさうであらう。扱何も珍らしい事は無いか。▲シ」扱夫に付て。此度都へ上つて。田舎者の名を揚げて御座る。▲ア「夫は如何様な事ぢや。▲シ」されば其事で御座る。私も初めて上つた事で御座るに依て。此所彼所を見物致いて。北野へ参り。夫より祇園へ参らうと存じて。そり〜と参りまして御座れば。道ばたに見事な菊の花が。今を盛りと咲亂れて居りましたに依て。一枝手折りまして歸へさし。夫より三條の橋へ出まして。四方の景色を眺めて居りましたれば。何か内裏上臈と見えました。芥子の花を飾つた様に大勢参られまするに依て。私も見物致さうと存じて。橋の欄干に倚りそつて。扇をかざして見て居ましたれば。中にも甘計りとおぼしき美しい上臈の。私の髻の菊の花を見られました。見れば田舎人さうなが。しならしや菊の花をさいて居らる。何と歌をよんでかけうではないかと申て。其儘歌をよんでかけられて御座る。▲ア「夫は何とよんでかけられたぞ。▲シ」都には所は無きか。菊の花。

ほゝをかしらに。咲きぞ亂るゝ。とようでかけられて御座る。處で。私の存じまするは。人に歌をようでかけられて。其返歌をせれば。先の世で。口無い虫に生るゝと承つて御座るに依て。其ま追付いて返歌を致して御座る。▲ア「夫は何と返歌をしたぞ。▲シ「これと申も此方の常々歌を好かせらるゝに依て。其御座に私も少しは聞覚え居ります所。鸚鵡返しに返歌を致して御座る。▲ア「これは聞事ぢや。先何と返歌をしたぞ。▲シ「都にも所はあれど。菊の花。思ふかしらに。咲きぞ亂るゝ。と返歌を致して御座れば。彼の上臈の聞かれて。扱々田舎人には似合はぬ。扱もくゝやさしい人かな。田舎の。こちへ〜と申て。先へ行かれます程に。私も後からそり〜とついて参りまして御座れば。程なく祇園の松原へ出まして御座る。何が暮うちまはし。屏風を立て。彼の上臈たちの。幕を打上げ〜して内へはいれまます所。私も同じ様に幕打上げて。内へはいりまして御座れば。則最前の上臈の。鄙のはこれ〜と申て。私を一の上坐へ置きまして御座る。▲ア「何ぢや。そちを上坐へ置いた。▲シ「中々。▲ア「夫は何共合點が行かぬ事ぢや。汝が居た邊には何ぞ無かつたか。▲シ「外には何も御座らなんだが。緒太の金剛が數多御座りました。▲ア「こゝな奴は。夫は隠脱と云ふて一下座ぢや。▲シ「夫は下座にもなされませい。私もそれにつ〜くりと致して居ましたれば。何か菓子と見ゆまして。結構な提重を持つて出ますに依て。これは身共へくるゝ物であらう。惣じて此様な物に目をかくるは賤しいものぢやと存じて。わきの方を向いて居りましたれば。何時の間にか。つゝと與へ持つて参りました。▲ア「は〜ア。汝にはくれなんだか。▲シ「中々。又今度は酒肴と見ゆて。是も結構に飾つた臺を。目八分に持つて出ます處で。最前の菓子こそ身共へくれずとも。今度こそ急度某へくるゝであらうと存じ。知らぬふりして居ましたれば。私の鼻の先をすり〜すつて。又つゝと與へ持つて参りまして御座る。▲ア「又それも呉れなんだか。▲シ「處で私も。餘り腹が立ちましたに依て。座敷をふみ散らして。早々に立つて御座れば。後から。お〜い〜。田舎者返せ〜と申て。おぼしたぢ追かけます處で。私の申まするは。最前の菓子や酒肴をも身共へはくれず。何も返す覺は無いと申て御座れば。何が足の疾いおぼしたで御座るぞ。其ま〜私に追付きまして。後から私の手を急度拾上げて。最前の物を返せ〜と申ま

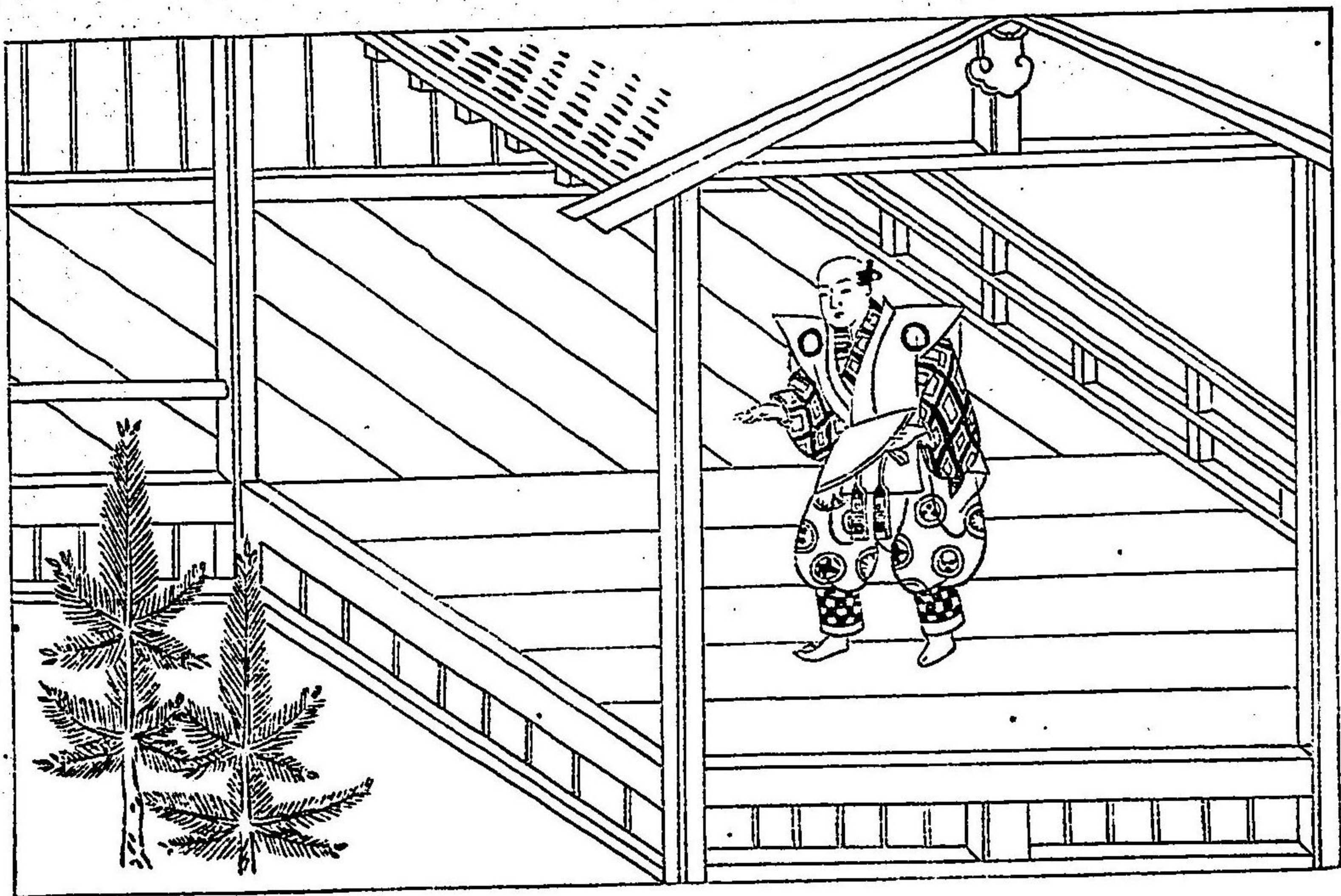
するに依て。今も云ふ通り。何も馳走はせず。近す物は無い。爰を放せと申て御座れば。彼女が申まするは。おのれは情い奴の。又其つれな事を云ふて。返さずばこちらの手も捻上ると申て。左右の手を急度捻上げて御座る。處で。私も餘りに堪へ難う御座つた程に。あゝ。夫ならば是非に及ばぬ。返さう程に爰を放せと申て。慎より此かと申て物を出しまして御座る。▲ア「何を出したぞ。▲シ「物を。▲ア「何を。▲シ「何を。▲ア「何を。▲シ「緒太の金剛を出して御座る。▲ア「あのつくだいなし。し〜り居れ。▲シ「はア。▲ア「はい。▲シ「はア。

シテ太郎冠者 打扮常の通り。
色無段類裝斗目。長上下。少き刀。扇子。

五 見物左衛門

罷出たる者は。此邊に住居致す。見物左衛門と申者で御座る。今日は加茂の競馬。深草祭で御座る。毎年見物に参る。今日も参らうと存る。又某一人でも御ざらぬ。爰にぐつろ左衛門殿と申て。毎年同道致す人がある。今日も誘ふて参らうと存る。道行。内に居られたら好う御ざらうが。何方へも出ぬ人ぢや。定て内に居らるゝでわらう。やアこれぢや。物もう〜ぐつろ左殿。内に御座るか。何とはや見物に御ざつた。やれ〜。ぐつろ左殿と同道せねば。身共の慰がない。やア身共に逢ふて笠を脱らせらるゝは誰様ぢや。やはりめせ。足下は祭は見物なされぬか。何ぢや刀

が無い。なくば大事か。身共はこれ。持たねばさしませぬ
 わ。拵祭の刻限は何時で御さる。何と巳午の刻ぢや。ゑい
 身共は一刻も二刻も早う出た。とてももの事に。九條の古御
 所を見物してかへらう。御馬屋を見やうか。ゑい。これが御
 馬屋ぢや。扱もく見事なことかな。姫栗毛。額白。黒毛。
 白毛。彼からこれへ。扱もく。これは十二因縁の心を以
 て立させられた。拵御所を見物致さう。はアこれに入景の
 押繪がある。洞庭の秋の月。遠浦の歸帆。遠寺の晚鐘。平
 砂の落雁。瀟湘の夜の雨。寄する波に音なき夜の泊り。扱
 もく見事な。これに掛物がある。何ぢや。咄首が達磨。
 東坡が竹。牧溪和尚の墨繪の観音。三幅一對。扱もく。
 見事見事。疊は皆雲網縁に高麗縁。彼からこれまで敷つめ
 られた。柱は黒塗柱に、蒔繪を書かせられたわ。申さうや
 うもない事ぢや。何と云ふ馬子達。具足がかけるといふ
 か。ゑい。身共はそれこそ見に来たれ。はア。扱もく
 のつたり。先なは乗人と見えた。彼は誰で御さる。何
 と梅の木はらのすい右衛門殿。其後なは誰で御さる。何ぢ
 や柿の本しふ四郎左衛門。扱もく。くひしばつて乗られ
 たが。落られずばよからうが。ありや。ありやこ
 そ。云ふ言葉の下から落られた。扱もくをかしら事ぢや。



何ぢや。其方は、身共が笑が苦になるか。何とおしやる。打たれうとおいやるか。其方に疵はつけまい。身共は町で隠もない大悪戯者ぢや。おかまやるな。扱もくわれく。した、か腰を打たれたやらして。ちんがり。ちんがりく。扱もく。可笑い事ぢや。やア。彼の大勢人の寄つて居るは。何事で御ざるぞ。やア子供が角力をとる。多。身共は、小さい時から角力が好ぢや。行て見物致さう。はア。これはどうも這入られまいか。先此笠を破つては女共が叱るであらう。先これをかうして。少御免なされませう。これく此處な人。草履の後を踏に依つて。先へ行かれぬ。南無三寶。身柱の灸をひいてのけた。はア。痛や。先這入た。これ行司。腰が高い。下に御され。何と云ふ某を暴人と云ふか。やア何と云ふ。角力の作法を知らずは關ふなといふか。身共が知るまいと思ふか。總じて角力は。四十八手とは云へども。碎けば八十八手も。百手にもとる。鳴のいれ首水車。反返り。腕投。あふりがけ。河津がけ。此様な手を知つて居る。何と夫程ならば出てとれと云ふか。身共ぢやと云ふてとりかねうか。何と小言を云ふたらば飛礫をうたう。其方がうつたらば此方からも參らせうまでよ。わいたく。これは堪忍がならぬ。やい其

處なかきの帷子。かきの鉢巻。汝見知つたぞ。やれ子供もかいつてくれ。ゑい。とうく。南無角力御退散。又明年參らう。

六 成上り物

▲初アト「罷出たる者は。此邊に住居致す者で御ざる。某常々清水の觀世音を信仰致し。參詣致す。今日も參らうと存る。先太郎冠者を喚び出し申付う。やい。太郎冠者あるか。▲シテ「はア。▲初ア「居たか。▲シ「御前に。▲初ア「其方を喚び出すこと別の事ではない。常々清水の觀世音を信仰する。今日も參らうと思ふが何とわらう。▲シ「これは一段と好う御ざりませう。▲初ア「夫ならば太刀を持って。▲シ「お太刀持まして御ざる。▲初ア「さア。來い。▲シ「長つて御ざる。▲初ア「やい。某も觀音を信仰する故。次第に仕合も直る。此様な嬉しい事はない。▲シ「仰せらるゝ通で御ざる。▲初ア「取分今日は夥しい參りぢやなア。▲シ「左様で御ざります。▲初ア「やア何彼と云ふ内に清水へ着た。さア。汝も拜め。▲シ「心得ました。▲初ア「やい。今宵は通夜をする。汝もまどろめ。▲シ「畏つて御ざ

る▲初ア「やい其太刀を取られぬやうにせい。▲シ「心得ました。▲後アト「これは此邊を走り廻る。心も直にない者で御ざる。今日は清水へ大参りで御ざる程に。彼へ参り、仕合を致さうと存る。やア。これに一段の事がある。てうき致さうと存る。なう〜嬉しや〜。まんまと杖と太刀とを代ました。先一段の仕合や。急いで退かう。▲初ア「やい〜太郎冠者。夜が明た。いざ下向せう。▲シ「好う御ざりませう。▲初ア「さア〜来い〜」。▲シ「これは合點のいかぬ。扱は取られたものであらう。何と致さう。去ながら。頼うた人は騙しよ。面白可笑う申なさう。申々。▲初ア「何事や。▲シ「夜前は夥しい通夜を爲る人が御ざつたが。身共が近邊で色々の雑談申たを。聞かせられたか。▲初ア「いや。眠て聞かなんだ。何を云ふたぞ。▲シ「總じて物の成上ると申こと御存で御ざるか。▲初ア「いや何共知らぬ。▲シ「されば物の變ずると申ことは。目前にあつて合點の参らぬ。不思議な事で御ざる。先嫁が姑に成上るは。程が御ざらぬ。▲初ア「夫は珍しうもないことの。▲シ「又山の芋が鱈になるも一定で御ざる。其仔細は。大雨などが降つて。山などが崩れて。山の芋が川へ流れて。それが鱈になると申す。▲初ア「其様な事もあ

らう。▲シ「斯う云ふ内にも元の太刀になれかし。申々。また澁柿がじゆくし(熟柿)に成上ります。えのころ(犬ころ)が親犬になり上ります。▲初ア「夫は汝が言はいでも知れた事や。▲シ「まだ御ざります。小僧が後には長老に成上ります。此杖も元の太刀に成上れかし。申々。まだ御ざる。田邊の別當がくちなは太刀と申ことが御ざるが。御存で御ざるか。▲初ア「いや知らぬ。▲シ「其太刀は。他人の目には朽繩に見えまして。何方に捨て置いても。退て通て。得取らぬと申す。其上名作物なれば。物ざれで御ざると申。これでもまだ元の太刀にならぬ。總じて人の樂しうならうとは。其人の太刀が。色々に化ると申すが。聞かせられましたか。▲初ア「いや聞ぬ。如何やうの事や。▲シ「足下の御富貴にならせられう御瑞相が御ざる。▲初ア「それは嬉しい。先云ふて聞せい。▲シ「やア申すまい。▲初ア「早う云へ。▲シ「足下の御太刀を私に持せておかせられたは。物になりました。▲初ア「何になつたぞ。▲シ「青竹の杖になつて御ざる。▲初ア「言語道斷のことや。汝が人に取られて云はう様が無ざに。何の彼のとぬかすな。▲シ「さうでは御ざらぬ。此杖になり上りました。▲初ア「まだ理屈を云ふ。彼方へうせい。▲シ「は

ア。▲初ア「ゑい」。▲シ「はア。

同 成上り 大藏流本

▲主「是は此邊に住居致す者で御座る。今日は清水の縁で御座るに依て。參詣致さうと存する。先太郎冠者を喚出して申付けう。常の如く呼出して。汝を喚出す事別なる事でも無い。今日は清水の御縁日ぢやに依て。參らうと思ふが何とあらうぞ。▲シ「一段と好う御座りませう。▲主「夫ならば太刀を持って。▲シ「畏つて御座る。ア。御太刀を持ちまして御座る。▲主「さア。来い。▲シ「参ります。▲主「扱今日は天氣も好いに依て定めて大参りであらう。▲シ「誠に今日は天氣も好う御座るに依て。定めて賑かで御座らう。▲主「もはや殊の外賑かになつた。▲シ「段々賑かになりませう。▲主「いや。何かと云ふ内にはははや清水へ来た。▲シ「誠に清水で御座る。▲主「汝もこれへ寄つて拜め。▲シ「畏つて御座る。▲主「何時参つても殊勝な御前では無いか。▲シ「仰せらるゝ通り殊勝な御前で御座る。▲主「扱今夜は通夜をする程に汝もそれへ寄つて休め。▲シ「畏つて御座る。▲主「夜が明けたならば起せ。▲シ「心得ました。▲主「ゑい。▲シ「はア。扱も。いつもとは云ひながら今夜も大参りぢや。さらば某も此邊に休まう。太刀を持ちながら賑る。▲水破「是は此邊に住居致す心も直に無い者で御座る。今日は清水の御縁日で御座るに依てあれへ参り。何か好さうな物もあらば調儀致さうと存する。いや。誠に今日は大参りで御座るに依て。何ぞ仕合の。いと申事は御座るまい。いや。これに何者やら好い太刀を持って餘念も無う寤て居る。此を調儀致さう。杖竹を持って太刀と取替へて。なう。一段の仕合を致した。急いで罷歸らうと存する。▲シ「あ。能う寤た事ぢや。いや。はや夜が明けた。頼うだ人を起さう。是は如何な事。身共は御太刀を持って寤たが。何時の間にか此様な杖になつた。扱々苦々しい事ぢや。何としたものであらうぞ。乍去。頼うだ人は誰らしい御方ぢやに依て。面白をかしく申ないておかうと存する。申々。▲主「何事ぢや。▲シ「夜が明けて御座る。▲主「誠に夜が明けた(拜をして)さらば下向せう。▲シ「夫が好う御座らう。▲主「さア。来い。▲シ「参ります。▲杖を見て。未御太刀になら

ぬ。▲主「扱いつもとは云ひながら。夜前も大参りであつたなア。▲シ「誠に大参りで御座りました。▲主「扱何も珍らしい話はなかつたか。▲シ「されば其事で御座る。私の居た邊で色々の雑談を申て御座るが。中にも。物の成上ると申談を致して御座るが。聞かされて御座るが。▲主「いや。身共は聞かぬ。夫は何と云ふ談ぢや。云ふて聞かせい。▲シ「世間に賑が姑に成上るは早い物ぢやと申まして御座る。▲主「是は珍らしいも無い事ぢや。▲シ「又いの大。ころが親犬に成るも早いものぢやと申て御座る。▲主「これも珍らしいも無い事ぢや。▲シ「また流梯が熱梯になると申ましてござる。▲主「これもじゆくしにしないで叶はぬ事ぢや。▲シ「また珍らしい事を申まして御座る。▲主「夫は何と云ふた。▲シ「山の幸が變になるに定ちやと申ました。▲主「某もさう聞いたが。此は合點の行かぬ事ぢや。▲シ「いや。此は眞實で御座る。其成りやうは。なが雨が降つて山などが崩れまして。山の幸が川へ流れこつて變になると申す。▲主「いか様此はなるまいもので無いが。最早外には何も珍らしい談は無いか。▲シ「いや。また田邊の別當の朽繩太刀と申事を談いて御座るが。聞かされて御座るが。▲主「いや。聞かぬが。夫は何と云ふ談ぢや。▲シ「先田邊の別當は大有徳な人で御座るが。其別當の太刀は名作物で。餘人の目には朽繩に見えます。又自然盗人などがばいりますと。おのれと抜け出で。其盗人を追ひちらすと申て御座るが。何と奇特な事では御座らぬか。▲主「誠にこれは近來奇特な事ぢや。▲シ「總て人の有徳になり。出世する時分には。必色々の物が變じて成上ると申す。夫に付。此方にも近比日出た事か御座る。▲主「む。夫は何様な事ぢや。▲シ「追々御加増を取らせられ。くわつと御立身成されう瑞相に。ちと物が變じて成上りました。▲主「夫は何か成上つたぞ。▲シ「物が。▲主「何が。▲シ「物が。▲主「何が。▲シ「此方の御太刀が此様な杖になりました。▲主「あのやくたいたなし。しさりなる。▲シ「はア。▲主「ゑい。▲シ「はア。

シテ太郎冠者 常の通り。
 水破 色無段殿斗目。狂言袴。扇子。太刀。
 作物 太郎冠者の打扮にて袴括る。
 杖竹。

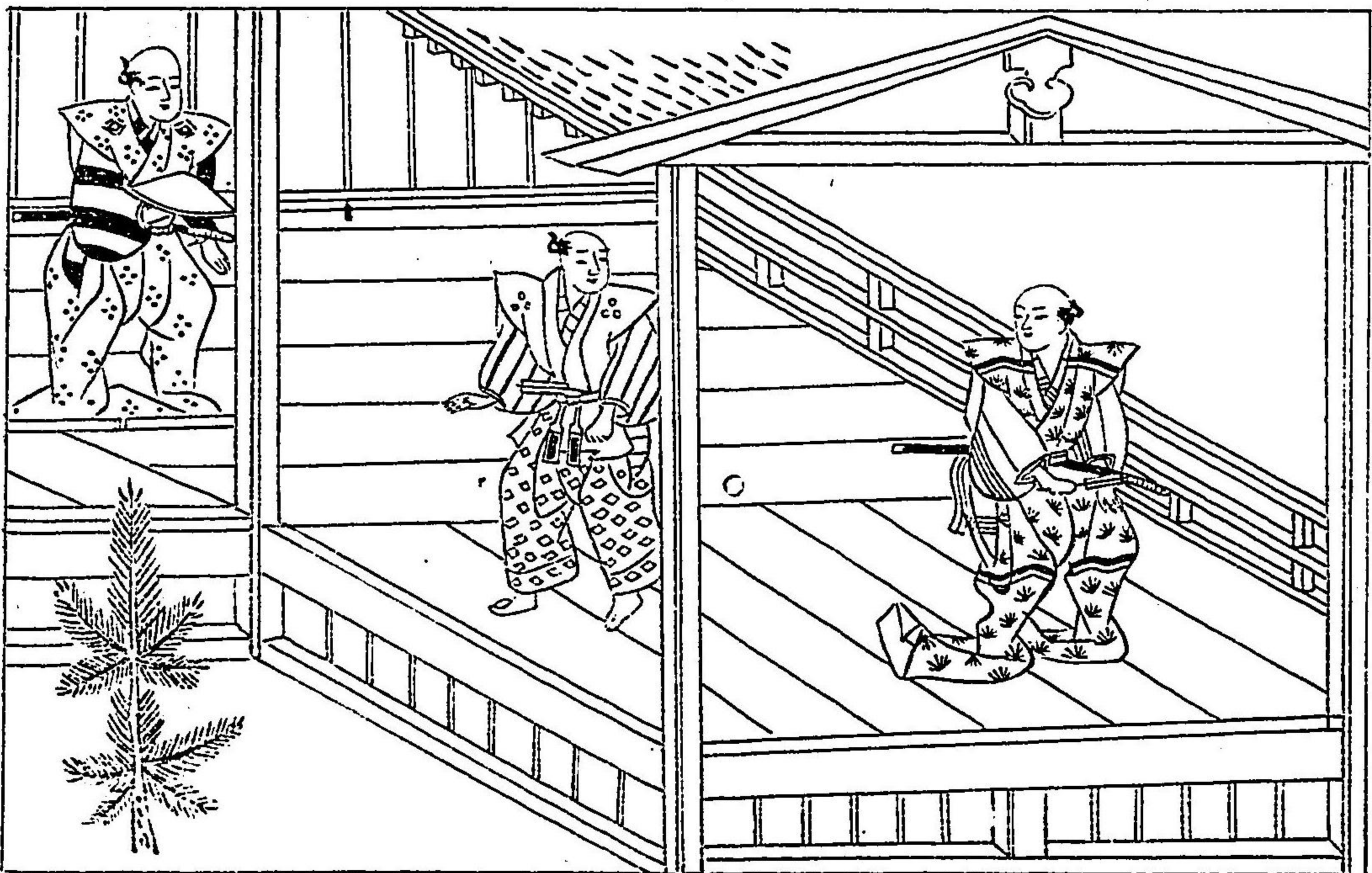
七 寶の笠

▲初アト 大果報の者。誠に天下治り。彼方此方の御參會お振舞は。夥しい事で御さる。それに付て。此度は目の前に奇特の見ゆる寶を比べうとある。某が藏の内に。左様の寶があるか存せぬ。尋ねませう。やい。太郎冠者あるか。

▲シテ「はア。▲ア「居たか。▲シ「お前に。▲ア「其方を喚び出すこと別の事でない。此ぢうの彼方此方のお振舞は。夥しいことではなかつたか。▲シ「其通で御さる。▲ア「夫に付て。此度は手前で奇特の見ゆる寶を比べうとあるが。藏の内に寶があるか。▲シ「いや存ませぬ。▲ア「それならば都にはあらうか。▲シ「いかにも都には御せらう。

▲ア「其方は大義ながら都へ行て。寶を求めて來い。▲「畏つて御さる。▲ア「最早行くか。▲シ「中々。▲ア「やがて戻れ。▲シ「はア。▲ア「ゑい。▲シ「はア。扱も。急なことを申付られた。先都へ參らう。扱都へ參つたらば。それを序にして此處彼處へ參らうと存る。都と見えて賑に御さる。さればこそ都ぢや。扱も。賑な事かな。はつたと忘れた事がある。寶屋が何處やら。又名を何と云まやら存せぬ。これから問ひに歸ることもはる。何と致さ

う。扱も。都で御さる。知らぬ事は呼ばれば知れることうな。なう。其處許に寶屋は御せらぬか。寶屋はう。▲スツバ「これは浴中に心も直になり者で御さる。見れば田舎者やらわつばと云ふ。驅してやらう。これ。▲シ「此方の事か。何事で御さる。▲ス「如何にも其方の事ぢやが。浴中を何といやぞ。▲シ「田舎者なれば聊爾は申さぬ。御免なれ。▲ス「いや。其方がさら。聊爾をいふではないが。何やら尋ぬる態ぢやが。何が欲しいぞ。▲シ「身共は寶が求たう御さる。▲ス「して其寶を知て居やるか。▲シ「都人とも存せぬ。夫を存て居れば。それから。參れ共。知らぬに依つて斯様に申ます。▲ス「いかにも誤つた。賣つてやらう。それに待やれ。▲シ「心得ました。▲ス「これ。此が寶ぢや。▲シ「此様な笠はいりませぬ。寶を下され。▲ス「南無寶。▲シ「其様に仰せらる。仔細が御さるか。▲ス「いかにも仔細が有る。語つて聞かませう。よう聞きやれ。▲シ「畏つて御さる。▲ス「昔鎮西の八郎爲朝と申御方が。鬼が島へ御つたれば。鬼共が取て去くせうと云ふた。いや。むごとは服せられまい。何にても勝負せうと仰せられて。色々勝負にお勝あり。則鬼が島で取て御つた隠笠でありや。これに



付添た隠篋の打出の小槌は。方々の大名衆へ買取らせられた。其残でおりやる。其方が欲しうなな依つて。賣つて遣らうかといふことぢや。▲シ「扱は聞き及うだ隠篋で御ざるか。▲ス「中々これぢや。▲シ「夫ならば求ませうが。代物は何程ぞ。▲ス「万疋でおりやる。▲シ「餘高ひ。負て下され。▲ス「厭ならば置きやれ。▲シ「夫ならば買ませう。扱奇特は如何したことで御ざるぞ。▲ス「奇特はそれを被れば。その者の姿が見えぬわ。▲シ「それは調法なことで御ざる。それならば被て御らうせられ。▲ス「いや〜其處が實ぢやわ。これは主を思ふ故に。主が被れば見えぬ。又身共が着ると中々見える。▲シ「それならば被て見ませう。▲ス「早う被やれ。▲シ「さア被りました。▲ス「田舎の〜。▲シ「此處に居ます。▲ス「何處に居やるぞ。▲シ「これ。此處に居ます。▲ス「はれやれ。被逃げしやるかと思ふた。▲シ「それならば。代物は三條の大黒屋で渡しませう。▲ス「さかにも明日彼で受取らう。▲シ「さらば〜。▲ス「好うおりやつた。▲シ「はア。なう〜嬉しや〜。重畳の寶を求て御ざる。先頼うだ人に見せませう。これぢや。御ざりますか。▲ア「あゝ。太郎冠者が戻つたさうな。歸つたか〜。骨折や〜。寶

を見せし。▲シ「心得ました。これで御ざります。▲ア「此様な笠はいらぬ。誠の寶を見せし。▲シ「扱は足下も御存ないと思えた。南無寶く。▲ア「やい。其様に南無寶と云ふは仔細がある事か。▲シ「如何にも仔細が御ざる。語つて聞かませう。▲ア「急いで語れ。▲シ「心得ました。昔鎮西の八郎爲朝が。鬼が島へ御出なされ。鬼共が取て服せうと申た。いや／＼むぎとは服せられまい。勝負をせうと有て。勝負をなされたれば。悉く御勝あり。隠袋の隠笠。打出の小槌を取て歸らせられた。則隠袋と打出の小槌は。方々の大名衆に買ひとらせられた。又此隠笠は。買まいと申たを。何彼と申て。漸求めて参りました。▲ア「これが聞き及うだ隠笠か。▲シ「なか／＼左様で御ざる。▲ア「扱又奇特は如何した事ぢや。▲シ「されば此笠を被ますれば。其着た者の姿が見えぬが不思議で御ざる。▲ア「夫ならば被て見よ。▲シ「其處が寶で御ざる。此は主を思ふ物で御ざるに依つて。私が被ますれば見えます。足下被て御ざらうせ。▲ア「夫ならこれへおこせ。汝は見えぬか見ゆるかそれで見よ。▲シ「畏つて御ざる。▲ア「さア太郎冠者。見えぬか。▲シ「いや見えます。これは如何な事。都の奴が騙しをつた。▲ア「何と見えぬか定か。▲シ「いかな事

見えぬ事で御ざる。▲シ「こりや此處に居るが見えぬか。▲シ「かつて見えませんなんだ。▲ア「某も其見えぬ處が見たい程に。其方被て見せし。▲シ「最前も申如く。主を思ふ物で御ざれば。某の被ました分では見えます。▲ア「其方に遣る分にせう程に。被て見せし。▲シ「いや／＼夫でも見えます。兎角お藏へ納めませう。▲ア「夫ならば其方に最早遣る程に被て見せし。▲シ「それは定で御ざるか。▲ア「なか／＼取らする。▲シ「いや／＼。見えぬ時は此方へおこせいと仰せられませう。兎角お藏へ納めませう。▲ア「是非取らする。▲シ「眞實。▲ア「弓矢八幡取らする。▲シ「それならば被て見ませう。▲ア「早う被て見し。▲シ「さア被ましたわ。▲ア「汝そりや見ゆるわ。▲シ「見えは致すまい。▲ア「此處が見ゆるわ。▲シ「いや見えます。▲ア「扱は汝は。都で太甚抜かれてうせ居つた。憎い奴の。やるまらぞ。▲シ「あゝ悲しや。許させられ。▲ア「やるまらぞ。やるまらぞ。

同隠れ笠

大藏流本

▲アト（此名乗。素袍にて御前掛りの節は此通りにてよし。常は。是は此邊と名乗る。下皆同断。）罷出たる者は此邊に隠れし大果報の者で御座

る。天下治り目出たい御代で御座れば。此間の彼方此方御寶比べは夥しい事で御座る。夫に付。今度目の前に奇特のある寶物を比べさせられうとの御事で御座るが。某が道具の内に。目の前に奇特ある寶があるか。太郎冠者を喚出。承らうと存する。やい。太郎冠者、あるかやい。▲シ「はア。▲ア「居るか。▲シ「はア。▲ア「居るか。▲シ「御前に。▲ア「念無う早かつた。そちを喚出す事別なる事でもない。此間の彼方此方の御道具比べは。何と夥しい事ではないか。▲シ「御意の通り夥しい事で御座ります。▲ア「それよ。夫に付。今度目の前に奇特の有る寶を比べさせられうとの御事ぢやが。身共が道具の内に。目の前に奇特の有る寶物があるか。▲シ「御道具は悉存じて居ります。目の前に奇特のある寶と申すものは。終に見た事御座りませぬ。▲ア「汝が知らずばあるまい。何としたものであらうぞ。▲シ「何となされてよう御座らうぞ。▲ア「いゝ。都にはあらうか。▲シ「何が扱部に無いと申事か御座らうか。都には御座りませう。▲ア「夫ならば汝は太儀ながら今から都へ上つて。目の前に奇特の有る寶物を求めて来い。▲シ「是つて御座る。▲ア「早く戻れ。▲シ「心得ました。▲ア「よい。▲シ「はア。扱も。こちらの頼んだ人の様に物を急に仰付けらるゝ御方は御座らぬ。今から都へ上つて。目の前に奇特のある寶物を求めて来いと仰付けられた。先念いで参らう。誠に某も内々都を見物致たいと存する處に。此度好い序で御座る。此處彼處を走り廻り。緩りと見物を致さうと存する。都近うなつたと見れて殊の外賑かになつた。いや。何かといふ内に。これは早都へ上り着いた。又田舎とは違ふて家建迄も格別な。あれからつとあれまで申ささうに軒と軒とをひつしりと建並べた程にの。是は如何な事。某は不念な事を致した。目の前に奇特の有る寶はどの様な物で。又何處許に有るをも存せぬ。遙々と問ひには戻られまいが。是は先何としたものであらうぞ。はア。流石は都ぢや。知れぬ事を呼ばはつて歩けば知るゝと見れた。さらば某も此處から呼ばつて参らう。寶買はう。寶買ひます。なう。其處許に目の前に奇特のある寶は御座らぬか。じやア。爰許には無いと見えた。寶買はう。寶買ひます。これ。それに目の前に奇特のある寶は御座らぬか。じやア。爰許にも無いさうな。もそつと上京へ参らう。寶買はう。寶買ひす。なう。其處許に目の前に奇特のある寶は御座らぬか。▲賣人「なう

い。こし。申。▲シ「ア。こちの事で御座るか。何事で御座る。▲賣「いかにも我御料の事ぢや。此處い浴中を何をわつぱと云ふてお歩きやるぞ。▲シ「私は田舎者で何をも存せぬ。眞平御免あれ。▲賣「いや。これこれ。聊稱おしやると云ふて苦むるではおし無。今おしやつたは何事ぞと申不審でおしやる。▲シ「只今申した事。▲賣「中々。▲シ「私は田舎者で御座るが。頼んだ者が。目の前に奇特の有る寶を求めて来いと申付けましたに依て。夫を喚ばつて歩きます。▲賣「扱其寶を知て御尋にやるか。但知らいてお尋にやるか。▲シ「これは都人の仰とも覺はませぬ。存すれば夫を買はうと申せども。存せぬに依て呼ばつて歩きます。▲賣「これは身共が誤つた。扱我御料は仕合せな人ぢや。▲シ「いや。仕合せと申て。見わた向の者で御座る。▲賣「いや。身についた仕合せではあり無い。浴中に人多いと雖も。目の前に奇特のある寶を商賣する者は。某ならでは無いに依て。身共にお逢やつたが仕合せやと云ふ事ぢや。▲シ「すれば私の仕合せで御座る。扱其寶が見たう御座るが。見せて下されうか。▲賣「何時なりとも見せておまさう。先それに御待ちやれ。▲シ「心得ました。▲賣「さればこそ田舎者で何をも存せぬ。爰に古い笠が御座る。此を賣ちやと申して賣つけ。代物を取らうと存する。なう。田舎の居りやるか。▲シ「これに居ます。▲賣「そなたは手は綺麗なか。▲シ「今朝手水をつかうたまで御座る。▲賣「それはちとむさけれど先戴かしめ。▲シ「はア。是が目の前に奇特のある寶で御座るか。▲賣「不審尤な。仔細を云ふて聞かさう。これへおこさしめ。▲シ「心得ました。▲賣「昔鎮西八郎爲朝と云ふ弓とりがあつたが。定めて我御料も聞及うであらう。▲シ「承り及うた弓とりで御座る。▲賣「其爲朝の鬼が島へ渡られた。鬼どもはとつて服せうと云ふ。爲朝聊爾には服せられまい。何ぞ勝負なして負けたならば服せられうす。又勝つた事ならば此島の寶物を取つて歸らうと御約束をなされて。色々勝負をなされたれども。悉爲朝の御勝なされ。其時蓬萊の島の隠れ笠。隠れ笠。打出の小槌。此三ツの寶をとつて歸らせられた。程久しい事なれば。笠と笠とは退轉致す。此隠れ笠は部の重寶にとあつて残しおかれたれ共。そなたの餘り欲しさにおしやるに依て。代物に依て賣ておまささうと云ふ事でおしやる。▲シ「すれば承り及うた隠れ笠は此で御座るか。▲賣「中々此でおしやる。▲シ「それならばち

と戴きませう。これへ下されい。▲賣「夫がよからう。▲シ「南無寶」。扱求めたう御座るが。代物は何程で御座る。▲賣「萬正でおりや。▲シ「こればちと高値には御座れ共。萬正に求めませう。扱目の前に奇特と申は如何様な事で御座る。▲賣「其笠をきれば餘人の目に見ぬが奇特でおりや。▲シ「是は奇特な事で御座る。夫ならば私も奇特見たう御座る程に。此方被て見させられい。▲賣「されは其事ぢや。夫は主を思ふ寶で。其主が被れば見ぬ。又餘の者が被ては見ゆる。最早我御料へ賣つたに依て。其方が主ぢや程に我御料被さしめ。身共が見ておませう。▲シ「夫はいよ／＼重寶で御座る。夫ならば私が被ませう程に。此方見て下されい。▲賣「心得た。早う被さしめ。▲シ「心得ました。(笠を被て)何と見はまするか。▲賣「田舎の／＼。どれになりや。▲シ「これに居ます。▲賣「是は如何な事。聲はすれども少しも見ぬ。田舎の／＼。▲シ「申々。これに居ます。▲賣「聲は聞ゆれ共。いかな／＼少しも見ぬ。▲シ「扱々奇特な寶で御座る。ちと取て見やう。▲賣「田舎の／＼。▲シ「いゝ。▲賣「田舎の。▲シ「何と見はませぬか。▲賣「扱々奇特な事ぢや。其方の聲はすれ共申々見ぬ事でおりの。▲シ「扱々近來奇特な寶で御座る。扱扱は最早斯う参りませう。▲賣「最早おりの。▲シ「さらば。▲賣「ようおりの。▲シ「はア。なう／＼。嬉しや／＼。まんまと目の前に奇特のある寶を求めて御座る。先急いで罷歸らう。頼うだ人も定めて睡御待策なさるゝであらう。此方持て戻り御目に掛けたならば。殊ない御機嫌で御座らうと存する。いや何彼と云ふ内に戻り着いた。先此を爰許に置いて戻つた通りを申上げう。申頼うだ。御座りまするか。太郎冠者が戻りまして御座る。▲主「いや。太郎冠者が戻つたさうな。太郎冠者戻つたか。▲シ「御座りまするか。▲主「いゝ。戻つたか。▲シ「只今戻りました。▲主「やれ／＼太儀や。扱云付けた目の前に奇特のある寶を求めて来たか。▲シ「まんまと求めて参りました。▲主「出かいた。早う見せい。▲シ「畏つて御座る。▲主「やれ／＼。才覚な者をつかへば。何時物を云付けても其儘調へて参る。▲シ「申々。此方は御手に綺麗に御座るか。▲主「今手水をつかふて随分綺麗な。▲シ「夫ならばちと戴かせられい。▲主「汝は都で雨にでも逢ふたと見はた。戯事をせずと早う寶物を見せい。▲シ「ア。勿体ない。南無寶。▲主「そちは殊の外信仰す

るが。夫には仔細でもあるか。▲シ「申々仔細が御座る。云ふて聞かせませう。よう聞かせられい。▲主「心得た。(シテ。都にて教へられたる通り云ふ。)▲シ「部の重寶にとあつて殘置かれたを。私の才覚を以て求めて参りました。▲主「それば聞及うだ隠れ笠と云ふはそれか。▲シ「申々▲主「夫ならば戴かう。これへおこせ。▲シ「心得ました。▲主「南無寶南無寶。▲シ「おう。夫でこそよう御座る。▲主「扱目の前に奇特と云ふは如何様な事ぢや。▲シ「其事で御座る。此笠を被ますると。餘の人の目に見ぬが奇特で御座る。▲主「夫は一段と奇特ぢや。夫ならば汝被て見せい。▲シ「いや。夫は主を思ふ寶で。其主が被れば見ぬ。又餘の者が被ては見はます。此は此方の物で御座るに依て。此方被て見させられい。▲主「夫はいよ／＼重寶ぢや。夫ならば身共が被る程に。そら見てくれい。▲シ「畏つて御座る。早う被させられい。▲主「心得た。やい／＼。太郎冠者何と見ぬか。▲シ「是は如何な事。頼うだ人の被させられたればあり／＼と見ゆる。身共はぬかれたさうな。何と致さう。▲主「やい。太郎冠者。笠を被たが何と見ゆるか。▲シ「申。頼うだ。どれに御座るぞ。▲主「これに居る。▲シ「御聲は致しますが。すきと見はませぬ。▲主「太郎冠者。これに居るか何と見ぬか。▲シ「いや。如何様に致しても見はませぬ。▲主「扱も／＼奇特な寶で御座る。さらば取つて見やう。▲シ「申頼うだ。頼うだ御方。▲主「これに居る。▲シ「いゝ。頼うだ。▲主「何と見ぬか。▲シ「扱々奇特な寶で御座る。御聲は致せ共少しも見はませぬ。▲主「近來奇特な寶ぢや。何卒某も奇特を見たい事ぢや。▲シ「御尤では御座れ共。此様な御重寶は早う御機へ納めて置ませう。▲主「いや。先待て。身共も奇特が見たい程に。此を汝に貸して遣らうに依て被て見せい。▲シ「貸して下されたと申ても。元が此方の物で御座る處で。見ゆるは必定で御座る。▲主「夫ならばそちによつた分にせう程に被て見せい。▲シ「遣つた分と申ても同じ事で御座る。是は兎角お蔵へ納めて置ませう。▲主「先待て。いかに重寶ぢやと云ふて。奇特を見れば寶では無い。是非に及ばぬ。そちに取りする程に被て見せい。▲シ「はア。此を私へ下さる。▲主「申々。▲シ「近來奈なうは御座れ共。能う思召ても見させられい。折角私を遣々部へ上つて才覚を以て求めて参つた物を私へ下さるゝと申事があるもので御座るぞ。兎角どうあつても目出たうお蔵

へ納めておきませう。▲主「これ〜。今も云ふ通り。何程の夜でも。奇特を見れば役に立たぬに依て汝に取らす。是非共被て見せい。▲シ「それどうあつても被まするか。▲主「中々。早う被て見せい。▲シ「只今こそ下されたれ。私が被て見ゆすば。定めて取返させられう處で。これはお蔵へ納めませう。▲主「これ〜。見ぬと云ふて。一たん遣つた物を何しに取返すものぢや。氣遣ひなしに被て見せい。▲シ「すれば是非共被まするか。▲主「中々。▲シ「後で欲しからせらるゝな。▲主「いかな〜。取戻す事では無いぞ。▲シ「夫ならば是非に及びませぬ。被ませう。▲主「早う被て見せい。▲シ「心得ました。被まする内必此方を見させらるゝな。▲主「見る事では無い。▲シ「只今被まする。迷惑がりて。シテ柱の許にて笠を被る。▲主「そりや見ゆるわ。▲シ「是は如何な事。扱々せはしない。また紐も締めぬ内に見させらるゝ。此方から左右を致すまでは必見させらるゝな。▲主「見る事では無い。早う被て見せい。▲シ「心得ました。必見させらるゝな。▲主「何と被たか。▲シ「追付け被まする。こちらを見させらるゝな。▲主「見はせぬ程に早う被よ。▲シ「只今被まする。と云ふて笠をきて。主の後ろへ行き。かゞみて。申。笠を被まして御座る。▲主「太郎冠者。どれに居るぞ。▲シ「いや。これに居まする。と云ふて。かゞみて主の後ろなつて廻る。▲主「太郎冠者〜。▲シ「これに居まする。▲主「見つけ。▲主「そりや見ゆるわ。▲シ「見れば致しませぬ。と云ふて笠をかゝす様にする。▲主「そりや見ゆるわ。▲シ「あ〜。許させられい〜。▲主「おのれ都でたらされて来た。あの横着者。どれへ行くぞ。遣るまいぞ〜。

シテ冠者 小島類駈斗目。狂言袴。肩衣。腰帶。扇子。塗笠一かい。
主 着付色無段駈斗目。素袍(村かける)。少き刀。扇子。
翁無之時は長上下。
賈人 主と同断。

八 土産の鏡

▲シテ「これは越後の國。松の山家の者で御ざる。某訴訟の事わつて。永々在京致して御ざる。此度訴訟相叶ひ満足仕た。急いで國へ罷下り。女子共に喜ばせうと存る。誠に國許を出る時は。都へさへ上りたらば別義はあまるまい。五日か十日の内には埒も明かうやうにも存て御ざるが。思ひの外逗留致して御ざる。去ながら。内々私の何とぞ存たることも首尾致し。此様な嬉しい事は無い。夫に付て。國許へ何ぞ土産を調べて。一門の者共へ取らせたら存たれども。永々の在京なれば。左様な事も思ひながらなりません。んだ。去ながら女共の方へは。珍しき物を調べて御ざる。則この鏡と申物で御ざる。これは大事の物で。昔は容易く人間の持つ物ではなかつたと申す。左様にあればこそ。我等の國許などでは。鏡と申物を持つことはおいて。見たことも御さない。此度某も在京のうちに。此鏡の仔細を懇に承りて御ざる。そのかみ人王十一代垂仁天皇の皇女。倭姫の尊。天照大神より御仁恵を頂き。日本を回國わつて。われ此所をば五十六億七千万歳迄。國土安穩に治め玉はうす

るとあつて、其しるしに御しんけいを治め玉ひ。代々御門に御座わり。三種の神器のうち内侍所と申は。則其の時の鏡の由を申さるに依つて。昔は御神物と申て。神々の御寶物として。人間などの持物ではなかつたといふが。今程は人間の重寶となり。上々は申に及ばず。我等如きの者まで此をたしなむ事で御さる。誠に珍しき物なれば。女共に取りせうと存て。漸求めて御さる。只假初の様なれども。鏡の徳に依つて我身の善惡を知ることもある。其仔細は。先世上の有様を見るに。高きも賤きも此世の利慾名聞に溺れて。死の近付たも知らず。我身の賤きをも忘れ。老衰へたるを知らず。徒に月日を送る。何となく鏡を見れば。はや何時となく衰へ。額に四海の波をたて。白髮たる有様を見て。心ある人は打驚て。此世の善惡に就て心を盡さんより。來世の道こそ大事として。頓佛道に入て。後世菩提を思ひよつて。後の世を願ひ生死無常を知するも。鏡の威徳なり。或時は鏡に向ひ鬚を剃り鬚をなで。衣紋引つくるひ。見苦しき有様をわれと知らずること。是第一の重寶なり。又女は鏡に對ひ。顔に白粉を塗り。紅。鐵漿をつけてわれと形を飾ること。高きも賤きも遍くすることなり。扱又我心に嬉しきことあつて。罪も報もなく笑ふ處は。我身な

がら賑かとも。うつゝなき。(此處にて鏡に對ひ笑ふべし)又心に腹の立ことあつて。氣色を變へ。われとはむらをもやす。(此處にて怒る顔する)扱もくおそろしきことかな。我身でさへ。すさまじく思ふ。斯様の事を思へば。人間は少々腹の立こともあるとまゝよ。堪忍をせうことぢや。人に讒言を云へば人も腹を立て。われも腹を立つ。慳貧邪険にして。佛になり難しとわれは。假初にも惡き心を持ではない。誠に鏡の徳に依つて。我身の善惡を知ること。是第一の重寶なり。急ぐ程にこれは。や國計に着た。女共を喚び出さう。女共は内に居るか。某が上方より今戻つた。早う出さしめ。▲女「此の人の聲がするが。お戻りやつたかしらぬ。▲シテ「女共。今戻つたわ。▲女「やれく嬉しや。此間は久しく便も無かつたに依つて。殊の外氣遣をしたが。先息災で下らせられて。目出度う御さる。▲シ「中々。思ひの外埒が明かねて。永々在京した。さりながら。内々の訴訟は思ひのまゝに叶ふて下つた程に。喜ばしませ。▲女「夫は目出度ことで御さる。如何程暇がいつても。訴訟の事が叶はねば迷惑ぢやが。思ひの儘に叶ふてお下りで目出度う御さる。▲シ「夫に付て。適都へ上つたことぢや程に。何ぞ土産物を調て下りたう思ふたれども。永々の在京な

れば。左様の物をも調ふることならなんだ。▲女「何が土産がいりませうぞ。先足下の息災で。訴訟が思ひのまゝ叶ひ。これ程の土産が御ざらうか。▲シ「去ながら。其方には珍しき物を求めて下つておりやる。▲女「それは嬉し。何と云ふ物で御ざるぞ。▲シ「其事ぢや。鏡と云ふ物ぢやが。これは昔は神々の寶物で。人間の持物では無かつたけれども。今は人間の嗜み道具となつて。都では如何様の賤き者迄も之を持つ。其仔細は。先此鏡といふ物を我前に立て見れば。我形の善悪が目の前に映りて見ゆる。然るによつて。或は女の顔に白粉を塗り。紅。鐵漿をつけて形を飾る。我御料達は見たこともあるまいと思ふて求めて来た。これ見さしませ。▲女「それは美う御ざる。其様な重寶な物は終に聞た事も御ざらぬ。先これへ見させられい。(こゝにて女鏡を見る)是は如何な事。其方は都へ上つて永々の在京のうち。女を置いて感まれたと見えた。▲シ「それは何故に。▲女「いやさうあればこそ。此鏡とやらんいふ物に。女の影がある。是は其方の都で置かれた女ぢやと見えたが。其執心が此處までついて来てあると見えた。なう腹立や。彼奴を何とせう知らぬ。▲シ「言語道断のことを云ふ奴ぢや。其女の影は汝が影が見ゆる。それを知らぬ

か。之を見よ。身共が對へば某が影が映る。扇を映せば扇の影。是程目の前に映す物の影が見ゆる。それが何が腹の立ことぢや。▲女「いや〜左様ではない。あれ見させ。妾が腹を立てば。彼の女奴が怖い面をして妾に向ひ居る。汝何としてくれう。能う妾が男を寐取つて。これまで後を追てうせたなア。見ればな〜腹が立つ。打割つたがよ〜(こゝにて鏡。舞臺の板へ投てうち割る態。表を下に投て割れたと云ふなり)▲シ「汝は憎い奴ぢや。はる〜都より求めて来た物を。其如くに打割り居つた。思へば憎い奴ぢや。目に物を見せう。▲女「おぬしが分では。妾に物を見することはなるまい。▲シ「何のならぬといふことがあるものか。(こゝにて扇にて二つ三つ打つ。女常の通り腹を立て)▲女「これは如何なこと。思ふまゝ打擲をした。堪忍をせぬ。(シテに取つく。色々に組合ふて。男を折倒して)今こそおれが本望ぢや。(といふて樂屋へ入る)▲シテ「憎い奴。やるま〜ぞ〜。

此狂言殊の外六ヶ敷なり。尤これも四十よりうちにては大方せぬ狂言なり。よく〜分別して爲べし。女悪ければ不出來おほし。右出立。つき素袍。下。狂言袴。裾括り。寂びたるちひさ刀よし。

同鏡男 大藏流本

▲シテ「歸る嬉しき。古里に」。念いて妻子に逢はう。是は越後の國。松の山家の者で御座る。某訴訟の事あつて永々在京致す處に。訴訟思ひのまゝに叶ふて御座るに依て。國許へ下らうと存する。先そり／＼と参らう。誠に國許では此様な事は知らないで。今日か明日かと待兼ね居るで御座らう。戻つて此様子を皆の者共に咄いたならば。嘆喜ぶで御座らう。扱某も一門共や妻子共へ何ぞ土産を調へて下らうと存て御座るか。永々の在京なれば。皆遣ひきつて假が御座らぬに依て。何も求めて下りませぬ。作去女共へは何より重寶な寶物を求めて御座る。則此鏡で御座る。昔は神物で。中々人間の手へ渡る物では御座らぬ共。今は部には數多御座るに依て。某も一ツ買取つて御座る。是に付。色々仔細のある事で御座る。其仔細は。人皇十一代垂仁天皇の皇女倭姫の命。奈なくも御神鏡をいたゞき。國々を御巡りありしに。伊勢の國二見の浦より。田作の翁の御案内にて。御鎮座の定まりたると申。其時戴せられたる御神鏡と申も。則此鏡の事ぢやと申。扱何程の寶でも奇特が無ければ益に立ちませぬが。此鏡程奇特の有る寶物は御座るまい。總て人間がわれと我妻を見る事は成られ共。此鏡に對へば。あれあの如く我妻があり／＼と見えます。又女の爲にはい／＼重寶で御座るわ。先此鏡に對ひ我顔の善惡を知り。顔には白粉を塗り。胭脂櫻葉をつけ。頭には油をつけて髪を結へば。如何な悪女も十位二十位も美しう見えます。すれば女の爲にはこれに越す寶は御座るまい。扱又男にも調法で御座るわ。此鏡に對つて十九や廿のうるはしい顔を見ては諸事分別なし。扱又年寄り老いかゞまり。頭には雪を戴き。顔には四海の波を港へ。腰に梓の弓を張つたる姿を見ては後生をも願ふ。すれば後生をも前生も取外すまいは此鏡で御座る。さらば某も踏次の慰にちと見やうと存する。扱も／＼奇特な事ぢや。我と我妻が疊霞もなうあり／＼と見ゆる事ぢや。扱々機嫌の好い親かな。是は正身の北野の笑佛を見る様な。はア。此度はちと腹の立つた顔を見たいものぢやが。これは何ぞ腹の立つ事を思ひ出させばなるまい。あゝ。何やら腹の立つ事があつたが。おう。それ／＼。なう

怒ろしや怒ろしや。其儘書に書いた鬼の面に見ゆる。はア。是に付て思ひ出した事が御座る。在京の中。さる寺へ参つて説經を承はつて御座るか。地獄へ落るも心から。又極樂へ行くも心から。地獄も極樂も目の前にお説きやつたが。是で得道致いた。今某が腹を立てた顔は其まゝ鬼ぢや。これと思へば聊爾に腹を立てる事では御座らぬ。さらば又機嫌を直して腹はしい顔を見やうと存する。扱も／＼機嫌のよい顔で御座る。(笑ふて)いや。餘念も無う鏡に見入つて居て時刻が移る。さらば先鏡を仕舞ふて。念いで國許へ罷歸らう。誠に此鏡を女共に取りさせたならば。定めて殊ない喜びで御座らう。何彼と申内に國許へ戻り着いた。則此が某が内ぢや。なうなう。是のは内に居さしますか。今戻つておりや。▲女「やア」。是のは戻らせられて御座るか。▲シ「中々。今部から戻つておりや。▲女」やれ」。早う戻らせられた。先此方も御息災で近來目出たう御座る。▲シ「いかにも。身共も随分息災で戻つたが。其方も變る事も無うて目出たうおりや。▲女「何が扱妾も變る事も御座らぬ。扱此方の御訴訟の事は何となりまして御座るぞ。▲シ「されば其事ぢや。訴訟も思ひのまゝに叶ふておりやる程に。其方も喜うてくれさしめ。▲女「夫は近來目出たい事で御座る。妾も殊の外案じて居ましたが。此方の思召すまゝに叶ふて妾も嬉しう思ひます。▲シ「扱一門共や其方へも何ぞ土産を求めて下りたう思ふたが。永々の在京なれば遣ひきつて假が無きに。何も求めて参らなんだ。▲女「何が扱此方の息災で歸らせらるゝが何よりの土産で御座る程に。別に何が入りませうぞ。▲シ「さりながら。其方へおまさうと思ふて。つとと重寶な寶物を求めて参つた。則是でおりやる。此は鏡と云ふて。昔は神々の持ちあつかはせらるゝ物で。中々人間の手へ渡る物ではなけれ共。今では部に數多出來てある物ぢやに依て。此を其方へ遣らうと思ふて求めて参つた。▲女「今も申通り。此方の息災で戻らせられたが何よりの土産で。外には何も入りませぬが。折角此方の御志で御座るに依て申請させう。扱是は何になる物で御座る。▲シ「總て人間がわれと我顔形を見る事はなられ共。此鏡に對へば我妻があり／＼と映る。總じて女は此鏡に對ひ顔のよし惡を知り。けはひ化粧と云ふて。顔には白粉を塗り。胭脂櫻葉をつけ。油をつけて髪を結へば。如何なる悪女も十位二十位も美しう見ゆるに依て。女の爲にはこれ程の寶は無程に。先それを明けて見さしめ。▲女」や

れ。それは奈う御座る。すれば何よりの寶で御座る。さらば急いで見ませう。▲シ「早うお見やれ。▲女「やい。わ男。在京の内女を抱へておいて能う是まで連れて來おつたな。何としてくれうぞ。なう。腹立や。▲シ「これ。其方むざとした事を云ふ。終に鏡を見た事が無いに依て鏡の譯を知らぬ。其中に見ゆるが則其方の顔でおりやる。▲女「ふ。又其つれな事をおしやる。妾が腹を立てれば同じ様に腹を立て、妾に囁付く様に致す。何としてくれうぞ。▲シ「是は如何な事。流石松の山家の者ぢや。鏡を見た事が無い處でくだらぬ事を申。これ。女共。其様にわしう云はず共。先心を鎮めてようお見やれ。これ手を映せば手が映る。扇子を映せば扇子が映る。身共が側へ寄れば某が映る。何なりとも其鏡に對へば映るに依ての寶でおりやる。則我御料が腹を立て、見るに依て。其方の顔が其鏡に映るのでおりやるが。合點が行かぬか。▲女「なう。腹立や。何の彼のと云ふて此女の側へ寄つて妾をたらさうと云ふ事か。なか。聊爾にたらさるゝ事では無い。所詮此様な物は打碎いてのけう。▲シ「あ。これ。先待たしめ。其様な事を云ふて。我御料がいらすは外の者にやつて仕舞ふ。こちへおこさしめ。▲女「やい。わ男。其女を連れてどれへ行くと。やるまいぞ。

シテ

太郎冠者打扮。小刀差して。鏡懷中す。

女

但袍にても。

作物

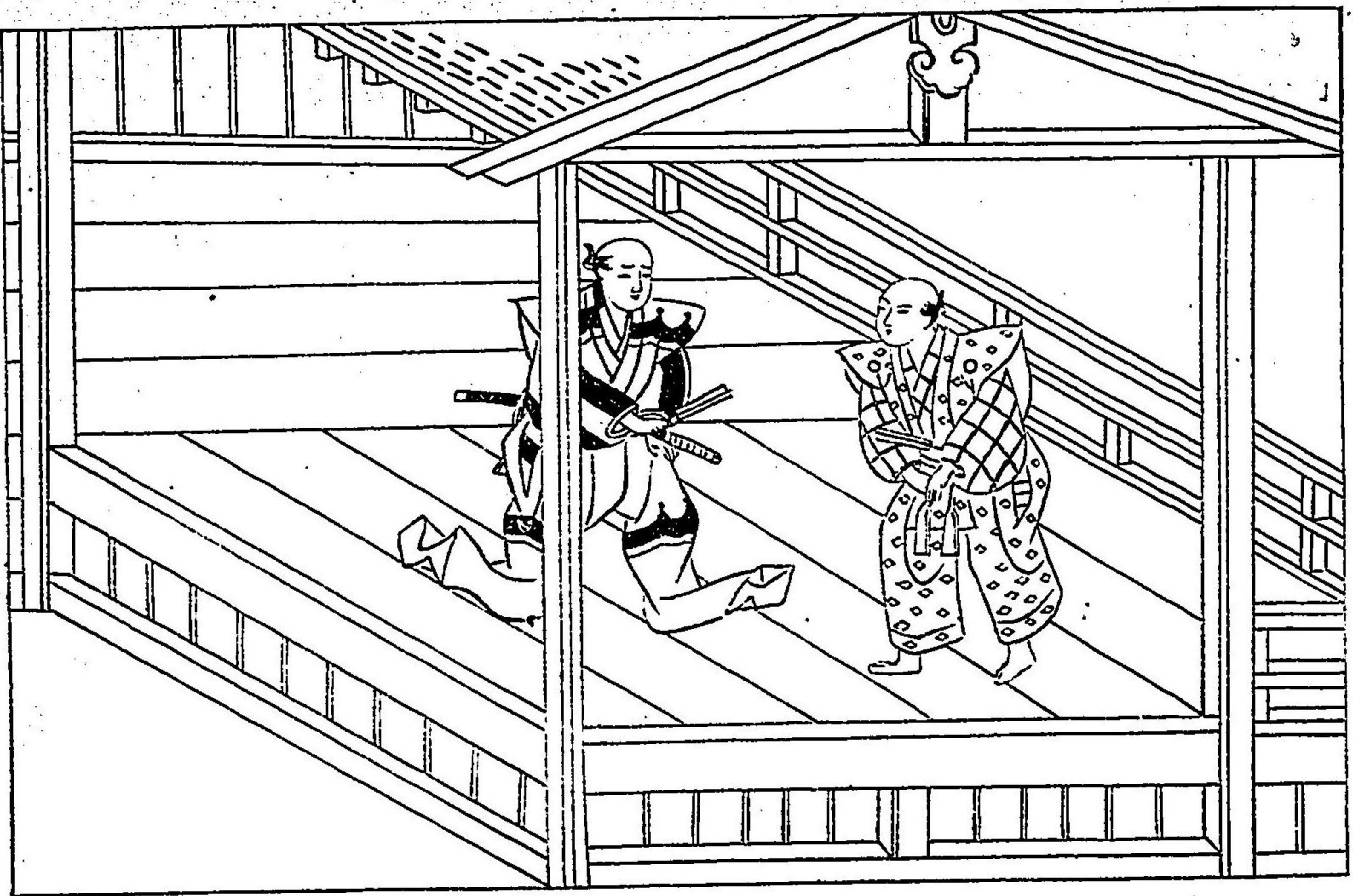
晒布一丈五尺。

九 鱸庖丁

▲ラビ「これは淀邊に住居致す者で御座る。某は都に伯父を持て御座るが。此間くわんどなりをする程に。鯉をくれいといふて狀をおこされて御座る。何かと致して。今日迄

鯉を求めませぬ。定て鯉をわてにして御座ることもあらう。何卒申譯を仕らう。さい。用を申さるれども。何を色調たことも御ざらぬ程に。定て此度は腹をお立やるとがあらう。去ながら。面白可笑う申譯を仕らう。参る程にこれぢや。先案内を乞はう。(常の如く)只今参りますること別の義でも御ざらぬ。先日鯉のことを仰下されて御座るに依つて。方々才覺致して。淀一番の鯉を求めまして。とてもの事に生鯉に致して持て参らうと存まして。藤の蔭にて繋ぎまして。淀の橋杭の二番目の杭に繋いで置いて御座る。今日これへ参りまはすに。徐々と引上げて御座るが。何とやらん手當りが輕う御ざつたに依つて。不思議な事ぢや。鯉は水離が大事ぢやと存て。きつと引上げて見まして御座れば。大事のことが御ざりますわ。片身さかふて猫が食べて御座るに依つて。御祝儀に使はせらるゝに。疵のついた物はいらぬことぢやと存て。持て参りませなんだ。自然鯉をわてになされても御ざらうかと存まして。其中譯に参りました。▲ラヂ「扱々我御料は遠路の處を來るに及ばぬに。律義なことぢや。去ながら。肴物を下されて。客衆も大かたもてないたによつて。鯉が無うても苦しうない。先斯う通らしませ。一つ獲いてやらうぞ。▲ラビ「それは

忝なう御ざりまする。去ながら。お忙しうも御ざらうぞ。
 先お暇申ませう。▲ヲデ「故意とさへ呼びにやらう所ぢや。幸の事。先斯う通らします。▲ヲヒ「左様に御ざらば通りませう。▲ヲデ「中々。先それに寛りと居させませ。▲ヲヒ「畏つて御ざる。▲ヲデ「扱も〜惜い奴である。彼は私の甥で御ざるが。何を云ふても。百に一つも合ふた事が御ざらぬ。今度も鯉は定めて求めますまいが。某が何も知らぬと思ふて。今の様なことを申す。惜い奴ぢや。身共もちよつぱりと口で覆いて戻さう。やい〜。最前の鯉を何なりと一こん洗へといへ。ゑい。いやなう。我御料は慇懃にせずとも平に寛と居さしめ。▲ヲヒ「いや苦しう御ざりませぬ。▲ヲデ「其方の仕合に。或方より見事な鯉を三こん貰ふた。其方に振舞はうと思ふ。一こん洗へと吩咐た。とても事に。何なりとも料理を好ましめ。▲ヲヒ「いや。私は内證の者で御ざる。左様の肴をば給はせられで。お客へ使はせられませ。▲ヲデ「いや。客も大方饗いて暇になつた。氣遣をせずとも料理を好ましめ。▲ヲヒ「左様御ざらは。うちみで下されませう。▲ヲデ「いや鯉でおりやるわいの。▲ヲヒ「鯉でもうちみが好う御ざる。▲ヲデ「鯉でもうちみが好い。▲ヲヒ「中々。▲ヲデ「扱は我御料は



うちみの仔細を知らぬと見えた。今の鱈を洗ふ内に。うちみの仔細を語つて聞せう。▲ヲヒ「それは忝な御ざりませう。▲ヲヂ「抑うちみと云ふこと。寛和元年。其頃は花山の院の御代なりしに。四季折々の御遊。殊に越え。御狩に好かせ玉ふにより。せいらいに鷹をすゑさせ。國々へ御下向ある。折節遠江國。橋本の長が宿所に着玉ふ。長は出合。三こんの土器据たりし時。板に鯉を出す。其時庖丁人は。四官の太夫忠政なり。忠政は三廊近き釣殿に出て畏る。それ忠政とありしかば。忠政何とか思ひけん。板なる鯉をば切らずして。簀子の竹を一問外し。下なる魚を挟んで上げ。みさごの鰭を拂ひおろし。魚を離せば魚喜び。石當の蔭に遊び隠れぬ。扱其後板引寄せ。すつばと切つては。しつと、うちつけ。すつばと切つては。しつと、うちつけ。并居たまへる上北面。下北面。納言。宰相。檢非違使。黒袴。徒黨に至るまで。三刀づつうちつけ参らせしかば。忠政が只今の庖丁神妙なり。勳功は乞ふに依るべしと御感なりてより此方。うちみと云ふことはじまりたり。さればうちみは。海のものにては鯛。川のものにては鯉ならではあるべからず。御内の親は庖丁人のその子として。鱈にうちみ食はうなど、云ふて。立居の人には笑れ給ふな。かま

へて無らことでおちやるぞ。▲ヲヒ「扱は無らこと御ざりまするか。▲ヲヂ「中々。最前の鱈を手ねばなものに云ひつけたれば。暇がある。やゝ。今の鱈を洗ふたらば。早う持つて来いと云へ。扱最前の鱈をまんまと洗ひすまいて。切目尋常なる粗に。備前庖丁。青木の箸。紙一重追取添へ。しつけ知つたる若者が。二人して持て出やう。其時其方におきりそへと申さう。其處で我御料が云はうには。いや伯父様の庖丁久敷見参らせぬ程に。一手遊ばされい。見物仕りたいと云はでは叶ふまい。▲ヲヒ「中々左様に申ませう。▲ヲヂ「其時某がよしにわまり。板際にするすると立寄り。箸。刀。おつ取つて。紙を三つに切り。二つを下へおしおろし。一つを組へどうとおき。禮式の水こそげ。さつと三刀する。するまゝに一の刀にて魚頭をつき。二の刀にて上身をおろし。おろしもわへず。魚頭粗頭にどうとおき。中打ちやうと三つに切つて。さつこれを煎物にして申さう。幸ひうはみ。したみが有る。之をさつとかき蓋にして振舞はう。魚の身の厚い所を薄う見えい。薄い處を厚う見ゆるやうに作るが。庖丁人の腕でおちやる。いかにもかつすくばうて刀ばやに。すはり。すはりと作つて。生姜酢をもつて。さ

つくと蟹へ。深草土器に。南天ぢくのからしきを。ちよぼくと盛うて。其方にも振舞はうす身共も相伴せうが。何とこれは好い肴ではあるまいか。▲ヲヒ「仰せの通、これは一段と好う御ざりませう。▲ヲヂ「それならばこれを肴にして。ひだりを以て五盃飲うでくれさせませ。▲ヲヒ「尤肴は好う御ざりますれども。夫はなりますませ程に。御許されて下されませ。▲ヲヂ「いや酒と云ふものは。しひねば飲れぬ物ぢや。是非とも飲でくれさせませ。▲ヲヒ「夫程に。仰せらるゝ程に。下されても見ませうか。▲ヲヂ「飲う。▲ヲヒ「中々。▲ヲヂ「近比満足した。扱勝手よりも。物こそ出来たれとて。ゆのかうたふに。貝杓子おつとり添へ。持て出やう。これをも好い處をよそうて。其方へも申さうす。某も相伴せうが。何とこれは五杯目の盃には好うは有るまいか。▲ヲヒ「ないことで御ざらう。▲ヲヂ「夫程に思ふならば。今度は右を以て七杯飲うでくれさせませ。▲オヒ「最前の五杯さへ迷惑に存ましたに。況や其大盃で。存もよらぬことで御ざる。御免なされて下されませ。▲ヲヂ「いや。我御料は能う上戸を知つて強ひることぢやに。是非とも飲うでくれさせませ。▲ヲヒ「夫程に。強ひさせられまするならば。

何卒ねらふて見ませうまで。▲ヲヂ「狙らうて見やう。▲ヲヒ「中々。▲ヲヂ「それは嬉しい。扱小盃を以てちよろりちよろりと廻さうか。さつと取らうか。▲甥「いや。もう早うお取りなされませ。▲ヲヂ「夫ならばさつと取らうす。扱酒の上に。濃茶は好いものではないか。▲甥「中々。一段好いもので御ざる。▲ヲヂ「某は宇治邊に知音をもつたが。今度此とうを營むと有て。極を三袋くれた。折節一袋は。挽せておいた。其方が知る通り。身共茶の湯に好いたに依つて。奥の間に湯がりんくと沸りすまいて有る。これへ其方を同道してお茶を申さう。▲甥「夫は忝う御ざります。▲ヲヂ「これも其方にお立そいと申さうが。茶は亭主の役ぢやに依つて。某が立つるであらう。湯七分に泡八分。むくく。やはく。はうくと。昔様に中高に。猫の背をたてた如くに。立ないて振舞はう。▲甥「夫は好う御ざりませう。▲ヲヂ「其處で其方が褒てくれたがよい。▲甥「何と褒ましたが好う御ざるぞ。▲ヲヂ「最前鱈を料理なされた御手許。近比見事で御ざると存ましたれば。殊に御茶の湯の御手前見事さうに御ざると。おりしきつて譽てくれたがよい。▲甥「中々。左様に申せませう。▲ヲヂ「總じて人は乗せらるといへども。譽らるゝは嬉しいものぢや。そ

ここで某がふわと乗つて。いや我御料は。言はれぬ辭遣を云ふ人ぢや。親子の心安さは。此様な時ぢや。寛と居て二服も三服もお飲みそいと申さうが。如何に其方が茶好でも。極を二服と得飲まいぞ。▲甥「思ひもよらぬことで御座らぬ。▲ヲデ「手前をさつと仕舞はうす。後にはなるまい。迎もこの事に暇乞ひの様子を教へう。お立やれ。▲甥「畏つて御座る。▲ヲデ「最前の酒は。五杯と七杯と十二杯よ。▲甥「中々十二杯で御座る。▲ヲデ「十二杯飲うならば。如何に我御料は強いと云ふたりとも。舌元も立つまいし。足元も定まるまい。▲甥「左様で御座らう。▲ヲデ「其時科も無い扇をひねりまはして。今日は甚御馳走で御座る。殊にお茶と申。御酒と申。忝う畏まり候。重ては鯉をこそ持て参らざとも。鯉なりとも。鮠にても。持て参らう。さばば〜と。おしやる程饗いて戻したいが。我御料が鯉は鯉が喰ふたとおしやる。某が鯉をはうて。が喰ふたといふ。今の物語を喰ふた心をしてとつと〜お歸りそい。▲甥「面目も御座らぬ。▲ヲ「好うおりやつた。

同

大藏流本

▲アト「是は淫邊に住居致す者で御座る。某都に伯父を一人持て御座る。

此度官途成りを致さるゝに付て。鯉を求めてくれいと申されて御座れ共。私の事で御座るに依て今に求めませぬ。今日にあれへ参り。よい様に申ないて置かうと存する。先そり〜と参らう。鯉にあの伯父御ぼつと正直な誰し〜い人で御座るに依て。面白をかしく申たならば。鯉にせられぬと申事は御座るまい。いや。参る程に是で御座る。先案内を乞はう。常の如く。▲シテ「ゑい。そなたならば案内に及ばうが。なぞにつ〜と通りはめされいで。▲ア「左様には存じて御座れ共。若御客はし御座らうかと存じて。夫故案内を乞ひまして御座る。▲シ「夫は念の入つた事ぢや。扱今は何と思ふておりやつたぞ。▲ア「只今参ると別なる事でも御座らぬ。此度官途成りをなさるゝに依て。鯉を求めてくれいとな仰せられて御座る。▲シ「いかに左様に申ておりやう。▲ア「私の事で御座れば。方々と穿鑿致いて。淀一番の鯉を求めました。▲シ「夫は近來満足致す。▲ア「逆もこの事にいけ鯉に致して上げうと存じて。淀の三本目の橋杭へ藤巻をもつて繋ぎまして。今日これへ参りまにそり〜と引上げて御座れば。何やら手のうちが軽う御座つた。絶て鯉は水放れが大事ぢやと申に依て。ちやつと引上げて見ましたれば。申。大事の事が御座つた。▲シ「何としたぞ。▲ア「片身さかうて瀬がたへまして御座る。▲シ「何ぢや。片身さかうて瀬がくふた。▲ア「疵のついた物は御用に立ますまいと存じて。其御断に参りまして御座る。▲シ「やれ〜。其方は念の入つた人ぢや。其事ならば誰ぞ人を以てなりとおしやらいで。自身の御出満足致す。▲ア「はア。▲シ「扱一ッ申さう程に斯う通らしめ。▲ア「御取込にも御座りませう。私は最早斯う参りませう。▲シ「いや〜。仕舞ひはて〜何も用は無い所で。平に斯う御通りやれ。▲ア「夫ならば通りませうか。▲シ「つ〜と通らしめ。▲ア「畏つて御座る。▲シ「それに緩りと居りやれ。▲ア「心得ました。▲シ「あれへ参つたは私の甥で御座るが。彼奴が申事に百に一ッも誠は御座らぬ。定めて此度の鯉も求めば致すまいが。又誰しに参つたもので御座らう。某も口調法をもつて。ほつてと持成いて歸さうと存する。やい〜。最前買ふた三三の鯉の内。一〜ん洗へと云へ。ゑい。なう。お聞きやうか。▲ア「何事で御座る。▲シ「最前さる方より此度の頭を經營とあつて鯉を三〜ん買ふた。内一〜ん洗へと言付けた程に。何ぞ料理を好ましめ。▲ア「御つかひ方も數多御座らう程に。是は御無用で御座る。▲シ

「いやいや。方々より買ふて魚は満々である程に。平に料理を好ましめ。▲
 ア「夫ならば好みませうか。▲シ「夫が好からう。▲ア「はア。鱈で御座
 るの。▲シ「中々鱈でおりや。▲ア「夫ならば打身でたべませう。▲シ
 「いや。鱈でおりやるぞや。▲ア「鱈で御座るに依て打身でたべませう。▲
 シ「む。すれば我御料は打身の仔細は知られ共。打身がよいものじやに
 依て喰ふとおしやるか。▲ア「いかに左様で御座る。▲シ「夫ならば今
 の鱈を洗ふ内打身の仔細を詰つて聞かせう程に。ようお聞きやれ。▲ア「承
 りませう。▲シ「押打身と云ふ事は。寛和元年其比は。花山の院の御代な
 りしに。四季折々のお遊び。殊に越後御狩にすかせ給ふに依り。政頼に鷹
 をすまさせ。國々へ御下向あり。折ふし遠江の國橋本の長が宿所に着給ふ。
 長は出合申。三献の土器振ふたりし時。板に鯉を出す。其時の庖丁人は四
 官の大夫忠政なり。忠政は三廊近き釣殿に出で畏る。それ忠政とありしか
 ば。忠政何とか思ひけん。板なる鯉をば切らずして。黄の子の竹を一間は
 づし。下なる魚を挟んで差上げ。みまこの鯉をばらりとおろし。魚を放
 せば。魚は悦び夕照の影に遊び隠れぬ。扱其後板引寄せ。すつばと切て
 はしつと、打つけ。すつばと切てはしつと、打つけ。井居給へる上北面に
 下北面。納言。宰相。檢非違使。黒袴の徒等に至るまで。三刀づつ、打つけ
 く、参らせしかば。忠政が庖丁いつもに勝れて神妙なり。勳功に乞ふによ
 るべしと御感ありしより此方。打身といふ事初りたり。總て打身と云ふも
 のは。海の物にては鯛。河の物にては鯉ならであるべからず。御内の親は
 庖丁人。庖丁人の其子として家をも繼がうする程の人が。鱈に打身たべう
 などいふひて立居の人に笑はれ給ふな。かまへて無い事でありやるぞや。
 ▲ア「すれば無い事でありや。▲シ「おう。無い事でありやるとも。い
 や。最前の鱈を手ればな者が洗ふと見わたいかう悪い。やい。最前の
 鱈を早う洗ふて持て出といへ。い。▲ア「いや。なう。何事ぞ御
 座る。▲シ「譬へば今の鱈をまんまと洗ひ済いて。切目尋常なる皿板に青
 木の眞那箸。備前庖丁。紙一重おつ取添へ。疵知つたる若い者が二人して
 斯う其方の前へ昇いて出う處で。其方へお切りせいと申さうか。我御料の
 おしやうは。是の庖丁近う見参らせぬ。一ト手遊ばいて御見せ候へとお
 しやういで叶ふまい。▲ア「いかにも左様申ませう。▲シ「所で某よしに餘
 り。板許におし直り。箸刀おつ取り。鱈をば三ツに切り。二ツを下におし

下し。一ツをば皿板頭にどうと置き。煎式の水こそげ。さつとと三
 刀するまゝに。一の刀にて魚頭をつき。二の刀にて上身をおろし。下し
 あへず魚頭を皿板頭にどうと置き。おつとり返して下身を下し。中打てう
 くくと三ツに切て。いざ此を熱物にして申さう。▲ア「是は一段とよう御
 座りませう。▲シ「其内唯は何とて饜應さうするぞ。幸ある上身下身を
 き整にして申さう。▲ア「是はなほくで御座る。▲シ「總て其方も能う
 おこるやれ。魚の身の厚い處は薄う見ゆい薄い處は厚う見ゆいと作るが
 庖丁人の腕でありやるげな。▲ア「ほう。▲シ「さりながら。此様な物は
 ひつつくばうて刀早にすつぱりくばりくばりすつぱりと作りすまい。生
 姜酢を以てきつくと盛へ。南天葱のさいしき。深草土器にちよぼくと
 んそつて。我御料へもおまさらう。身共もたべうか。何とよいものでは無い
 か。▲ア「これはよい御もので御座る。▲シ「夫程よいと思はしますならば。
 右を以て五杯飲うてくれさしめ。▲ア「いや。其様にばたべられませう。
 ▲シ「いや。其方は六々敷い上戸ぢや。始から強いておかればならぬ。
 平に飲うてくれさしめ。▲ア「夫ならば畏つて御座る。▲シ「夫は近來滿
 足致す。扱最前の熱物こそ出来たれと。袖の葉のかうとふに貝杓子おつ取
 り添へ。これへ持つて出やう處で。これもよい處をよそふて。其方へも
 まさうす。身共もたべうか。五杯の上では好い肴では無いか。▲ア「誠好
 い御肴で御座る。▲シ「夫程好いと思はしますならば。今度は左を以て七
 杯飲うてくれさしめ。▲ア「最前の五杯さへ御座るに。是は得たべられま
 すまい。▲シ「いや。其方は酔ふ上戸ぢやに依て。今から強いておく。
 是非共飲うてくれさしめ。▲ア「夫ならばねらふても見ませうか。▲シ「ね
 らふても見やうと云ふは飲もうと云ふ事か。▲ア「左様で御座る。▲シ「夫
 は近來畏り存ずる。扱小杯を以てちよぼくと通さうか。但當世様にさつ
 と取らうか。▲ア「當世様にさつと取らせられい。▲シ「夫ならば取らう。
 扱大酒の上では濃茶がよいものでは無いか。▲ア「酔を醒いて好いもので
 御座る。▲シ「其方はどれからどれ迄も仕合せな人ぢや。御知りやる通り
 宇治邊に知音をもつたものなれば。此度の頭を經營とあつて。極な三袋買
 ふた。内一袋は挽かせておいた。又我御料も知る通り。常々茶の湯に好く
 事なれば。奥の間に湯はりん。とたぎつて居る。あれへ其方を同道して。
 御たて(點)そいと申さうか。茶は亭主の役なれば。茶の湯元押直り。湯

七分に迫八分。ほう／＼。むく／＼。やば／＼と音様に中高に。猫の腹立た様に急度點でないで申さう所で。其方は誓めくれればならぬ。▲ア「何と申て誓めますぞ。▲シ「是はいかにも慇懃にかまへて。最前の鱧の庖丁の御手許。唯今の御茶の湯の御手前。とかう勝れて見事さうに御座ると。是程の事はおしやらう。▲ア「夫程の事は申ませう。▲シ「所で某の申さう。なぜに左様に慇懃にな仰せられるぞ。か子中の心安いはるく(平)に居て五服も七服もおまわりやれと申さうが。いかに心安と云ふても。極を二服とば得おしやるまい。▲ア「左様には申すまい。▲シ「夫ならば茶の湯もさつと仕舞ふて。逆もの事に暇乞ひの仕儀迄を放へておまさう。お立ちやれ。▲ア「長つて御座る。▲シ「扱最前の五杯と七杯は十二杯では無いか。▲ア「中々十二杯で御座る。▲シ「いかに我御料が強いといふて。十二杯飲めた事ならば。手許も足許もむさからう。▲ア「正体は御座りませぬ。▲シ「總て酒酔の癖として。昔も無い癖をひねくり廻して。其事にて。此度の鯉を持つて参らぬ。へ御座るに。鱧の庖丁御茶迄を下され。忝う御座る。今度此禮参らぬらば。泥鰌にてもなれ。鱧にても候へ。持つて参つて此御禮は急度申ませう。先それまではさらば／＼／＼。とおしやる程にもないで歸りたいが。其方の鯉を頼り喰ふた如く。其の鱧は放情が喰ふて無いと云ふに依て。今の物語を喰ふた飲うだと思ふて。足許の明るい内とつと、歸らしめ。▲ア「面目も御座らぬ。

シテ

色無段頼鬘斗目。

アト

太郎冠者打扮。

長上下。ちひさ刀。扇。

十 瓜 盗 人

▲瓜主「罷出たる者は此邊の耕作人で御座る。當年は瓜を作つて御座るが。身共が仕合で殊の外好う出来て御座る。

今日は畑へ見舞て。臍落の致したを。少取つて参らうと存る。誠に此邊方々に瓜を作つたれども。某がやうなは御座らぬ。畑へは毎日見舞はねばならぬ。是が身共が畑ぢや。やれ／＼嬉しや。夥う生つた。思ひ出した。何時も畑へ獸がついて瓜を荒す。人形を作り置かう。(人形を作る)一段好い。明日見舞て臍落ちを取らう。(大鼓座へ入る)▲盗人「これは此邊に住居致す者で御座る。今日用所ござつて。山一つ彼方へ参つて御座るが。道に見事な瓜が生つてあつた。私にお目をかけらるゝお方に。瓜好きな人が御座る程に。今夜彼へ参つて。四つ五つ取て参らうと存る。方々に瓜島が數多御されども。今日見て置いたやうな瓜は御座らぬ。此邊にあつたが。どの島ぢや知らぬ。これぢや。先垣杭を抜かう。(垣を二三本抜く態をして。腰かゝめて島へはいる。)さア島へは這入たが。番の者は無いか知らぬ。わらは聲を立うが無い物ぢや。晝見たれば瓜がいかい事見えたが。夜ぢやに依つて見えぬ。此が瓜さうな。瓜かと思ふたれば枯葉ぢや。(彼處此處を搜て見て)瓜にあたらぬ。此様なことでは瓜を取ることはなるまい。何とした物でわらう。思ひ出した。夜瓜を取るには轉びをうつて取るものぢやと聞いた。さらばこれから轉をうつて見よう。さればこ

そ。枕のやうにあつた。(枕の時寐て居てわらふ。一つ漬
 たわと云ふ。)扱もく好い匂ぢや。此處にあるわ。後の方
 にもあつた。此様にして取らば。如何程なりとも取られ
 う。(此處にて地唄ひの方にかいせ(案山子)あり。其側へ轉
 びかゝる。人形を見て肝を潰す。)眞平御許されませ。私は
 盗人では御ざりませぬ。足下の鼠が餘り見事に瓜が生りま
 したと承はりました。見物に参りました。命の義を御許さ
 れませ。瓜二つ三つ取りまして御さる。皆返しませう。御
 免なつて被下ませ。申物を仰せらねば(仰られねば)何共
 迷惑で御さる。重ては最早参りますまい程に。平に御許さ
 せられて。返させられて下されませや。申。なう。(手をわ
 げて。暗き時物を見る態して。人形を見付て。)是は如何な
 事。うしにくらはれ。扱もくよい肝を潰いた。瓜主かと
 思ふて。いくせの事を思ひ。迷惑した。此様にようもく。
 上手が作つた物ぢや。其儘人のやうな。獸が見たらば肝を
 潰いて。近邊へは寄るまい。此奴故思ひも寄らぬ肝を潰い
 た。重て來ることではなし。打こかいて(打倒て)退けう。
 腹の立つことぢや。瓜蔓も引撈つて退けう。好い仕合せ。急
 いで戻らう。(大鼓の側へ入る)▲瓜主「昨日瓜島へ参つた。
 未臍落が致さなんだ。今日は大方臍落が御ざらう。取て参

らう。内の者を遣れば瓜を盗み居るに依つて。某の毎日参
 らねばならぬ。これは如何な事。散々に鼠を荒いておいた。
 是は扱。瓜蔓も引撈つておきをつた。其上人形も打倒いて
 おきをつた。これはいかさま獸の業ではない。瓜盗人め。
 タアうせたものであらう。扱もく腹の立つ事ぢや。今夜
 は某がかいせ(案山子)に成つて捕やう。定て夕アので味
 を得て。又今夜も取に参らぬことはあるまい。(右の人形の
 様に烏帽子を着。面を被り。左の綱。右に竹の枝。床机に
 腰をかけ居る。)盗人「他所へ物を遣ろとも。後前の分別
 して遣る事ぢや。盗んだ瓜を。さるお目をかけらるゝ方へ
 進上致したれば。扱も好い瓜ぢや。これは其方が手作かと
 仰せられたに依つて。中々私の手作で御ざると申たれば。
 扱も好い瓜ぢや。近頃無心なれども。客がある程に。瓜を
 ま四つ五つくれいと仰せらるゝ。何とも返事の致しやうが
 なうて。畏つて御ざると申た。某の手作で御ざると申たに
 依つて。今更なりますまいとも申されぬ。是非に及ばぬ。
 今夜彼へ行て。瓜を取つて参らうと存る。此様に又参らう
 とは知らいで。瓜島を散々に荒して置いた。瓜主が見舞は
 ぬことはあるまい。見舞たらば腹を立て。今夜は番をして
 居ることもあらう。何とやら胸騒がして氣道な。此島ぢや。

いや夕ア垣を破つて置いたが其儘ある。定て瓜主が見舞は
 なんだものであらう。見舞ふたらば此様にしてはおくまい。
 さればこそ。揚つておいた瓜蔓が其儘である。嬉し事ぢや。
 (徐々人形の側へ寄り。見付て大に肝潰す。)是は如何な事。
 不思議な事ぢや。夕ア人形を打倒して置いたが。又立ってお
 いた。是は瓜主が見舞はぬではない。合點がいかにぬ。はア。
 合點した。定て内の者の業であらう。主が息を見舞ふて来
 いと吩咐たに依つて。見舞はしたれども。人形斗り立てお
 いて。垣も其儘で戻つたものぢやらう。總じて下々は。
 どれも此様な事ぢや。殊に此案山子は。夕アよりは猶好う
 人に似た。(こゝにて仕様あり。下に居て。うそふきの面
 へ指さしなどして笑ふて。)其儘人ぢや。某をさつと見て
 居る。いや思ひ出した。いつも盆になれば。若い衆が踊
 をせらるゝ。當年は中踊に鬼が責る處をせうと云はれた。
 幸の事。此人形をば罪人にして。某が鬼になつて。責て
 見やう。わいゝ。好い杖もある。急いで責めて見やう。如
 何に罪人。地獄遠きにあらす。極樂遊なり。急げとこそ。
 (カケリ責テ)先鬼の責はこれが好からう。人形ぢやに依
 つて。責力が無い。さりながら。これも圖てあらう。某が
 罪人に取當ることもあらう。此人形を鬼にして。身共が罪

人になつて責られて見やう。幸好き引綱がある。あら悲し
 や。これ程参り候に。さのみな御責候ひそ。行けど行かれ
 ぬ死出の山。行かんとすれば引止む。止れば杖でてう
 と打つ。これは如何な事。何者やら飛礮をうつた。近邊
 に人は無いが。不思議な事ぢや。何者がうつたぞ知らぬ。
 合點が行かぬ。今此綱を引て肩にかけたればうつたが。は
 ア。扱も扱も。好う拵へた物ぢや。此綱を引けば上る。下
 ると下る。ばつたりゝゝ。扱も扱も可笑いことかな。
 百姓は賢いものぢや。これなれば氣遣な。さらばも一
 度責められて見やう。行けど行かれぬ死出の山。行かんと
 すれば引止む。止まれば。(杖にてうと打つ。)▲アト瓜
 主(面とり)かつきめ。やるまいぞ。▲盗人「わら悲
 しや。許させられゝ。

同

大 藏 流 本

▲アト「是は此邊に住居致す耕作人で御座る。某當年は瓜を作つて御座る
 が。一段と見事に出来て。此様な満足な事は御座らぬ。今日は瓜畑へ見舞
 ぶて様子を見やうと存する。先そりゝと参らう。總て瓜が色着いてか
 らは。人が取りたがるもので御座る程に。案山子をも拵へ。垣をも念をい
 れて結ぶておかうと存する。参る程に是ぢや。扱もゝ當年程瓜の見事に
 出来た事は御座らぬ。これは餘程色着いた。や。是は如何な事。人の取つ
 た跡がある。扱も憎い事で御座る。宜いゝ。今日は案山子を作つて盗ま

れぬ調儀を致さうと存する。(と云て大臣柱の方へ案山子を作る。腰桶の上へ羯鼓を置き。うそぶきの面をきせなし。折鳥帽子を着せて。杖を横に通し。水衣を着せ。右の方に杖に作り緒を付けて持たせおく。)一段と好い。はア。其儘の人ぢや。遠くから見たらば番をして居ると思ふで御座らう。扱垣を念を入れて結ぶておかう。(はい)と云ふて竹をさす真似して。)一段と好う御座る。又明日見廻に参らうと存する。▲シテ「是は此邊に住居致す者で御座る。昨日さる方へ参るとて瓜畑の側を通つて御座るが。餘り見事な瓜で御座るに依て。二ツ三ツ取つてさる方へ進上致して御座れば。扱々是非風味の能い瓜ぢや。手作かと仰せられた處で。いかにも手作の瓜で御座ると申て御座れば。手作ならば今少し矣れいと仰せられて御座る。始手作ぢやと申て。今更手作では御座らぬとは申されず。畏つた。進上致さうと御約束致して御座る。是非に及ばぬ。今から取りに行かすばなるまいか。何と致さう。いや。人違い處ぢや程に苦しい御座るまい。其上最早暮れか。つた程に。畑主も見舞ひは致すまい。先そるり〜と参らう。斯様の事を致せば面白うなつて。後には本ものになると申が。私は中々左様の事では御座らぬ。いや。参る程に此畑であつた。はア。昨日参つた時よりも垣に念をいれてせられた。さりながら。此垣の分は飛越つて参らう。やつとな。はア。扱も〜昨日参つた時よりも。一夜の事でこれは好う色着いた。さうらば取らう。是非如何な事。此は枯葉ぢや。いや。是非に好い瓜が在る。此を取らう。是非如何な事。此も又枯葉ぢや。扱々苦しい事かな。日が暮れたに依て枯葉其儘の瓜に見ゆる。是では中々取る事はなぬが。何とせうぞ。おう。それ〜。夜瓜を取るにはころびなうつが好いと申。さらば轉なうたう。はい〜。やつとな。(シテ柱の邊より人形の方へ轉び行く。)さればこそは是非に在るわ。扱も〜見事な瓜かな。さらば取らう。(取つて懐へ入れる。何事も物なば承つておかうもので御座る。最前から斯様に致いたならば。今時分は餘程取つておかうもの。殘念な事を致いた。やつとな。はア。又是にあつた。此も一段と見事な。む。旨い匂がする。(又取つて懐へ入れて。又轉びては取り〜。案山子の側へ轉び行く。)あ。悲しや〜。眞平許いて下されい。私は取るまいと申て御座れ共。是非共取つてくれいと申人が御座つて是非無う参りました。深しう取りは致しませぬ。何卒許させられて下されい。申々。夫ならば二ツ三ツ取つた瓜を返上致します

る程に。何卒許いて下されい。申々。瓜を返しする上は。御扱も御座らぬ事で御座る程に。何卒許すと只一言仰せられて被下い。申々。なぜに物を仰せられぬぞ。物を仰せられいでば迷惑に御座る。是程迄に降参致すに。物を仰せられぬは却て御卑怯で御座る。申々。是非如何な事。物を云はぬこそ道理なれ。人かと思ふたればあれは人形ぢや。扱々腹の立つ。何としてくれうぞ。お。それ〜。再参らうではなし。瓜を引立て〜のけう。はい。めり〜。はい。めり〜。(と云ふて三所程も蔓を引立つる。腹も立つ。くれをも引抜いてやらう。はい。くわら〜。はい。くわら〜。これ〜。これで一段とよい。急いで戻らう。是非如何な事。折角骨を折つて取つた瓜をすでに忘れうと致いた。さらば此を持つて歸らうと存する。(と云ふて瓜を拾ひ集め。懐へ入れ。樂屋へ入る。▲ア「昨日瓜畑へ見舞ふて御座れば。人のあつた跡が御座つたに依て。案山子を拵へ。垣をも念を入れて結ぶて御座る。心許無い程に参つて見やうと存する。先そるり〜と参らう。誠に當年は豊年とは申せ共。某が瓜の横に能う出来た瓜は御座らぬ。折角出来た物を。人に取らるゝと申は。近來殘念な事で御座る。いや。参る程に是ぢや。是非如何な事。昨日念を入れて結ぶた垣を散々に引抜いた。南無三寶。瓜蔓をも皆引立てた。扱々惜い奴で御座る。瓜を盗むのみならず。瓜蔓迄引立てると云ふは。扱々腹の立つ事で御座るが。何と致さう。いや。それ〜。瓜盗人は又参るものぢやと申に依て。今夜は某が案山子になつて居て。まつたならば捕へて。散々に打擲致さうと存する。(と云ふて人形を毀し。其如く取繕らうて腰かけて居る。▲シ「あ。假初な事を致さう事では御座らぬ。夜前の瓜を進上致して御座れば。兎角此様な風味のよい瓜は無程に。明日は私の方へ御出なされて召上られう程に。随分澤山に取つておけとの事で御座る。又今夜も取りに行かすはなるまい。はア。餘り度々の事ぢやに依て。参るはこにもなれども。是非に及ばぬ事で御座る。漸々時分もよう御座る。先そるり〜と参らう。此様な事も度重なれば願はるゝと申が。今夜は何とやら後から摺み立てらるゝ様に顔におそろしい心が出たが。あ。何事も無ければよいが。氣味の悪い事ぢや。いや。参る程に是ぢや。なう〜。嬉しや。先落着いた。畑主が見舞はぬと見えて。うれが其儘ある。これで安堵致いた。扱案山子も其儘あるか知らぬ。(人形を見て)はア。さればこそ是につくりとして

居る。やい。夜前よう某に肝を潰させたな。夜前こそおぢたれ。案山子などにおづる身共では無い、やい。(笑ふて) いや。又知らぬ者は肝を潰すまいもので御座らぬ。此細主は殊ない細工利と見ゆて。其儘の人ぢや。扱あの案山子をようく見れば。何やらに能う似たが。何にてあつたか知らぬ。おう。それく。罪人の作り物に其儘ぢや。いゑ。夫に就て思ひ出した。近日村の祭禮で御座るか。當年は鬼が罪人を責むる作り物を致さうと申て御座るか。何時も役は國取りにするに依て。自然某が鬼の役に當らないもので御座らぬ。幸人通りは無し。あの人形を罪人にして一ト責めて見やう。いや。これにくれ竹がある。此を杖にしてさらば稽古致さう。いかに罪人。急げとこそ。(一段責め)へ。何を云ふても人形ぢや所て責め力が無い。先これで鬼の稽古に濟んだが。又自然罪人の圖に當るまいものでも無い。今度はこの案山子を鬼にして罪人の稽古を致さう。幸是に好い綱がある。さらば之を持って責められて見う。あら悲しや。是程参り候に。さのみな御責め候ひそ。行かんとして引止む。留まれば杖にてうと打つ。(アト杖にてシテの肩を叩く)あゝ。痛々々。やい。此細には人が居るぞ。聊爾に飛礫をうつないやい。(方々見廻はして)はて合點の行かぬ。人音もせぬに何方から飛礫をうつたか知らぬ。今一度稽古して見う。(と云ふて綱を引き杖を上る)はア。此綱を引れば杖が上がる。又緩むれば打つ。はア。すれば身共が綱を引いて又緩めたに依て。此杖で打つたものであらう。扱々此細主は細工利ぢや。殊の外好いからくりぢや。餘り面白い。今一度引いて見う。引けば上がる。緩むれば打つ。(笑ふて)扱もく面白事ぢや。今一度稽古して見う。罪人よ。因柴の綱に繋がれて。行けど行かれぬ死出の山。行かんとして引止む。留まれば杖にてうと打つ。(アト誰の内に面を脱ぎて)▲ア「かつぎ奴。遊るまいぞ。(と云ふて杖にて叩く)▲シ「おのれは人形では無いか。▲ア「何の人形。よう瓜を取つたな。▲シ「あゝ。許いてくれい。▲ア「あの横着者。捕へてくれい。やるまいぞ。

シテ

打扮太郎冠者の通り。

アト

シテと同断。

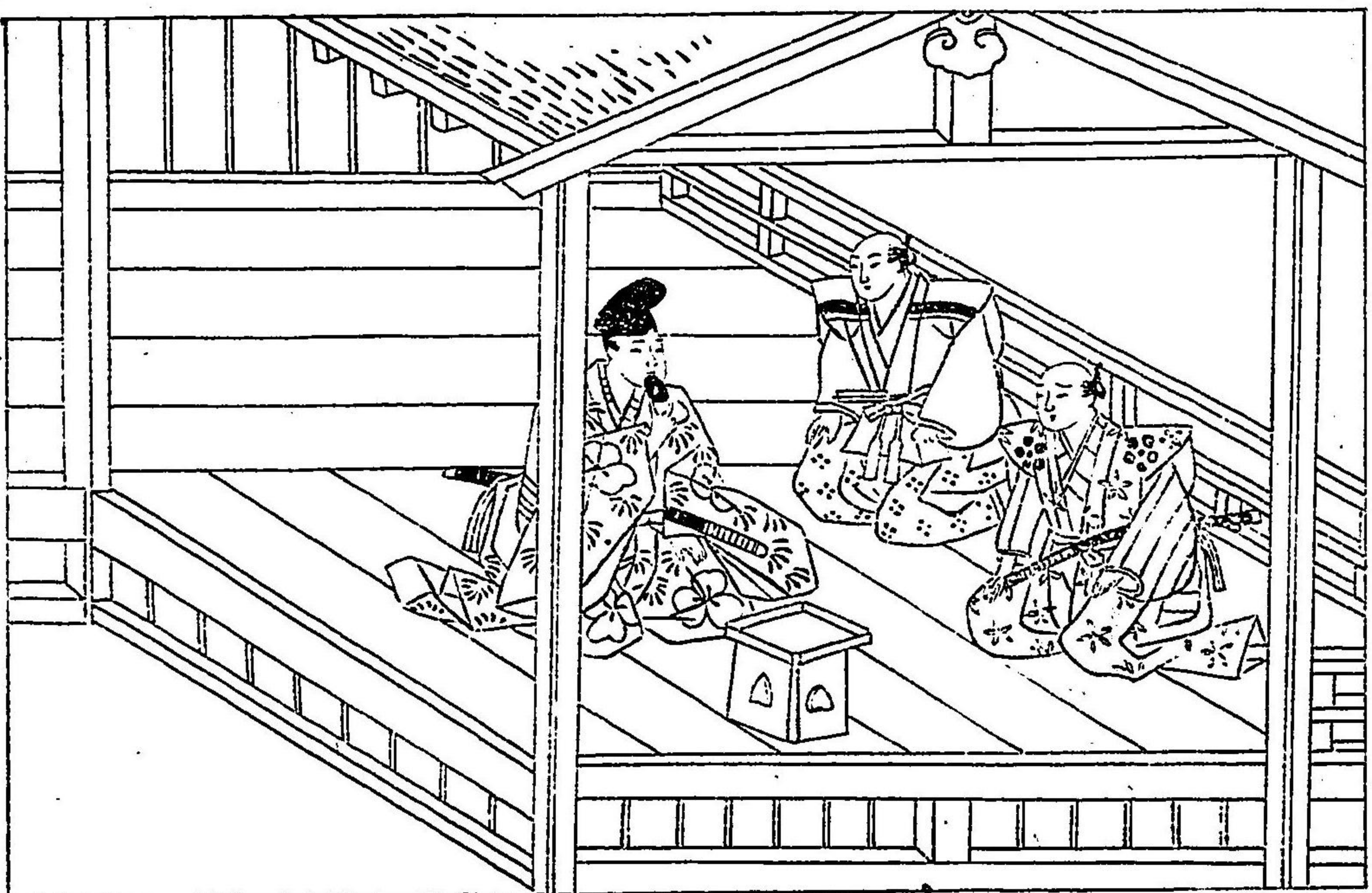
作物

腰帶。羯鼓。水衣。うそぶきの面。烏帽子。釣鉢。杖竹二本。杖竹二本。

狂言記 卷の参

一岡 太夫

▲シウト「罷出たる者は。此邊の者で御ざる。今日は最上吉日で御ざるに依て。聲殿の御出なされうとわる。先づ太郎冠者を喚び出し申付う。やい。太郎冠者あるか。▲太郎冠者「はア。御前に居ります。▲シウト「汝を喚び出すと。別の事無し。今日は最上吉日なれば。聲殿の御出なされう。管ぢや程に。清淨に掃除をせい。御出なら此方へ申せ。▲太「畏つて御ざる。(二人下に居ると聲出る)▲シテムコ「男にいとしがらる。花聲で御ざる。今日は最上吉日で御ざる程に。聲入を致さうと存る。先づ急いで参らう。道行 誠に聲入と云ふは晴な物で。人が見たがると申。定て。垣からも。窓からも。目ばかりで御ざらう。やア。参る程にこれぢや。先づ案内を申さう。物も。案内も。▲太「表に案内がある。案内とは誰様で御ざるぞ。▲ムコ「是はこれの花聲が参つたと申せ。▲太「畏つて御ざる。申々。聲殿の御出で御ざる。▲シウト「此方へ通らせられと申せ。



▲太「心得ました。申々。此方へお通なされませ。▲ムコ
 「心得た。無案内に御さる。▲シウト「やア。好うこそ御
 出なされた。待兼ました。▲ムコ「されば〜」早々参り
 ませう所に。何かと致して。遅なりました。其段は。こ
 れのお娘子にめんじて御免なされ。▲シウト「いや〜」。
 少も苦しう御ざらぬ。太郎冠者。今の言付て置た物を出せ。
 ▲太「畏つて御さる。(三方に。炭餅を載せ出す。聲の前に置
 なり。餅は黒き絹切にて丸め。ぬひ。のせおくなり。▲シ
 ウト「やア〜。これを参れ。▲ムコ「此は旨さうな物で
 御さる。さらば食ませう。餅を取り。食ふ態する。懐中へ
 入る也。扱も〜。旨い物で御さる。此は何と申物で御さ
 る。▲シウト「此は炭餅と申物で御さるが。延喜の帝の御
 寵愛なされたに依つて。官を下されて。炭餅を岡太夫とも
 申ます。則朗詠の詩にも載つて御さる。▲ムコ「扱も〜」。
 旨い物で御さる。も一つ食ませう。▲シウト「や〜」太
 郎冠者。も一つ進せ。▲太「いや。最早御ざりませぬ。▲
 シウト「はて扱。残多御さる。最早無いと申。お歸なされ
 たら。此仕様を。おなが存て居ます。こしらへたしてまゐ
 れ。▲ムコ「私は無い物は食ませぬ。夫なら歸りまして。
 宿で食ませう。最早斯う参ります。▲シウト「御さるか。

何の御馳走も無うて。残多御さる。さらば〜。好う御ざつた。▲ムコ「はア。なう〜嬉しや。嬉しや。まんまと聲入りました。逆行。先急いでかへつて。今の餅を食ませう。はやこれぢや。なう〜おなア。今歸つたわ。▲女「やア。早歸らせられたか。早う御ざつた。▲ムコ「されば〜。男殿も機嫌が好うて。馳走にあふた。夫に付、何やら珍らしい物を振舞はれたわ。▲女「夫は何で御ざつた。▲ムコ「はア。何やらであつたか。藤太夫とやらいはれたが。らうしにも載つて有るといはれた。▲女「いやいや。夫は朗詠の詩のことで御ざらう。▲ムコ「それ〜。夫を食はう。▲女「此は食はるゝ物で御ざらぬ。妾が一つ二つ覚えて居ます。云ひませう程に。其内に有るなら有ると仰せられ。▲ムコ「心得た。云ふて聞かしやれ。▲女「雞既鳴。忠臣待旦。あしたとは。かいじやう時。若かしのすざい。鶏冠菜ばし參つたか。▲ムコ「いやいや。其様な物でも無かつたわ。▲女「氣霏風梳。新柳髮。氷消浪洗。鶯若鬚。ひげにて思ひ出した。若草薙ばし參つたか。▲ムコ「いや〜。ところは己も知つて居るが。夫でも無い。▲女「池凍東頭。風度解。窓梅北面。雪封寒。梅にて思ひ出した。若梅干ばし參つたか。▲ムコ「な

う〜。酸やの〜。聞さへ酸い。それでもおやりやぬ。▲女「こしゆかしのそこには。なつとうのうさごをしくとは。納豆を肴にして。酒ばし飲ふたか。▲ムコ「酒ばし飲ふたかとは。藁で作つても男ぢやに。飲ふたかとは如何した事ぢや。汝聴かぬぞ。ふつておいたがよい。あゝ腹立や。▲女「なう〜。腹立や〜。したゝか妾が手を打た。扱も痛や〜。誠に紫塵の懶さは。蕨一手をとるといふが。紫塵。蕨人拳。手の誤り。此ことであらう。なう〜。痛いことかな。▲ムコ「やア〜。今のは何といふたぞ。も一度云ふて聞かしやれ。▲女「何ぢや。も一度云へ。紫塵の懶さは。蕨一手をとるといふとぢや。▲ムコ「それ〜。蕨で思ひ出したわ。蕨餅のことぢや。▲女「何と蕨餅と仰せらるゝか。それは妾が仕様を知つて居ます。拵へて進せうぞ。▲ムコ「なう〜。嬉しや〜。旨い物ぢやわ。好う拵へてたもれ。食ひたうてならぬ。▲女「心得ました。易い事ぢや。此方へ御ざれ〜。▲ムコ「嬉しい事ぢや。我御料は立派な人ぢや。生長い事を好う覚えて居やる。今の打擲したは堪忍さしませ。▲女「何か扱。堪忍せいでなりませうか。氣遣めさるな。▲ムコ「なう〜。いとしゃ〜。此方へおやりやおりやれ。女を負ふて這入る。

同

大藏流木

(此名乗年配ならばよし。若き者は常の如く名乗るべし。男名乗其外前に同じ。)

▲シテ「罷出たる者は。年に似合はぬ申事で御座れ共。人のいとしがら花聖で御座る。今日は最上吉日で御座るに依て。兎の方へ聖入を致さうと存ずる。先そりりく参らう。誠に某も疾う聖入を致す筈で御座るか。彼これ致いて。遅なばつて御座る。定めて男は待つて居らるゝで御座らう。いや。参る程に是ぢや。先案内を乞はう。物申。案内申。▲冠者「表に物申とある。案内とは誰ぞ。誰様で御座る。▲シ「今日は最上吉日で。聖が参つたとおしやれ。▲冠「扱は聖殿で御座るか。▲シ「中々。▲冠「其通り申ませう。先それに待たせられい。▲シ「心得た。(冠者其通り男へ云ふ。音曲聖の如く云ふて。扱通りても庭丁聖などの如く挨拶して。盃事も同断。兎盃取つて。冠者に最前言付けた物を出せと云付くる。太郎冠者盃持つて引込む。)いや申。此方の悦ばせらるゝ事が御座る。▲男「夫は如何様な事で御座る。▲シ「此間おこは。青梅を好んでたべます。▲男「夫は一段の事で御座る。(太郎冠者。三方へ梅をのせて持つて出る。)中々。聖殿。それなちと参りませい。▲シ「此をたべますか。▲男「中々。▲シ「これは忝なう御座る。それならばたべませう。扱も。これは殊の外旨い物で御座る。此様な旨い物は。途にたべた事が御座らぬ。此は先何と申物で御座るぞ。▲男「夫は煎餅で御座るが。定めて殿しい物の様に思召されうが。延喜の御門の御好きで。賞訖なされ。則宜を下されて。岡太夫とも申まして。朗詠の詩にも載つてある物で御座る。御氣に入つたならば代へて参りませう。▲シ「此は好い物で御座る。夫ならば代へませう。▲男「太郎冠者代へて進ぜい。▲冠「最早御座りませぬ。▲男「何ぢや。無い。▲冠「中々。▲男「扱々夫は不調法な。近來氣の毒な事を致した。▲シ「いや。少しも苦しう御座らぬ。惣て私の癖で。無い物はたべませぬ。▲男「近來残り多し事を致した。さりながら。若し御氣に入つたならば。おこが拵へやうを存じて居ります程に。戻らせられたならば。拵へさせて参りませい。▲シ「やア。何と仰せらるゝ。此拵へやうを。おこが能う覺て居ると仰せらるゝか。▲男「中々。其通りで御座る。▲シ「夫

は一段の事で御座る。戻つたならば。早々拵へさせてたべませう。▲男「夫が好う御座らう。▲シ「扱扱は。もう斯う参りませう。▲男「御座るか。▲シ「さらば。▲男「ようおりやつた。▲シ「はア。なう。嬉しや。まんまと聖入を致した。先念いで罷歸らう。定めて女共が。今か〜と待つて居るで御座らう。戻つて此様子を咄いたならば。嗚呼ぶで御座らう。いや。何彼と云ふ内に戻り着いた。いや。なう。女共。居りやるか。今戻つておりやるわ。▲女「やア。是のは戻らせられて御座るか。▲シ「中々今戻つておりやる。▲女「定めて父様の悦ばせられたで御座らう。▲シ「殊ない悦であつた。▲女「左様で御座らう。扱あのお父様は。人に珍しい物を振舞ふ事が好きで御座るか。此方は何も珍しい物は参りませぬか。▲シ「あ。夫に付て。何やら珍らしいものを振舞はれた。▲女「夫は何で御座るぞ。▲シ「あ。何とやらであつた。其方の拵へ様をよう知つて居るとおしやつた。早う拵へてくれさしめ。▲女「夫は何で御座るぞ。名を仰せられたならば。拵へて進ませう。▲シ「あ。何とやら云ふ物であつた。▲女「何で御座らうぞ。▲シ「おう。それ〜。らう〜とやら云はれた。▲女「らう〜と云ふ物は御座らぬが。もし朗詠の詩では御座らぬか。▲シ「中々。其朗詠の詩であつた。夫を拵へて喚ばさしめ。▲女「是は如何な事。此は物の本の名で。喚ぶ物では御座らぬが。此朗詠の詩の中にある物では御座らぬか。▲シ「お。定めて其様な事であらう。▲女「夫ならば。常々父様の讀ませらるゝを承つて。少しは覺て居ます。これを申ませう程に。此内にあるならば有ると。早う仰せられい。▲シ「心得た。▲女「池凍東頭風渡解。窓梅北面雪封寒。此窓の梅で思出しました。梅干ばし参つたか。▲シ「なう酸や。其様な酸い物ではおりない。▲女「此では御座らぬか。▲シ「中々。▲女「氣萎風極。新柳髮。氷消浪洗。窓苦。此讀で思ひ出しました。若し草解ばし参つたか。▲シ「なう。苦や。其様な苦い物でも無い。旨い物でおりやる。▲女「夫ならば。雞既鳴忠臣待。且。あしたとは。開場の時。貝の酢盤に。雞冠海苔ばし参つたか。▲シ「其様な物でもおり無い。▲女「白ばん山の上には。りやうばうの雲たなびき。こしゆかいの底に。なつとりの砂をしく。白ばんとは白いおだいの事。りやうばうのおおへ。白い飯ばし参つたか。▲シ「こゝな者は。朝夕喰ふ飯を忘るゝと云ふ事があるもの

か。▲女「しゆかいとは好い酒の事。納豆を着にして。好い酒ばし喰らふたぢ。▲シ「何ぢや。喰らふたか。▲女「中々。▲シ「やい。こゝな者。▲女「何事で御座る。▲シ「菓で束れても男は男ぢやに。真人にむかふて喰らふたかと云ふ事があるものか。▲女「ても。此方の様に。喰らふた物を忘るゝと云ふ事があるもので御座るか。▲シ「おのれ情い奴の。惣別此間甘やかいておけば方量も無い。おのれ散々に打擲してやう。情い奴の。▲女「あゝ。いたく。扱もく。痛い事かな。餘り堪へ難に手であけたれば。此手をしたまかに打たれた。誠に。紫塵。紫塵。人拳。手。と申す。此事で御座らう。あゝ。痛々々。▲シ「いや。なう。今そなたは何と云ふたぞ。▲女「妾は知りませぬ。▲シ「其様にすれば事を云はすとも。今の云ふて聞かさしめ。▲女「紫塵。紫塵。人拳。手。といふ事よ。▲シ「お。其餅であつた。▲女「何ぢや。紫餅ぢやと仰せらるゝか。▲シ「中々。▲女「夫ならば。妾が拵へやうなう覺て居ます程に。拵へて進ませう。此方へ御され。▲シ「心得た。シテ聲 拵付紅段。拵目。紫袍。折烏帽子。小き刀。扇子。男 色無段。拵目。紫袍(村かける)。折烏帽子。小き刀。扇子。但翁無之時は長上下。

太郎冠者 常之通り。
女 常の通り。
作物 白木三方一。木のた少々。腰桶の蓋。

二 竹子争

▲初アト「罷出たる者は。此邊に住居致す者で御ざる。某は畑を數多持て御ざるが。當年は。某の畑へ。隣の籾から根がさいて。竹子がきたと申。今日は参り。少竹の子を取て参らうと存る。誠に世の中に。蒔た物の生るは尤で御ざる。蒔ぬ物の生ると云ふことは。調法な事ぢや。参る程に

これぢや。扱もく。見事な竹の子が出来た。先これは折りませう。ばんく。扱もく。見事なことぢや。▲シテ「罷出たる者は。此邊の者で御ざる。某籾を數多持て御ざるが。當年は。竹の子が。大分出来て御ざる。今日は少籾へ参り。垣なども結はせ。人の取らぬやうに致さうと存する。總じて。何時とても。竹の子時分には。人が取たがることで御ざる。やア。参る程にこれぢや。扱もく。夥しう出来た。▲初ア「ばんく。▲シ「これ。何故に其竹の子を取らします。▲初ア「やア。お出やつたよ。何と。此竹の子を何故に取る。▲シ「中々。▲初ア「是は身共が畑へ生えたに依て取る。我御料は構ひそ。▲シ「尤畑は其方のなれ共。竹の根のさいたは。此方の籾からぢやに依て。取る事はならぬ。▲初ア「我御料は無理な事を云ふ。如何でも身共が畑に生えた故。取らねばならぬ。拵やるな。▲シ「お主はていと取るか。▲初ア「ていと云ふて何とする。▲シ「目に物見せう。▲初ア「夫は誰か。▲シ「身どもが。▲初ア「世方が物見せだては。おいてくれい。▲シ「悔むな。▲初ア「悔むことはおりない。▲シ「汝は情い奴の。▲初ア「やれ出合。▲後アト「やい。これは何事ぢや。先づ待やれ。是は如何した事ぢやぞ。▲シ「やア。好い處

へ御出やつた。先づお主も聞いてたもれ。彼が。身共が筭
 を取に依て。取らすまいと云へば。是非取らうと云ふ故に
 追廻す。取らぬやうに云ふたもれ。▲後ア「尤ぢや。其
 通いふてやらう。夫に待しめ。なう〜我御料は。何故に
 隣の筭を取ぞ。▲初ア「やア。其方は好い處へ出さしまし
 た。先聞いてくれさせませ。隣の竹の子を取りは致さぬ。
 身共が畑に生えた筭を取れば。取らすまいと云ふに依つて
 の事でありやる。▲後ア「扱は。我御料が畑に出来たか。▲
 初ア「中々。▲後ア「これは彼がのが無理ぢや。其通り云は
 う。今の聞かしましたか。▲シ「中々。聞た。尤畑へ生え
 たれども。根をさいたは此方の藪からなれば。竹の子を取
 らすまいと云ふことぢや。▲後ア「尤さうなれども。さう
 は云はれませ。▲シ「云はれませ。お主頼じ事では無し。退
 しめ。▲後ア「先づ待やれ。其通云ふて見やう。今のを聞
 かせられたか。▲初ア「夫は無理な事を云ふ。尤根をさす處
 は隣からなれども。畑が身共が畑ぢや。取らねばならぬ。
 夫ならば。今から根のさぬやうにせいと云ふてたもれ。
 ▲後ア「なう〜。それならば。今から根のさぬやうに
 してたもれと云はる〜。▲シ「扱も〜。云へば云はる〜
 物ぢや。夫ならば身共も又。彼が方から取物が有る。取て

たもれ。▲後ア「夫は何ぢや。▲シ「過日彼が牛が。身共
 が厩で子を生たなれども。身共は律義に。親牛も。子も。
 皆ひかせてやつた。それならば。其時の牛の子は。此方へ
 おこせと云ふてたもれ。▲後ア「心得た。なう〜。最前
 からの。其方の理分にしてやらう。其代りに。牛の子を
 おこせいと云ふ。▲初ア「扱も〜。云へば云はる〜物か
 な。さりながら。汝も思ふて見やれ。牛の子と筭とは。一
 口には云はれませ。▲後ア「さや〜。兎角身共が思ふに
 は。此様に互に云ふて埒が明ぬ。此上は何ぞ勝負をして。
 其勝負に依て。牛の子を遣る物か。遣らぬものかにせう。
 何とわらう。▲初ア「して。勝負には何を致さう。▲後ア「
 されば何が好からうぞ。▲初ア「身共は歌を詠う。彼も詠か
 問うてたもれ。▲後ア「なう〜。これでは埒が明ぬに依
 つて。勝負に歌を詠うと云ふが。其方も詠か。▲シ「彼の
 人の歌は。終に承らぬ。それなら。先づ彼から詠めと云
 ふて下され。▲後ア「さア〜。急で詠ましめ。▲初ア「斯
 うも御ざらうか。▲後ア「何との。▲初ア「我畑へ。隣の竹
 の。根をさいて。思はず知らぬ。竹の子を取る。▲後ア「
 一段と出来た。▲初ア「彼にも詠めとおしやれ。▲後ア「さ
 ア〜。急で詠ましめ。▲シ「斯うも御ざらうか。▲後ア

「何との。▲シ「我宿で。隣の牛の子を生みて。思はず知らず。牛の子を取る。▲後ア「一段出来た。乍去。これも同じやうな事ぢや。重て何ぞ勝負をしやれ。▲シ「それならば。此度は。角力を行らうといふてたもれ。▲後ア「なう。角力を行らうと云ふわ。▲初ア「いかにも行りませう。▲後ア「それならばお出やれ。▲シ「さア。行司をめされ。▲後ア「心得た。お手つ。▲二人「いや。く。▲シ「勝たぞ。▲初ア「なう。彼のやうに。棒でうちまはする角力は。終に取た事が御ざらぬ。棒を下に置て行れといふてたもれ。▲後ア「なう。其棒を下に置て。お行りやれ。▲シ「いや。此は。身共の一方の足ぢやに依つて。下に置くことはならぬといやれ。▲後ア「なう。下に置事はならぬと云ふわ。兎角彼の棒に取付ば好い程に。棒をお取りやれ。▲初ア「心得た。夫ならば。も一奉行らうとお云やれ。▲後ア「も一奉行らうと云はる。わ。▲シ「いかにも行りませう。さア。行司をなされ。▲後ア「お手つ。▲初ア「やア。お手勝たぞ。▲シ「やい。角力は三番の物ぢや。やるまゝぞ。其足を返せ。」

同筭

大藏流本

▲アト「是は此邊に住居致す耕作人で御座る。此間久しう畑へ見舞ませぬに依て。今日に見廻りに参らうと存する。先ぞろり。と参らう。誠に耕作と申ものは。つとといそがしいもので御座る。折々見舞ふて草などを取り。色々世話を致さればならぬ事で御座る。いや参る程に此が私の畑で御座る。扱も。此畑の様に作りつける程のものが。よう出来る畑は御座らぬ。いや。あれ隣の敷から根をさいて。見事な筍が上つた。さらば此を取て戻り。食取致さうと存する。はい。はい。はい。と云ふてぬく内に。シテ一の松にて名乗る。▲シテ「此は此邊に住居致す者で御座る。某箆を持って御座るが。當年は夥しう筍が上つて御座るに依て。今日は見舞に参らうと存する。先ぞろり。と参らう。誠に竹の子に限つて人の取りたがるもので御座るに依て。今日は見舞ふて。垣などを念を入れて結ふておかうと存する。是は如何な事。さればこそ申さぬ事か。早何者やら筍を抜く音が致す。いや。あれは誰ぢや。なう。やあら。我御料はむざとした。なぞに身共が竹の子を取るぞ。▲ア「是は如何な事。御見やれ。某が畑に生えた竹の子を取るが。むざとした事をおしやる。と云ふて又ぬく。▲シ「ああ。これ。扱々我御料はむざとした。成程畑はそなたの畑なれども。もと某が敷から根がさいて。それ故に出来た筍ぢや。すればもとは。この物ぢや程に。遺る事はならぬ。▲ア「愈無理な事を云ふ人ぢや。成程根はその敷からさいたでもあらうが。畑は。この畑ぢや程に取らればならぬ。▲シ「いかにその畑なりとも。畑へも種を蒔て。こそ物は出来れ。其竹の種は。この敷ぢや程に。取つたのを皆返さしめ。▲ア「いや。何程云ふても返す事はならぬ。▲シ「すればどうあつても返すまいか。▲ア「おんでも無い事。▲シ「おのれ情い奴の。散々に打擲してやらう。情い奴の。▲ア「これは何とするぞ。出合へ。▲シ「済人。いや。なう。そなた達は何事なわつばと云ふぞ。▲シ「情い奴で御座る。そこを退せられ。彼奴を打擲致します。▲シ「いや。身共が出ては聊稱はさせぬ。先これは何とした事でおしやるぞ。▲シ「夫ならば聞いて被下い。私が筍を彼奴が取りましたに依て。それを戻せと申せば。戻すまい

と申に依ての事で御座る。何卒此方取つて下されい。▲濟「其通り云はう。先それに待たしめ。▲シ「心得ました。▲濟「いや。これ／＼。そなたは何として彼奴が等を取つて返すまいとは云ふぞ。▲ア「先此方も聞いて被下い。私が如へ生むた筈で御座るに依て取ります。あれが竹の子では御座らぬ程に。返す事はならぬといふて下されい。▲濟「心得た。今のを聞かしましたか。▲シ「中々承つて御座る。此方もよう思ふても見させられい。成程如は彼奴が如では御座れ共。もと私の飯から根がさいて生むた筈で御座る。いかな如でも種を蒔いで物が出来るもので御座るぞ。其上あの飯も年貢が出ますに依て。一本もやる事はなりませぬと云ふて被下い。▲濟「心得た。今のを聞きやつたか。▲ア「中々承つて御座る。彼奴が飯から年貢を出しますれば。私も如年貢を出します。是以て同じ事で御座る。其上彼奴が左様に申さば。外に申分が御座る。▲濟「夫は又如何様な事ぢや。▲ア「先度私の牛が放れて。あの者のまや(賊)へ参つて子を産んで御座るを。承ると其まゝ参つて。親子共に連れて参らうと申て御座れば。いや／＼。この庭へ来て産だちぢやに依て。親牛は戻さうが。子に戻さぬと申て。取つて返しませぬ。夫ならば筈を返しませう程に。牛の子を戻せと仰せられて下されい。▲濟「是は尤ぢや。なう／＼。今のお聞きやつたか。▲シ「中々承りました。いやア。何と牛の子と筈と同じやうに云はるゝもので御座るぞ。夫は最早事済んだ事で御座る程に。筈をば皆戻せと云ふて取つて被下い。▲濟「いや。さう云ふては濟むまい。身共が思ふは何ぞ勝負をして。勝負に依つて牛の子を返すとも。筈をとるともしたならはよからう。▲シ「いや。勝負には及げぬ事で御座る。▲濟「いや。勝負をせれば其方の負けになるぞ。▲シ「夫ならば致しませうが。あれも致すか聞ふて被下い。▲濟「心得た。これ／＼。是では何とも濟まぬに依て。何ぞ勝負をして。勝負に依て牛の子を取る共。筈を返す共したならばよからう。▲ア「是は一段と好う御座りませう。▲濟「扱勝負は何をするぞ。▲ア「歌をよませうが。あれもよむか聞ふて被下い。▲濟「心得た。これ／＼。勝負には何をなさると云ふたれば。歌をよまうと云ふが。其方もよむか。▲シ「あれがよまは私もよませう。先あれから先へよめと仰せられい。▲濟「心得た。先そなたからよませしめ。▲ア「何とて御座らうぞ。▲濟「されば何とてあらうぞ。▲ア「斯うも御座らうか。▲濟「何とぢや。

▲ア「我知へ。(濟人吟する)隣の竹が根をさして。(濟人吟する)思ひもよらぬ筈をとる。と致しませう。▲濟「是は一段とよい。まア／＼。そなたもよませしめ。▲シ「何とて御座らうぞ。▲濟「されば何とてあらうぞ。▲シ「斯うも御座らうか。▲濟「はや出たか。▲シ「我まやへ。(濟人吟する)隣の牛が子をうみて。(濟人吟する)思はず知らず牛の子をとると致しませう。▲濟「是も一段とよい。いや。なう／＼。是ではまた分らぬ程に。今一ト勝負さしめ。▲シ「夫ならば今度は相撲をとります。あれもとるか聞ふて被下い。▲濟「心得た。これ／＼。今一勝負と云へば。相撲をとらうといふが。其方もとるか。▲ア「中々とりませう程に。これへ出いと仰せられい。▲濟「心得た。とらうと云ふ程にあれへお出やれ。▲シ「心得ました。▲濟「身共が行司をしてやらう。アのおて。(と云ふて合すると。ちんば棒にて追ひ走りし。いつて悦ぶ)▲シ「申々。棒を持ってると申事があるもので御座るか。棒をおいてとれと仰せられい。▲濟「心得た。なう／＼。其棒をおいてとらしめと云ふわ。▲ア「いやア。私に見させらるゝ通り被で御座つて。則此棒が私の足で御座る。足をおいてとる事はならぬと仰せられい。▲濟「是は尤ぢや。(其通りを云ふ)▲シ「いかに被ぢやと申て。棒を持ってとらるゝもので御座るぞ。いや。よい事を思ひよりました。今一番とらうと仰せられて被下い。▲濟「心得た。今一番とらうと云ふ。▲ア「心得ました。▲濟「又某が行司をしてやらう。アのおて。▲二人「やア／＼。(と云ふて棒にて追廻はしたゞく所を。棒をとつて引廻し。打倒いて。棒を持って。勝たぞ／＼。卑法もの。其身共の足をばおいて行け。やる事はならぬぞ／＼。やい／＼。足が無うてはありかれわ。其足をば戻いてくれい。あの横着者。どちへ行くぞ。捕へてくれい。やるまいぞ／＼。(と云ふておざり／＼して。立てちんばをひき／＼。追入る)

シテ 太郎冠者打拵。
 アト シテと同斷。
 濟人 主打拵。

三 朝比奈

▲エンマ（次第にて出る）ちちくの主閻魔王。ろくろい
にいとや出うよ。調これは地獄の主閻魔王です。今程は
人間が賢うなつて。八宗九宗に法を分け。彌陀の浄土へ。
ぞろりくとぞろりくと依つて。地獄のがつし以外の外
な。夫故此閻大魔王が。六道の辻へ出。罪人が来てあるな
ら。地獄へ攻落さうと存る。道行。ふし。住なれし地獄の里を
立出て。足に任せて行く程に。六道の辻に着にけり。
急ぐ程に。これは六道の辻に着た。此處に待つて居
て。罪人が来たらば。地獄へ攻落してくれう。▲シテ朝比
奈一セイ「ちからもやうく朝比奈は。冥土へとてこそ急
ぎけれ。調これは朝比奈の三郎何某。思はずも無常の風
にさそはれ。冥土へ越く。そろりくと参らう。▲オニ「は
ア人臭い。罪人が来たさうな。さればこそ罪人が来た。い
かに罪人。急げくとこそ（責一段あり）。▲シテ「やい
く。最前より某が眼の前を。ちらりくとするは。何者
ぢや。▲オニ「これは地獄の主閻魔王じや。▲シテ「扱
もく。痛はしい態かな。娑婆で聞いたは。珠の冠に石の



帯。四邊も輝く態と聞いたが。さうもおりないよ。▲オニ「されば其古は。金銀ちりばめ。輝くやうな態であつたが。今は人間が賢うて。彌陀の淨土へ。ぞろり〜とぞろめくにより。地獄のがつし以の外な。然あるに依て。珠の冠。何も彼も。短尺の代にやつて。一色も無い。只今汝を責めて。地獄へ責落してくれうぞ。▲シ「何程もお責せい。▲オニ「いかに罪人。急げ〜とこそ。責一段あり。足を杖にてこち。棒を揺りなどする也。やい〜。此閻魔王が。これ程に責るに。きつくりとせぬは何者ぢや。▲シテ「身共を知らぬか。朝比奈の三郎何某ぢや。▲オニ「何ぢや。朝比奈ぢや。あつたら骨折つた。責まいものを。乍去。朝比奈と聞て責ぬも口惜し。も一度責て。地獄へ落してくれうぞ。いかに罪人急げ〜とこそ。責一段あり。此内にシテ棒にてこかす。シテ「お責せい。▲オニ「いや〜。最早責とひない。やア好い事思ひ出した。汝は和田軍の様子知つて居やう。語て聞かせ。▲シテ「おう中々。手にかけて知て居る。語らう程に。床机持て来い。▲オニ「心得た。さア〜。語れ〜。(鬼腰掛て居るを突退る。)搦魔閻王。わたりの強い奴ぢや。▲シテ「やい〜。此れは其時手柄をした。七つ道具ぢや。▲オニ「さう有か。生臭い。

▲シテ「語つて聞かさう。聞け。▲オニ「語れ〜。聞くぞ。▲シテ「抑和田軍の起は。住柄の平太。碓氷峠にて君に奪はれ。一度ならず。三度まで。鎌倉を引渡さる。一門九十三騎。平太繩目の耻を雪がんと。親にて候義盛。白髪頭に甲を戴けば。一門残らず。鎌倉殿の大御所の。南門に押寄せ。関を哄と作る。ふりこぼりがつぬき。さげ切。此朝比奈が人つふて。目を驚す處に。義盛使をたて。何とて朝比奈は。門破らぬぞ。急ぎ破れとありしかば。畏つて候と。頓馬より飛で居り。ゆらり〜と立出る。内には。すは朝比奈こそ。門破れと。大きなかうりやうに。大釘鎧を。打ぬき〜しけるは。劔の山の如くなり。朝比奈何程のことや有るべきぞと。門の扉に手をかけ。ゑいやと押せば。ゑいやと抱ゆ。ゑいや〜と押したりしは。大地震の如くなり。されども朝比奈。力や勝ちけん。門扉おし落し。内なる武者三十騎。腰に打れて死したりしは。其儘鎧を仕たるが如くなり。▲オニ「あゝ。其鎧が。一頬張〜たいなア。▲シテ「其時ならば申さうものを。かゝりし處に。御所の武士に。五十嵐の小文次と名乗て。朝比奈が鎧をかへさんと。目掛けてかゝる。朝比奈何程の事の有るべきと思ひ。彼の小文次を取て引寄せ。鞍の前輪に押當て。

かはあつて寝るべき。中にも五月二日に鎌倉の門に押寄せ。一度に哄と闘をつくる。▲ア「ほう。▲シ」されば古郡がツムぬき。さげ切。敵を知らず。斯う申朝比奈が人飛脚。目を驚かす所に。親にて候我儀使者をたて。何とて朝比奈には門破らぬぞ。急ぎ破れとありしかば。長つて候とて。頓て馬より飛んで下り。ゆらりくと立懸ゆる。内よりも。すは朝比奈こそ門破れ。破られては叶はじと。八本の高梁をかけ。大針（針は釘の誤ならん）大梁を打抜きししたりしは。たゞさながら鯉の山の如くにてありしよな。▲ア「ほう。▲シ」されども朝比奈何程の事の有るべきと思ひ。門の扉に手をかけ。さらりくと撫づれば。鐵は忽湯となつて流れぬ。扱其後金剛力士の力を出し。門の扉に手をかけ。ぬいやくと押せば内よりもぬいやくとゆ。ぬいやくと押せばぬいやくと抱へ。ぬいやくとゆといふて押したりしは。大地震の如くゆらめいてありしよな。▲ア「ほう。▲シ」されども朝比奈が力やまさりけん。八本の高梁も折れ。門扉押落し。内なる武者三十騎ばかりおしに打たれて死したりしは。只さながら鮭押したる如くにてありしよな。▲ア「ほう。其鮭が。一トほほほり頑張りたいなア。▲シ」おま。参らせたうそ候へ。▲ア「面白い。語れ」。▲シ「かまつし處に。御所中の共に。五十嵐小文次といつし者。朝比奈が置返さんと目掛けてかかる。朝比奈心に思ふやう。何程の事のあるべきと思ひ。彼の小文次を取つて引寄せ。鞍の前輪に押付け。左へはきり。右へはきり。きりきりきり。ムツと押廻してありしよな。▲ア「ほう。▲シ」もう和田殿の談聞きたうない。▲シ「もそつとお聞きそい。▲ア」はて。聞きたくも無いと云ふに。▲シ「夫ならば淨土への道しるべをせい。▲ア」此間寛大王をさへ仕度いままにする朝比奈ぢやものを。已が行度からう方へ行かう迄よ。▲シ「さう云ふは道しるべをすまいと云ふ事か。▲ア「おんでも無い事。▲シ」夫は誠か。▲ア「誠ぢや。▲シ」眞實か。▲ア「一定ぢや。▲シ」朝比奈腹にすゑか。はて。熊手鎌鎌金持棒を持たする仲間の無いままに。間寛王に。すつしと持たせて朝比奈は。淨土へとてこと急ぎけれ。

シテ朝比奈 大島類鬘斗目。大口。白練つば折。
アト間寛大王 若付大格子類厚板。狂言袴括る。
白鉢巻。さばき髪。腰帯。色入厚板坪折。扇子。杖竹。扇

子。刀佩く。大竹を持つ。武悪の面。鬼頭巾。
但注被の肩取りてする。其時は若付厚板よし。

四 暇の袋

▲シテ男「罷出たる者は。此邊の者で御さる。某幼馴染の女が御さるが。見目形見苦うて。朝寐を致し。たま〜起て大茶を飲べ。人事を云ひ。殊に大酒まで飲べて。酔狂を致し。何共迷惑に存ず。何時ぞは去りたい〜と存る所に。昨日より親里へ歸つて御さる程に。此暇の状を持せてやつて。去らうと存る。先づ太郎冠者を喚び出し申付う。やい〜太郎冠者。在るかやい。▲太「はア。▲シテ」居たか。▲太「お前に居ります。▲シテ」汝喚び出すこと。別のことでない。其方も知る通。女共がわ〜しうて。何共堪忍ならぬ。夫故暇をやる程に。汝は此状を持て行て来い。▲太「畏つて御さるが。乍去。彼は常のかみ様とは異まして御さる。私を好いとは仰せられます。御許容されませ。▲シテ「さや〜苦しうな。少とも氣遣せず共。返事には及ぬとらふて。置て来い。▲太「左様では御さるが。餘の御事は何なりとも致しませう。此事に於ては。御許容されませ。

左へはさり、右へはさり、さりとて押廻してありしよな。(閻魔を引廻す)▲オニ「あ、最早、和田軍聞きたう無い。▲シテ「もそつと語らう。▲オニ「いや聞きたうない。▲シテ「それなら。浄土への道案内せよ。▲オニ「此閻魔王さへ儘にする程に、何方へなりとも。行たい方へ行うまでよ。▲シテ「それは誠か。▲オニ「誠ぢや。▲シテ「眞實か。▲オニ「眞實ぢや。▲シテ「あさひなはらをするか。熊手ないがま(薙鎌)鐵擲棒を持たする中間の無い儘に。閻魔王に、すつしと持たせて朝比奈は。浄土へとてこそ急ぎけれ。

同

大藏流本

▲アト「地獄の主閻魔王。ろさい(遊撃)にいさや出うよ。是は地獄の主閻魔王です。當代は人間が利根になり。八宗九宗に宗跡を分け。極樂へそり、とそり、と依て。地獄の餓死以外の外な。さるに依て。今日に閻魔王自身六道の辻に出。よからう罪人も通らば。地獄へ責め落さばやと存する。(打切ヤ)住願れし地獄の里を立出て。足に任せて行く程に。六道の辻に着にけり。急ぐ間六道の辻に着いた。先此處に休らひ。よからう罪人も通らば。地獄へ責め落さうと存する。▲シテ「(セイ)「力もやう。朝比奈は。冥土へとてこそ急ぎけれ。是は安樂に隠れも無い朝比奈の三郎義秀です。われ思はずも無常の風にさばれ。只今冥土へ赴く。先そり、と参らうと存する。▲ア「くん。いや。よい罪人が来た。と見ぬて人奥うなつた。何處許ぢや知らぬ。(互に行逢ふて)いや。是へ能い罪人が来た。急いで地獄へ責め落さうと存する。いかに罪人。急げとこそ。(一段責めて)やい。何事ぢや。▲シ「某が目の前をらりくと

ちらめくは何者ぢや。▲ア「身共を得知らぬか。▲シ「いや。何共知らぬ。▲ア「是は地獄の主閻魔王様ぢやはい。▲シ「何ぢや。地獄の主閻魔王ぢや。▲ア「中々。▲シ「おらいとうしの態やな。娑婆にて聞てありしは。地獄主閻魔王こそ。珠の冠を着。石の帯をし。金銀をちりばめ。四邊も輝く態と聞てありしが。一向さうもおりないよ。▲ア「おう。其古は珠の冠を着。石の帯をし。金銀をちりばめ。四邊も輝く態があつたが。當代は人間が利根になり。八宗九宗に宗跡を分け。極樂へそり、とそり、と依て。地獄の餓死以外の外な。さるに依て。今日に閻魔王自身六道の辻に出。罪人も通らば地獄へ責め落さうと思ふ處へ。おのれ来たに。今一責めて地獄へ責め落すぞ。▲シ「おう。如何程なりとおせめ。▲ア「責めいでは。夫地獄遠きにあらす。極樂道なり。いかに罪人急げとこそ。(又一段責めて)やい。何事ぢや。此閻魔王が秘術盡して責むれ共ゆつたりとせぬ。おのれは何者ぢや。▲シ「某を得知らぬか。▲ア「いや。何共知らぬ。▲シ「娑婆に隠れも無い朝比奈の三郎義秀よ。▲ア「何ぢや。朝比奈三郎義秀ぢや。▲シ「中々。▲ア「牛に喰ばれたらされた朝比奈と聞いたら責めまいものを。朝比奈と聞て責めれば地獄の名折ぢや。今一責めて地獄へ責め落すぞ。▲シ「いか程なりとお責めそい。▲ア「いかに朝比奈急げとこそ。(又一段責めて)竹に取つき中返りする。(シ)「閻魔王。もそつとおせめせい。▲ア「もう責めたう無い。▲シ「もそつとお責めせいと云ふに。▲シ「はて。もう責めたう無いと云ふに。▲シ「さうもおりやうまい。▲ア「いや。思ひ出た事がある。やい。▲シ「何事ぢや。▲ア「此土へ来る程の者に和田戦の起を尋ねれども。眞實で定説が知らぬ。汝眞の朝比奈ならば。和田戦の起を知つて居るであらう。語つて聞かせい。▲シ「馬い事。語つて聞かせう。床机を持って。▲ア「心得た。(床机にかけて)さア。語れ。▲シ「退きな。▲ア「何とする。▲シ「下に居よ。▲ア「扱々閻魔王あたりの荒い罪人ぢや。▲シ「此を見よ。▲ア「むい。醒い。夫は何ぢや。▲シ「其時娑婆で。柄なした道具ぢや。▲ア「おう。さう見ぬて珠の外醒い。早う語れ。▲シ「仰和田戦の起を尋ねるに。荏柄の平太胤長といつし者。碓氷峠にて君に奪はれ。一度ならず兩三度まで鎌倉を引渡さる。和田の一門九十三騎。平太が繩目の耻を雪がんとて。親にて候義盛。白髪頭に甲を取つて戴けば。誰

かはあつて残るべき。中にも五月二日に鎌倉の門に押寄せ。一度に映と関をつくる。▲ア「ほう。▲シ」されば古郡がつゝぬき。さげ切。敵を知らず。斯う申朝比奈が人飛礮。目を驚かす所に。親にて候義盛使者をたて。何とて朝比奈には門破らぬぞ。急ぎ破れとありしかば。畏つて候とて。頓て馬より飛んで下り。ゆらりゆらりと立越ゆる。内より。すは朝比奈こそ門破れ。破られては叶はじと。八木の高梁をかけ。大針（針は釘の誤ならん）大梁を打抜きししたりしは。たゞながら銀の山の如くにてありしよな。▲ア「ほう。▲シ」されども朝比奈何程の事の有るべきと思ひ。門の扉に手をかけ。さらり／＼と撫れば。鐵は忽湯となつて流れぬ。扱其後金剛力士の力を出し。門の扉に手をかけ。ふいやと押せば内よりふいやとかふゆ。ふいやと押せばふいやと抱へ。ふいやふいやといふて押したりしは。大地震の如くゆらめいてありしよな。▲ア「ほう。▲シ」されども朝比奈が力やまさりけん。八木の高梁も折れ。門扉押落し。内なる武者三十騎ばかりおしに打たれて死したりしは。只ながら鮮押したる如くにてありしよな。▲ア「ほう。其誰がトほほほり頑強りたいなア。▲シ」おま。参らせたり候へ。▲ア「面白い。語れ」。▲シ「か。つし處に。御所中の共に。五十嵐小文次といつし者。朝比奈が鐵返さんと目掛けてかかる。朝比奈心に思ふやう。何程の事のあるべきと思ひ。彼の小文次を取つて引寄せ。鞍の前輪に押付け。左へはきり。右へはきり。きりきりきりムツと押しはしてありしよな。▲ア「はア。もう和田戦の談聞きたうない。▲シ」もそつとお聞きせい。▲ア「はて。聞きたくも無いと云ふに。▲シ」夫ならば淨土への道しるべなせい。▲ア「此間寛大王をさへ仕度いままにする朝比奈ちやものを。已が行度からう方へ行かう迄よ。▲シ」さう云ふは道しるべなすまいと云ふ事か。▲ア「おんでも無い事。▲シ」夫は誠か。▲ア「誠ぢや。▲シ」眞實か。▲ア「一定ぢや。▲シ」朝比奈腹にすゑか。ねて。熊手権鎌金持持たる仲間の無いまに。間寛王に。すつしと持たせて朝比奈は。淨土へとて急ぎけれ。

シテ朝比奈

大島類鬘斗目。大口。白練つば折。

アト間寛大王

着付大格于類厚板。狂言袴括る。白鉢巻。さばき髪。腰帯。色入厚板押折。扇子。杖竹。扇

子。刀佩く。大竹を持つ。武器の面。鬼頭巾。但注被の肩取りてする。其時は着付厚板よし。

四 暇の袋

▲シテ男「罷出たる者は。此邊の者で御ざる。某幼馴染の女が御ざるが。見目形見苦うて。朝寐を致し。たま／＼起て大茶を飲む。人事を云ひ。殊に大酒まで飲んで。酔狂を致し。何共迷惑に存ず。何時ぞは去りたい／＼と存る所に。昨日より親里へ歸つて御ざる程に。此暇の状を持せてやつて。去らうと存る。先づ太郎冠者を喚び出し申付う。やい。太郎冠者。在るかやい。▲太「はア。▲シテ」居たか。▲太「お前に居ります。▲シテ」汝喚び出すこと。別のことでない。其方も知る通。女共がわ／＼しうて。何共堪忍ならぬ。夫故暇をやる程に。汝は此状を持て行て来い。▲太「畏つて御ざるが。作去。彼は常のかみ様とは異まして御ざる。私を好いとは仰せられませう。御許容されませ。▲シテ」さや／＼苦しうない。少とも氣遣せず共。返事には及ぬといふて。置て来い。▲太「左様では御ざるが。餘の御事は何なりとも致しませう。此事に於ては。御許容されませ。

▲シテ「扱は汝は。是程にいふに。女共は愉て。身共は何共思はぬか。此上は厭でも應でも遣が。ていと行まいか。刀に手かくる。」▲太「あゝ参りませう。」▲シテ「何と行か。▲太「中々。参りませう。」▲シテ「夫なら早う行て来い。此を持って行て。返事に及ばぬといふて。其儘歸れ。」▲太「畏つて御さる。」▲シテ「早う行け。」▲太「心得ました。やれ。迷惑なことを仰付られた。此状を渡したらば。身共を好いとはおしやるまい。腹を立てらるゝであらう。道行さりながら。主命ぢや。参らざるまい。誠に孫子に傳てさすまい物は宮仕ぢや。やア。参る程にこれぢや。物も。案内も。▲女「やア。今のは太郎冠者が聲ぢや。迎に來たか知らぬ。やア太郎冠者。遅いと思ふて迎に來たか。」▲太「いや。何も存じませぬ。御状が参りました。(狀渡す。女状見る)▲女「なう。」腹立や。妾が男めが。暇の状をおこし居つた。やい。汝は好うこれを持ってうせた。汝まで一つになつて。惜い奴の。汝摺つかうか。嘴付かうか。腹立や。」▲太「いや中々。先づ物を云はさせられ。私に参るまいと申て御されば。行かすば手討にせうと仰せられたに依つて。是非無う持て参りました。何も存じませぬ。」▲女「これは其方がいふ通り。知らぬこともあらう。それ

なら。其方は先へ歸れ。妾が其處へ行て用が有る。それへ行かうと云ふて歸れ。」▲太「いや。御返事に及びませぬ。」▲女「いや。」それでも用が有は。行かねばならぬ。先へ行け。」▲太「心得ました。さればこそ。斯うあらうと思ふた。先歸つて此通り申う。御ざりますか。」▲シテ「太郎冠者。戻つたか。」▲太「歸りました。扱も。」殊の外腹を立てられて。早これへ御ざります。」▲シテ「何しに來るぞ。返事に及ばぬと云はいで。」▲太「さう申ましたれども。行ねばならぬ用が有ると仰せられます。」▲女「なう。」腹立や。藪を蹴出しても。彼のやうな男は。二人や三人は蹴出すれども。騙したが惜い。此袋を持て行て。致しやうが有る。扱も。」腹立や。身が燃えて腹が立つ。やいわ男。よう暇の状おこしたなわ。おのれ喰付かうか。摺付かうか。あゝ腹立や。」▲シテ「やい其處な奴男の一旦暇やるに。此處へ何しに來た。彼方へ行け。」▲女「いかにも其方に執心で來たでも無い。少入道具があつて。取りに來た。」▲シテ「それは何ぢや。」▲女「此袋へ入る程の物ぢや。」▲シテ「それ程の物はやらう程に。取つて行け。何ぢや。」▲女「彼ぢや。(指さし。向を教へ)▲シテ「どれぢや。」▲女「己が欲しい物は是ぢや。(袋を男の首へ被せ。引く。)

▲シテ「やれ。これは何とする。目が見えぬわ。首が締る。許せ〜。▲女「何の許せ。如何でも連れて行て。妾が仕様が有る。▲シテ「わゝ悲しや。最早去るまい。ゆるせ〜」

同引括 大藏流本

▲シテ「是は此邊に住居致す者で御座る。某女共を持つて御座るが。殊の外わゝしう御座るに依て。何時ぞは暇を遣さうと存する所に。此間親里へ逗留に行な程に。汝は此暇の状を持つて行くれい。▲冠者畏つては御座りませんが。これは何卒御免なされて被下い。▲シ「夫はなせに。▲冠「あのおかみ様は。餘のおかみさまと違ひまして。殊の外わゝしう御座る程に。其状を見させられたならば。嗚御腹立て御座らう。何卒御免なされて被下い。▲シ「むゝ。すれば山の神はこぼし。身共はこぼし無いな。▲冠「いや。左様では御座られども。幾重にもお許されて被下い。▲シ「ようおわりや。▲冠「はア。▲シ「總別此間甘やかいておくに依て。方景も無い。此上は行く共行かすとも行かせうが。ていとおりやるまいか。▲冠「先物を云はせられい。▲シ「物を云はせいと。▲冠「参りませう。▲シ「いや。おりにや。参りませう。▲冠「いや。参りませう。▲シ「夫は誠か。▲冠「誠で御座る。▲シ「眞實か。▲冠「一定で御座る。▲シ「これは誠事。使に行てもらひたさのまゝぢや。▲冠「こはい御誠事で御座る。▲シ「扱汝は此状を女共に渡いたならば。見ぬ内に早う居れ。▲冠「畏つて御座る。▲シ「まい。▲冠「扱も〜迷惑な事を仰付けられた。さりながら参らねばなるまい。誠にあのお神さまは。殊の外わゝしうお方で御座るに依て。此状を見させられたならば。嗚腹を立てせらるゝで御座らう。いや。参る程に是ぢや。先案内を乞はう。物申。案内申。▲女「いや。表に聞取れた壁で物申とある。案内とは誰ぞ。▲冠「私で御座る。▲女「まい。太郎冠者。そちらならば他所〜しい案内に及ばうか。なぜにつゝと通りはせぬぞ。▲冠「左様には存じて御座れ共。若御客ばし御座らうかと存じて。夫故案内を乞ひまして御座る。▲女「夫は念の入つた事ぢや。扱頼うだ人に

は變りせらるゝ事も無い。▲冠「随分變りせらるゝ事も御座りませぬ。▲女「夫は一段の事ぢや。妾も早う歸りたうは思へ共。まだちと用が有つて夫故戻らぬ。近々には戻るであらうぞ。▲冠「何が扱。緩りと御用しまはせられて。其上で御歸なされたがよう御座る。▲女「扱今は何と思ふて来たぞ。▲冠「頼うだ人より御文を遣されて御座る。▲女「何ぢや。御文を遣された。▲冠「中々。▲女「やれ〜。ようこそ文を被下た。早う見せい。▲冠「はア。此で御座る。▲女「是へおせ。▲冠「扱私に斯う参ります。▲女「先待て。今文を見て返事を遣らう。▲冠「いや。頼うだ人の御返事には及ばぬと仰せられて御座る程に。置て参りませう。▲女「いや〜。先待て。妾が用の事がある。▲冠「夫ならば畏つて御座る。▲女「や。是は如何な事。やい。太郎冠者。おのれは情い奴の。此は暇の状ぢや。此を持つて参ると云ふ事があるものか。おのれ引裂いてのけうか。喰裂いてくれうか。▲冠「いや。私は何とも存じませぬ。頼うだ人の持つて参る様に仰付けられましたに依り。夫故持つて参りました。▲女「又其つれな事を云ふ。おのれが知らいで何とするものぢや。ありやうに云はすば唯おく事では無いぞ。▲冠「はア。申々。夫ならばありやうに申ませう。私も先斯う御座らうと存じて。色々御断を申て御座れ共。持つて参らぬに於ては。御手討になされうとの御事で御座るに依て。脊に腹は昏られず持つて参りました。私に御恨は御座りませぬ。▲女「何ぢや。手討にせうと云ふたか。▲冠「中々。▲女「すれば汝に罰は無い。そちもよう思ふても見よ。彼の様な男は。藪を蹴ても五人や七人は蹴出さうが。去られたと思へば身が燃るやうに腹が立ついやい。▲冠「近來御尤で御座る。▲女「扱戻つてさう云ふてくれい。ようこそ御文を下されて奈なう御座る。追付夫へ参つて御返事を申すで御座らうと云へ。▲冠「畏つて御座る。夫ならば私はお先へ参ります。▲女「早う行け。▲冠「心得ました。(女は大鼓座へ座若て。袋を懐へ入れて。よい時分を見合せて立つ) なう〜。恐ろしや〜。早う戻らう。いや。申頼うだ人。御座りますか。太郎冠者。戻つりまして御座る。▲シ「まい。太郎冠者が戻つたさうな。女郎冠者。戻つたか〜。▲冠「御座りませぬ。▲シ「まい。戻つたか。▲冠「只今戻りました。▲シ「扱文をおいて来たか。▲冠「されば其事で御座る。私も御文を上げまして。其儘戻らうと致して御座れば。用が有ると仰せられて。

私を留めさせられ。其内に御文を見させられて。殊ない御腹立て御座つて。追付夫へ行て返事を云ふ程に。先へ戻れと仰せられて御座る。▲シ「扱々夫は苦々しい事ぢや。女共がこれへ来てよいものか。夫故渡いたならば其儘戻れと云ふたに。何としたものであらうぞ。▲冠「何となされてよう御坐らうぞ。(と云ふ内に女立て)▲女「やい。わ男。妾をたらいで親里へやつて。よう後から暇の状態をおこしおつた。おのれ何としてくれうぞ。▲シ「いや。なう。女共。扱々そちはむざとした者ぢや。男が暇をやつたに是へ来るものか。▲女「又其つれな事をおしやる。其方の様な男は。籠を置ても五人や七人は蹴出さうが。去られたと思へば腹が立つ。其にありやうに云ふたならば。出て行くまいものでも無いに。誑いて去られたと思へばよいよ腹が立つ。おのれ何として呉れうぞ。喰裂かうか。引裂かうか。▲シ「扱々わ。しい女ぢや。男が暇をやるに出て行くまいと云ふ事があるものか。▲女「いや。出て行くまいでは無い。出て行かうが。出て行くには。塵を結んでなりとも印を取るもうちやと云ふ程に。印をおくりやつたならば出て行かう。▲シ「夫こそ易い事なれ。こりや。塵を結んでやらう。さア。此をやる程に早う出て行け。▲女「なう。腹立や。それは言葉でこそあれ。身に付た物をおこしめ。▲シ「扱々そちは熱の深い者ぢや。さりながら。暇をやる女に何が惜しからう。何なりともそちが好きな物を道る程に。夫を持つて早う出て行け。▲女「すれば妾が欲しい物を何なりと下さる。か。▲シ「中々何なりとも遣らう。▲女「夫ならば妾はあれが欲しい御座る。▲シ「あれとは。▲女「いや。あれが欲しい御座る。(と云ひながら袋を出し)▲シ「あれとは。▲女「此が欲しい御座る。(と云ふて。男の首へ袋を打かけて引行く)▲シ「是は何とするぞ。▲女「妾が欲しい物は此で御座る。▲シ「是は何とするぞ。(と云ひながら袋をばづして逃げ入る)あ。許してくれい。▲女「やい。わ男。どれへ逃ぐるぞ。あの横着者。捕へてくれい。遣らまいぞ。(又シヤギリ止にもする。)

シテ 色無段髪斗目。長上下。
太郎冠者 常の通り。
女 常の通り。袋を持つ。

作物 ちひさ刀。扇子。袋。
晒布一丈五尺。赤巻紙。

五 鬼の養子

▲女「妾は此邊の者で御座る。山一つ彼方に。親里が御座る。久しう参らぬ程に。今日此子を抱いて。見舞に参りませう。道行。久々参らぬが。何事も無いか。心許なう御座る。やア参る程に。茲處は播磨の印南野と申所で御座る。此處は七つさがれば。鬼が出て人を取と申が。心許無う御座る。早日も晩して御座る。人でも連れて参らうものを。心許無う御座る。▲シテ鬼「いで。食らはう。▲女「あ。悲しや。なう。許して下され。助けて下され。▲鬼「いで。食らはう。やい。そこな奴。汝は七つさがれば。人の通らね所へうせた程に。たつた一口にいで食はう。▲女「あ。悲しや。助けて下され。▲鬼「何と助てくれ。やア見れば好い女房ぢや。やい。それなら命を助けてやらうが。已が云ふことを聴くか。▲女「何なりとも聴きませう。▲鬼「それなら。其方を連れて行て。已が女房にせう程に来い。▲女「夫は迷惑で御座る。其上私は夫が御座る。▲鬼「いや。男はあるまう。已が女房にせ

う。▲女「成程男が御さる。夫故此子が御さる。▲鬼「夫でも女房にせねばならぬ。如何あつても来い。▲女「いや〜。夫は無理で御さる。なりませぬ。▲鬼「夫ならたつた一口にしてくれうぞ。いで食はう。▲女「あゝ悲しや。それなら如何なりとも致しませう。助けて下され。▲鬼「何と合點するか。▲女「中々。合點で御さる。乍去。此子は何としませう。▲鬼「其子は已が養子にせう。これへおこせ。▲女「心得ました。抱かせられ。▲鬼「扱も〜。好い子ぢや。能う見れば旨さうな。一口にしてやろ。わん。▲女「あゝ悲しや。其子故にこそ合點もしました。夫なら此方へ其子をおこさしやれ。▲鬼「夫なら食ふまい。とてもこのことに此子を肩に載せて。嘩もので行かう程に。其方も嘩せ。▲女「心得ました。嘩ませう。▲鬼「鬼の養子を肩に載せて。蓬萊の嶋へ参らう〜。扱も〜。能う見れば見る程旨さうな。これは食はねば堪忍がならぬ。一口食ふてやらう。あゝ。わん。▲女「なう〜。悲しや〜。夫を食はしてなるものか。汝がやうな奴は。男には持たぬ。打こがしてやつたがよい。其子も此方へおこせ。なう〜。可怖や。こはや〜。(逃入る也)▲鬼「扱も扱も。女ぢやと思ふて油断して打こがされた。扱もしなした

